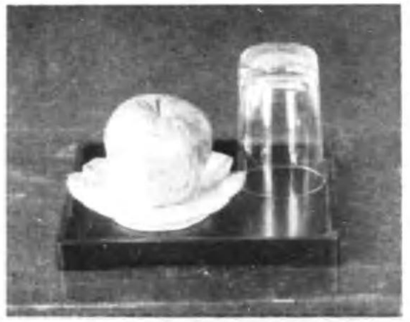
露光量違いの為重複撮影

病弱時代の胃下垂狀況
（黑く垂れたのが胃・丸いのは腎）



改良後の食事（上より朝・昼・夕食）

改良前の食事（上より朝・昼・夕食）

敷地は勿論東京府または市から、無償提供と云ふことになるだらうと思ふが、未だ確定的敷地を見出してはゐないやうである。私の寄附金採納の件も、まだ東京府會で決議したわけでないが、東京府としては建設後少からぬ維持費を要するので、これが財源を見出す必要もあるから、同美術館の實現は、今後多少時日を要するであらうと思ふ」

☆

それから間もない或日の夕方であつた。市の有力者たちから、夕飯を差上げるからお越し願ひたいと云ふ使が見えた。何事か知らんと思つて、その料亭に行くと、間もなく宴席になつて、佐藤は正面に坐らせられた。

「どうしたのかね、僕を正面に据ゑたりしてさ」

「まあいゝ、すぐわかるから君は遠慮せずにそこに坐つてくれ」

「さうかい、まあそれぢや遠慮せずに坐らうか」

みんなお互に顔を見合せて、意味あり氣な顔つきをしてゐる。佐藤は例によつて堂々と不景氣に對する政府の對策を論じ初めた。

「おい佐藤、いつも君は人の顔さへ見れば社說みたいな話ばかりする。時には少し社會欄の艶つぽい

ところも話せよ」

「いやあ、そいつは」

佐藤は近頃うすくなりつつあつた頭へ手をやつて、上半身をちよつとそりかへしながら苦笑した。

「ぢや佐藤君に今日はその柔かな手を御指南いたさう。ときには流行歌の一つも覺えるがいゝな。今日はどうしても一つだけは覺えて歸れよ」

「教へてくれ、覺えるから。しかしこちらはどうも低腦だから、みつしり仕込んでくれないとものにならぬぞ」

「よし、何度でも教へてやる。さあ者共、仕度をいたせい」

途中から芝居がかりの句調になつたかと思ふと、次の間から、爽やかな聲が聞えた。

「長つてござります」

同時に唐紙が左右にさつと開かれると、美しいお雛妓たちがぞろりと坐つてゐて、一齊に兩手をついてしとやかな禮をした。その側の、三味線を手にした數名の姥櫻も、微笑をふくめて會釋した。

佐藤はあつけにとられて、この大がかりな流行歌の教授を見つめた。自分への惡戯であることには一寸も氣がつかない。



やがて老妓の撥が三味線にふれ、雛妓たちが一齊にしなやかな手足をくねらせると、喉自慢の老妓たちがうたひ出した。

〝阿部浩さんにだまされて、ペロリと出した百萬圓〟

佐藤は「いやあ」と頭をかいた。惡童連は腹をかゝへて笑つた。

普通一般の寄附の納入告知書ならば「金壹百萬圓寄附の件聽屆く。何月何日納入すべし」といふのである。學務課長の石田は、特に主席屬の船越を呼んで、鄭重な形式の告知書を發するやうに注意した。

「船越君、佐藤さんは、この百萬圓は自分が一生涯努力して得た總資產の半額だから、三井三菱の百萬圓とは事情が違ふ。その積りで取扱つてもらひたいと云つてゐられた。佐藤さんの精神に對して、型通りの納入告知書ではどうかと思ふね」

「さやうでございます。特に起案いたしませう」

「さうしてくれ給へ。鄭重にね」

佐藤の美術館建設の指定寄附百萬圓が、府に納入されたのはその年の十一月であつた。

物價高の當時のことゝて、それだけでは永久的な美術館が建つかどうか疑問であるばかりでなく、一方にはかゝる美學には美術家も力を致すべきであるとの議論も起つた。そして府には寄附を集める相談を持ちこむ美術家もあれば、各人一點宛の作品を提供し、これを特志者に賣つて寄附する方法を實行すべしと、計畫を持ちこむ美術團體もあつた。

しかし府としては、明年に迫つた博覽會の準備があり、その方面の寄附募集に大童の努力を續けなければならぬ時であつた。加ふるに大戰後の不景氣はいよいよ深刻である。美術館建設の寄附募集にまで手の及ばなかつたのは、むしろ當然であつた。

かくして博覽會の美術館は、一時の設備としてとにかく建てることに決定し、佐藤の寄附による永久的な美術館は、おもむろにこれを計畫することに決つた。

平和記念博覽會は、大正十一年の三月に華々しく開場した。府は全機能をあげてこの事業に忙殺されたので、會期中は美術館問題も中止の形であつた。



博覽會が終ると、いよいよ美術館の敷地が問題になつた。先づ位置の選定が困難であり、次には希望通りの敷地を得ることが、更に困難な問題であつた。このためには、阿部知事からバトンを引繼いでゐた宇佐美知事が、八方に奔走した。或は宮内省に、或は文部省に協議したが、容易に確定することが出來ない。その最中に、大正十二年九月一日を迎へたのである。即ち東京地方の大震災である。府はその應急處置に多忙を極め、美術館の建設はまたまた中止の運命に置かれた。

帝都の復興とともに、美術館建設はいよいよ軌道に乘つてきた。美術家の大多數は、從來の美術展覽會が上野で開かれてきた關係上、位置として上野公園内を希望した。しかしどうしても公園内に適地を得ることが出來なかつたので、止むなく美術學校の敷地の一部を借りることゝし、校長の了解を得て文部省に相談した。

文部省では多少の條件を附して大體貸さうかといふところまで來たときに、宮内省から現在の敷地を永久に無料使用するの恩典を與へられたのである。

宮内省では、大震災後の處分として、上野公園を東京市に下附せられることゝなり、その下附の一條件として、現在の敷地約四千坪を、美術館の敷地として「永久無料使用せしむべし」と云ふ一項を

加へられたのであつた。このやうに、博覽會、大震災、敷地問題でその建設が遲れたわけであるが、このために寄附金は安田銀行にあづけられたまゝになつてゐて、引き出したときには意外の利子が加はり、約百三十萬圓になつてゐた。

また一方、世の中は不景氣になり、物價は著しく下落し、建築費も豫定の如く要しない見込がたつて來た。殊に設計が決定して、いよいよこれを請負はしめるに當つては、一般の公入札をさけて、有力なる建築者三名を府廳に招き、知事自らが、佐藤の奇特なる美擧、並に宮內省の特別なる御配慮を說き、次のやうに希望した。

「このやうな特別なる建築であり、しかも日本文化の精華として、後代に遺るものでもあるから、請負者の側に於かれても、特にこの點を考へて御入札を願ひたい。府廳に於いても、法規の許すかぎり最大の便宜を業者に與へるつもりである」

業者の側も、この趣旨を諒として大奮發をし、株式會社大林組が八十六萬餘圓で請負ひ、附帶工事の一切を含めても、寄附金のみで幾何かの剩餘さへ出るに至つた。

設計は早大教授の岡田信一郎が擔當した。岡田は早くから世界各國の美術館に興味を持ち、その設計を蒐集研究してゐた人である。當時、文部省にも美術館建設の議があり、既に設計圖が完成してゐたので、それも參考にすべく、岡田の設計事務所に廻附されたのであつた。

設計が出來上ると、東京府は美術家の代表三十餘名の參集を求め、その設計書につき協議した。そのときに重要な訂正意見が、朝倉文夫から提出された。それは彫刻陳列室の四方の壁面に竝行して、たくさんの柱が林立してゐる設計に對し、朝倉は「直線の柱は丸味を持つてゐる彫刻の氣分によい影響を與へないから、この柱は壁中におさむべきだ」といふのである。更に設計によると、陳列物を一時收容する地下室が、陳列室の眞下にあつたのを除いて、陳列室の床を下げ、大なる彫刻品の搬入に便するとともに、彫刻と天井との距離を高くすることは、室の氣分をよくするといふので、直ちにその通り訂正された。

かくして、美術の大殿堂、東京府美術館が上野公園の一角に、その豪華なる偉容を誇るに至つたのである。開館式の當日、來賓に配布された「東京府美術館概要」の卷頭に『美術館落成に至る經過の概要』と題する次の一文がある。

☆

曩ニ東京府主催平和記念東京博覽會開設ニ當リ、永久的美術館設立ノ議起リ、大正十年三月平和博覽會記念事業期成實行會大會ノ名ニ於テ、之ガ設立ヲ東京府市ニ對シ建議スルトコロアリ。

此ノ時ニ方リ、福岡縣若松市佐藤慶太郎氏、美術館建設ノ資金トシテ百萬圓ノ寄附ヲ東京府知事ニ申出デラル。依テ府ハ美術家其ノ他ノ關係者ヲ招キテ、設立ニ關シ意見ヲ徵シ、遂ニ府參事會ニ諮リテコレガ寄附受領ノ議ヲ決シ、同年十一月佐藤氏ヨリ現金ノ收受ヲ了セリ。

爾來之が建設計畫ニ關シ、調査考究ヲ續ケ、關係各方面トノ折衝ヲ重ネ、大正十二年七月建設敷地トシテ、東京美術學校ノ一部借用方ヲ文部省ニ申請シタルモ、中途都合ニヨリ計畫ヲ變更シ、同年十二月上野公園内二本杉原約四千坪ノ使用方ヲ宮内省ニ出願シ、翌十三年一月十六日東宮殿下御慶事御擧行ニ際シ、相當ノ條件ノ下ニ無償貸與方聽許ノ御沙汰ヲ拜シ、關係者一同天恩ノ深キニ感銘ス。同月三十一日土地實地調査ノ上、恩借地ノ引渡ヲ了シタリ。

玆ニ敷地ノ確定ヲ見タルヲ以テ、同四日工學士岡田信一郎氏ヲ主任トシテ設計ニ着手シ、概略ノ設計案ヲ作製シ、美術關係者ノ會同ヲ上野精養軒ニ求メ、協議ノ結果、特別調査委員二十二名ヲ擧ゲ、數次ノ協議ヲ重ネ成案ヲ得タルヲ以テ、同年九月工事ヲ入札ニ附シ、株式會社大林組ノ請負フトコロトナリ、岡田信一郎氏設計監督ノ下ニ、十三年九月八日起工シ、十四年四月五日定礎式ヲ行ヒ、工ヲ急ギテ十五年四月、實ニ一年八ケ月ヲ閲シテ全ク工ヲ竣ヘ、我國最初ノ美術館ノ設立ヲ見タルハ、邦家ノ爲メ誠ニ同慶ノ至ニシテ、佐藤慶太郎氏ノ義擧ニ對シ、深甚ノ謝意ヲ表スルモノナリ。

☆

美術館の總延坪は二千六百二十七坪餘で、繪畫陳列室は九百十九坪餘、畫壁延長合計五百三十四間餘、更に彫刻室が三百七十六坪餘、工藝陳列室が二百三十四坪餘であつた。

建築樣式は近代クラシツク式で各正面の中央出入口だけに連柱を建てゝ多少裝飾的に計畫し、その他の部分は無飾平凡の煉瓦壁として、素朴質實な效果を擧げてゐた。構造は鐵筋コンクリートで、屋根は鐵骨小屋コンクリート打、中央大彫刻は鐵骨屋根であつた。この建築に要した從業總延人員は六萬八千八百八十九人である。

完成までに知事は阿部、宇佐美を經て、三代目の平塚になつてゐた。後年宇佐美は當時を追想して次の感懷をもらしてゐる。

『當時私は建築に關して感じたことが二つあつた。

その一つは、佐藤氏が申込の金額を、現金を以て綺麗に納入されたことである。私は役人として奉職中に、往々特志者の寄附申込を受けたことがあつたが、多くの場合に於ては、金額納入について種々の條件が附せられ、これがために豫定の效果の上げ得られなかつたことに、遭遇したことは少くない。これが佐藤氏の場合には、きれいにしかも現金で一時に納入されたことは、實に感激させられた

のである。

もう一つといふのは、建築について美術家よりなる委員會をつくり、建築その他一切の相談をすることにしたのであつたが、從來美術家の間には往々意見を異にし、爭ひが少くなかつた。それがこの委員會組織以來、美術家同志の確執がとけ、これを契機としてその他の事柄まで快く運び得るやうになつたことである。これは日本文化の進歩に、どれだけ大きな寄與であるか知れない。この點からも佐藤氏に深く謝さなければならないのである。

しかも佐藤氏は、百萬圓の寄附をしながらも、建築についてもその他にも、何等求むることなく、自分が寄附者なることを忘れてゐるかの如く、毫も干渉されなかつたことを、私はまことに見事なる態度と思ふのである。

私は東京府在職中、この美擧に對し、表彰を求めたいと考へ、その申請に要する履歴書の提出を、それとなしに佐藤氏に求めたのであつた。ところが折返し佐藤氏からは「自分には履歴とては別にない。書き記す程のことはないから、提出し難い」と拒絶して來た。止むを得ず若松市役所その他に紹介して、僅かにその書類を得て調製し、内申書に添附したやうな次第であつた。

美術館開館式の當日、私は前知事として臨席したのであつたが、佐藤氏が勳三等の表彰に接せられたのを見た私の愉快は、終生忘れ難いところである。』

☆

東京府美術館が、華々しく開館したのは、大正十五年五月一日で、開館第一の展覽會は、全日本の畫壇を總動員した未曾有の豪華版、聖德太子奉賛展であつた。

佐藤はこの開館式に招かれたので、夫人並に繼母と異父の姉二人を伴ひ、四月二十八日上京した。神戸からは佐藤要が乘込み、老人たちの案内役を買つて出た。

四月二十九日午後八時東京着、それから二臺の自動車に分乘して宿につくと、間もなく美術館主事尾川藤十郎が打合せにやつて來た。越えて三十日、威儀を正した佐藤は、午前九時新裝なれる美術館に到着した。そして奉賛展總裁の久邇宮殿下同妃殿下に拜謁を仰せつけられ、感激に胸ふるはせながら、兩殿下のお供をして各館を初めて見て廻つたのである。

五月一日の東京朝日新聞は『立派な美術館を仰いでにこ〳〵顔の佐藤氏、奉賛會展の幕開きをまへに、けふ久邇宮の御巡視』と題し、次のやうな報道をしてゐる。

☆

一日から奉賛展の幕開きと共に開館される、新築の上野美術館を御内見のため、同展總裁久邇宮同

妃殿下には、三十日午前十時半同館に御成りになり、正木美術學校長御先導の下に、二階の日本畫室から洋畫室へと、御巡覽遊ばされた。

横山大觀、川合玉堂、藤島武二、朝倉文夫氏等の大家連が御説明申上げる中に、澁澤老子爵も後からうれしさうに從つてゐる。

廣々とした上に明るすぎる程の室へは、新しい空氣が通風設備の電動力のうなりと共に絶えず吹きこんで來て、とても心地がよい。

兩殿下には大作の前に一々足を留められ、説明者と畫とを見比べて、御熱心な御觀賞振りである。他方洋畫をゴタ〳〵並べた陳列室や階下彫刻室では、同展關係者が多勢集つて勝手な批評にふけつてゐて、中にはあまりの廣さに「出口はどちらだ」と迷つてゐる者もある位。

二十九日夜、わざ〳〵福岡縣若松市から上京した同館寄附者佐藤慶太郎氏は、この光景を眺めて微笑みつゝ「いやどうも立派に出來上りましたなあ。今度は田舍から親戚のおばあさん三人をつれて見物に來ましたよ。私は明治四十年來の炭礦業を去る九年末止めて以後、こんな道樂（社會事業）をしてゐます。この頃やつと事業の整理はついたが、こちらの方は却々止みませんわい。なあに自分一代で得た金は、世の中のために差出さなきや、自分一人で貰うてはすみませんよ」と謙遜する。その背後には、同氏記念胸像が明るく光つてゐた。

☆

この新聞記事には、同館内に設置された、朝倉文夫作の胸像の前に立つた佐藤の寫眞が、掲載されてゐた。

越えて五月一日開館式の朝、佐藤は夫人俊子を同伴して、美術館に乘りつけた。宮内、文部の兩大臣を始め、大臣名士に紹介され、貴賓室に於て勳三等瑞寶章を授けられた。

午前十時半式が始つた。佐藤はこの日の日記に、次のやうな文字を記してゐる。

☆

午前十時半式を始め、式辭、祝辭の後、記念品目錄を受けたるにつき、一寸挨拶す。

精養軒の宴會に臨む。知事、清野復興局長官、宇佐美氏等の挨拶あり、感激甚し。

府廳の自動車にて一同歸宿す。

☆

佐藤は翌二日、俊子をつれて三越に行つた。繼母と姉二人は佐藤要が案内して、日光見物に出かけた後であつた。三越から觀世流の大曲能樂堂に行き、能の見物をした。これは俊子にとつては結婚以

來初めての、心のどかな一日の行遊であつた。

三日には早朝から平塚知事と同道、東宮御所、久邇宮御殿、宮內省、文部大臣、總理大臣官邸に御禮に廻り、それから府廳員と文部省に正木氏を訪ね、商工大臣官邸、賞勳局に禮廻りをしてから、三菱重役會に臨んだ。それが終ると、繼母と姉と俊子の先廻りしてゐる歌舞伎座にかけつけ、孝養の觀劇をした。

四日の夜東京出發、五日宇治山田を訪れて內宮外宮に參拜してから京都に出て一泊、六日には東西本願寺に詣で、京都市內を案內して大阪に立寄り一泊、七日大阪をたつて八日九州に一行とともに歸つた。

繼母と二人の姉の喜びは、たとへやうもなかつた。佐藤も心から滿足して、旅の疲れも忘れた。

# 咀嚼の行者

佐藤の健康狀態は、大正九年の暮、事業界の第一線を退くとともに小康をつゞけてきたが、大正十三年から十四年にかけて、相當ひどくなつた。佐藤の言葉をかりれば「上から下まで、卽ち口から始つて下は尾籠な話ですが痔に至るまで、あらゆる機關中惡くないところは一ケ所もありません。一時は再起をすら危ぶまれました」といふ狀態であつた。

そこでかねてからの野口の注意もあり、東京に出たついでに內科の名醫の診察を乞うたのは、大正十五年の十一月末であつた。三菱鑛業の重役會が終つたとき、佐藤は誰に診察して貰つたらよからうかと、皆に相談した。

「佐藤君、そりや東大の二木謙三博士にかぎる。僕が紹介してあげよう」

と云ひ出したのは、三好重道であつた。ところがすぐそれに反對意見が飛び出した。

「あんな突飛な、二食主義とか玄米食を唱へる奇矯な學者に診てもらうのは止したがよからう。とん

でもないことだ」

といふ工合で、結局二木博士の外にもう一人の診斷を受けて參酌しようといふことになつた。

三好からは「二木博士には旣に依賴しておいたから、明日午前十時、尿と便を持つて白金の內務省所管の傳染病研究所に行くやうに」と、知らせてきた。それで佐藤は十一月二十八日の朝、タクシーで傳染病研究所に乘りつけたのである。

二木は一通り佐藤から今迄の經過をきくと、別に委しい診察もせずに云つた。

「あなたの體は、私の若い頃の體とそつくりだ。だからもし私の說く食餌療法を守るならば、必ずなほる。藥を飲む必要はない」

「食餌療法と申しますと？」

「第一は徹底的に咀嚼すること、第二は玄米を食べること、第三は菜食をすること、第四は晝食を拔くこと、第五は小食、第六は水を飲むこと、これだけを嚴守すれば、あなたの持つてる病氣は必ずなほる」

「はあ、たゞそれだけでいゝのでせうか。藥は飲まなくとも」

「よろしい、たゞそれだけでよろしい」

「先生はそれだけで元氣に働けるのですか、一つ先生の體を見せて下さい」

「あなたは診察を受けにきて、反對に私を診察するのですか」

「いやこれはどうもハハ……」

佐藤は六十を過ぎてゐると思はれる二木が、一本の白髮もなく、光澤のよい青年のやうな皮膚を持ち、活氣にあふれて働いてゐるのを見て、不思議に思ふと共に、心から感動したのであつた。

もう他の醫師の診察を受ける必要を感じなかつた。二木がこの確信をもつて斷言し、青年のやうな健康を持つて活動してゐるその實物標本をみたゞけで、佐藤は最早深い信賴をよせたのである。こゝに救ひの綱がある、是が非でもこれを實行することだ。やり拔くことだと決心した。

かくて美食家佐藤慶太郎は、一轉して玄米主義者、咀嚼の行者となつて、身體改造の一路に足をふみ出したのである。

實行一週間目には、不思議に體の調子がよくなり、一ケ月もたつと病氣を忘れるくらゐになつた。御飯も野菜も、かめばかむ程おいしく食べられる。かうして熱意の出たところへ、二木から贈物がとゞいた。開いてみると、九大教授醫學博士宮入慶之助著の『食べ方問題』並に『續食べ方問題』の二書であつた。佐藤はこれをむさぼるやうに讀みふけつた。二度三度くりかへし、共鳴の個所や重要な

ところは、赤エンピツでしるしをつけた。特に佐藤の共鳴したのは、十六世紀の長壽者『長閑なる老境』の著者コルナロと、アメリカの實業家フレッチヤーの體驗談であつた。

コルナロは贅澤なそして不規則な身の持方をしたゝめ、重い慢性の衰弱に陷つて、胃の調子がくるひ痼痛甚だしく痛風さへ加つて、熱は取れず口の渇きは止まず、まだ四十にもならないのに、この位なら死んだ方がましだとさへ考へるやうになつた。あらゆる醫療を施しても甲斐がなかつた。

死に直面して、彼はある醫人の注意により、飲食の節制を嚴重に守り、身の持ち方を極度に正しくすることにより、一年たゝない中にその病苦を忘れるに至つた。

それ以來、彼は食べた後の工合のよいものだけを、消化され得る分量だけ攝り、食べたもの飲んだもので胃を滿たすことを避け、もう少し食べてもよい飲んでもよいといふときに、食卓を離れるやうにした。彼は「長く食べやうと思ふものは、短かく食べるが肝心だ」といふ諺の實行者となつた。さうしていつもニコ〳〵してゐた。

七十歳の時馬車から落ちて怪我したが「平生の節制法で清めておいた我が血液は、必ず健康をとり返すに違ひない」と信じて、醫者が絶望視した床から再起した。

八十三歳になつても、相變らず元氣で、馬に乘るにも梯子段や山坂をのぼるにも、人手をからず、剽輕な喜劇を書き陽氣な生活をしてゐた。九十五歳のとき書いた「節制生活」を見ても、理路整然として、いさゝかも老耄のかげはない。度々近くの町に旅行し、家にあつては庭園の手入れに餘念がなかつた。

またこのころ、これまで手のつかなかつた廢地の排水や改良のため、二ケ月にわたつて夏の日を泥沼の間に暮らし、疲れもせず、病みもしなかつた。十一人の孫たちに交つて、老いてます〳〵清さと朗さを加へた美聲をはりあげて合唱した。

百歳をかぞへたとき、さすがに最後の近づいたのを知り、死出の用意をとゝのへ、遺言狀を認め、安樂椅子によつたまゝ、安らかに終りを待つた。孫の一人の語るところによれば、外觀には何の變化もなく、苦しさも痛さも覺える樣子は見えず、意識も目付も明らかに爽やかに働きながら、たゞ輕い失神發作があつたのみで、息を引きとつたとのことである。

このコルナロの食生活は、佐藤にとつては正に革命的のものであつたが、彼はよくこれを守つた。コルナロの食事分量の書いてある頁は、何度も何度も讀み、赤インキで線を引き、赤エンピツで丸をつけた。

更に佐藤はフレッチヤーの體驗談を讀むに及んで心の底から感動した。

フレッチヤはアメリカ第一流の銀行家であり、豪商である。ありあまる金にまかせて贅澤の限りを盡くし、美食に耽つた。その結果體重は二十五貫に增大し、所謂重役型に肥滿した。と同時に健康狀態が惡化し、糖尿病や腎臟炎の慢性炎を起して、醫者よ藥よと療養の限りを盡くしたが、更に效果はなかつた。

ところが四十九歲の夏、食物をよく咀嚼して食べれば丈夫になるときゝ、直ちにこれを勵行した。食物を口に入れゝば、數を勘定しながら嚙んだ。肉でもパンでもどろ〳〵になるまでかむ。このやうにしてよくかめば、ぢきに滿腹感を覺えて、食量は前の三分の一程になりその上體重も十九貫程に減じて、見る見る健康を回復した。この時の食事は、馬鈴薯とパンと肉を合計三十口だけ、これを三十分かけて二千五百回かんだのである。しかも食事は朝飯を廢して、午後一時と夜の二回にした。

この食事を續けてゐる中に、肉類よりは野菜を好むやうになり、大好物の酒もいとはしくなつて來た。その代り心身共に爽快を覺え、二十年前のやうに身體は非常に輕くなり、仕事に疲勞を覺えなくなつた。半歲を出でずして、彼はまさしく救はれたのである。前に生命保險を謝絕した會社も、普通の條件で文句なしに契約するに至つた。彼はこの恩惠を謝するとともに、餘生をこの咀嚼の宣傳に捧げ、多くの人を救つたのであつた。

☆

一、腹が大いに空り、なるべくは仕事の後で出て來た食慾が、どうしても食べずに居られないほどになるまで、食べない方がよい。

二、食べる品物をば、食慾の最も好むに任せて選み、順を立てる。その一つ一つの食品を取合せるには、さうやかましく學術上の原則を氣にかけることは要らない。

三、口に入れた一箸の塊は、十分に咀んで碎いて、口內で廻はし、唾液をまぜ、どろ〳〵になるまで揑ねかへす。さうしてもそれを飲み下さず、咽が自然に開いて、ずるりと流れこむのを待つ。口內に殘つた分をば、同樣に仕上げてどろ〳〵にして、それでもまだ殘つた分をば、口から出してしまう。牛乳や他の味のある液體をも、直には飲み下さず、同じやうに扱ふ。

四、食事の時には、唯一心に食べることを樂しむ。おいしいといふ感じを思ふまゝ働かせて、なんでもその人々の口に合ふものを食べるがよい。食事中は心を口の中に集めて、謂はゞ頭で食べぬやうにする。何か氣にかゝることがあつても、食事中は一切考へない。氣持惡く食べる位なら、一度

食事を抜く方がよい。

☆

以上がこのフレツフチヤーの胃腸病患者に與へた處方で、これさへ實行すれば、誰でも必らず彼同様の好い結果が得られると述べてゐる。

佐藤はこれをそのまゝ實行するとともに、二木の主張する完全食を攝取した。その改良前と改良後の或る日の食卓を比較すると、次の通りである。（口繪參照）

| | 改良前 | 改良後 |
|---|---|---|
| 朝食 | 白米飯<br>味噌汁<br>いんげん煮豆<br>卵二個<br>林檎一ヶ<br>漬物 | 玄米小豆飯<br>味噌汁<br>大根おろし |
| 晝食 | スープ<br>ハム<br>ビフテキ<br>パン（バタ）<br>コーヒー | 林檎一ヶ |
| 夕食 | 酒<br>白米飯<br>漬物<br>椀もり<br>豌豆煮<br>いか松風焼<br>まぐろ刺身<br>ゑび天ぷら<br>清汁 | 玄米小豆飯<br>清汁<br>ほうれん草<br>おひたし<br>かつを刺身 |

かうした食事を續けた結果、後には肉屋や鶏屋の店の前を通るのさへ不愉快になり、動物を殺してまで人間は生きなければならないのか、あんな毒々しい物を今までよく食べられたものだなどとさへ思ふやうになつた。

かくて胃腸が丈夫になり、抵抗力が出來ると風邪さへ引かなくなり、七十三歳で流感による急性肺炎で倒れるまで、その健康を樂しむことが出來た。若いころはすぐに疲れた體が、これ以後は青年のやうにいつも潑溂としてゐて、後年別府から汽車に乘通しで東京についても、直ちに待受けてゐる多勢の人に面會し、事務の整理をして休養の必要を感ぜず、朝九時半について夜十一時頃まで、平氣で仕事を續けてゐた。そんなとき訪問者が「お疲れでせう」などといふものなら、「これは怪しからんことを仰言います。疲れてなんかゐません。（お元氣で結構です）と云つていたゞきたいものですな」と冗談を云つたものである。

新榮養法の實行によつて、健康を取戻した佐藤は、過去の自分と同様に、間違つた食生活によつて惱み苦しんでゐる世の人々を見るにたへなかつた。

「自分の晩年に與へられた使命は、これではないか」と、ひそかに思ひふける日もあつた。

彼は斯界の專門家を訪ねて、自分の考へを檢討しようと考へ、野口博士はもとより、九州帝大の宮入博士、東京の額田豐博士や、これと思ふ人々の門を叩いた。後年生活館の役員となつて佐藤に協力した、陸軍主計少將の横田章、同丸本彰造との交友も、かうした關係からであつた。

大正の末、野口が第二回歐米漫遊を思ひ立ち、一番氣にかゝつたのは佐藤の健康であつた。そこで保健上、金持の閑居は自他共に弊害ありと例の如く論じたてゝ、月の三分の一は東京で暮すやうな社會事業を思ひたゝせるべく、しば〳〵その慫慂に努めたのであつた。

東京府美術館の開館式のすんだ五月の末であつた。深川越中島の陸軍糧秣本廠に、佐藤は丸本を訪ねた。これが二人の初對面であつた。

「美術館も落成しましたので、社會公共のために有意義な仕事があれば奉仕したいと考へてゐます。それには、貴下に相談するがよいと、ある人からすゝめられましたので參りました」

「いやあ、それはどうも恐縮です」

「私は生來、病弱な體質だつたのですが、咀嚼主義の實行によつて、この通りの健康を取り戻しました。そこで私は思つたのです。食生活の合理化はまことに緊要事である。何とかして全國民の誤れる食生活を是正したい。丸本さん、私はこのために殘る生涯を捧げ切つても惜しくないと思ふのです。如何でせう」

丸本は初對面ではあるが、佐藤の明朗眞摯な、しかもきはめて信念に富んだその態度に、十年の知己を見出したやうな喜びを感じた。二人は時を忘れて話しあつた。そして別れるときには、誕生して間もない糧友會のための協力を約したのである。

間もなく糧友會(現在の食糧協會)發行の雜誌「糧友」に丸本は『近頃のこと』と云ふ題で、佐藤との會見の模樣を書いた。

大正十五年の七月號に載つてゐるのがそれである。

☆

◇若松市の富豪、實業家のK・S氏來訪され、盛んに咀嚼主義を說かる。氏は二木博士の減食咀嚼法によつて體質一變せられたる歡喜を一般に頒たんと。

◇業成り功遂げて、幾多社會事業に盡瘁されたる氏は、更に今後の半生を、食糧問題に寄與せんとの意氣旺盛なるものあり。第一着に咀嚼減食主義の宣傳に傾倒し、依つて消極的解決に資せんとす

◇氏の曰く「糧友創刊號に（全軍賄料一日一厘を節すれば、約八萬圓を利す）とあり。咀嚼主義の實行に依つて減食すれば、蓋し莫大の利益となり、財政上に一大貢獻あらん。國民一般實行せば、食糧增産計畫より、もつと有效ならん」と。

◇次で曰く「軍隊では咀嚼主義の實行は出來ぬものにや。また肉食はどうしてもあれだけ必要か。ホイト標準ではないか？　宮入博士は（陸海軍兵食は舊知識の標本）と新榮養論に述べてゐるがどんなものか。

◇軍隊で、食物について正確な試驗をして、國民が迷つてゐる榮養上の問題に、徹底的ホントの基準を與へて貰へないものであらうか？　軍隊としても、經濟榮養法の研究は、平常のために必要であるが、野戰給養上に最も必要のことではないか。又國民給養をも背負つて立つ非常時のことを思へば、徹底的基準を得ることは、軍隊それ自身のため必要なことではないか」

◇肺腑を出づる熱言誠語二時間半。

◇我述ぶるに、咀嚼主義は體質改善と食糧問題解決上に必要であることは勿論、更に貴き副産物は精神修養の效果ならん。

◇實際、軍隊で五分間位で食ひ終るが、せめて食事だけはゆつくりと、食事を感謝し、愉快に、外容も內心もそれ〴〵の位置に正坐させ、おちついて味つて食するやうに躾けねばならぬ。

◇軍隊のみならず、國民は「早飯……戰勝の秘訣」といふやうな誤つた觀念があるが、矯めなくては國民を危險に導く。

◇早飯は性急、輕擧雷動性を意味し、好戰性や自殺性を意味し、和衷共同の性に乏しい。實に食事時間の長短は、個人及國民の生存時間と正比例すと早飯亡國論を說き「咀嚼同盟會」「ゆつくり食べよう會」の必要を語り、再會を約して別れる。

☆

越えて八月號には『新榮養法の實行を勸む』と題する佐藤の原稿が揭載された。これは食生活に對する處女原稿で、佐藤は後年「あの原稿は文章に不馴れな實業人の拙筆であるが、私にとつては多忙中の力作であつた」と述懷苦笑したものであつた。發表當時はK・S生なる匿名を用ひてゐる。

## 新榮養法の實行を勸む

佐藤慶太郎

現今、我が國に於て解決せねばならぬ重大問題は、ずいぶん澤山ありますが、私の說かんとする新榮養法に關聯するものだけでも、左の問題を數うることが出來ます。

第一は食糧問題であります。

我が國民の主要食物たる米は、その生產漸增の傾向にあるも、人口の增加と米食者の增加とにより消費はより以上の割合を以て增加するため、さすが瑞穗の國として誇る我が國も、年々不足を告げつゝあります。勿論、朝鮮、臺灣からの移入、海外からの輸入で間に合つてはゐますが、今日の如く米の消費が增加しては、中々に追ひつくものではありません。同時に海外に支拂ふ金は段々と多くなります上に、一朝事あれば米の移輸入は一時止まらぬとは限りませんから、政府當局も自給自足を計るべく、莫大の投資をして增產の計畫をされてゐます。しかしそれが實現するといたしましても、中々急に增產が出來るものでもなし、人口の增加も止みませんから、食糧問題の解決は非常に困難で、むしろ不可能ではないかと思ふ位であります。

第二は保健と能率問題であります。

我が國民は、食物の量、質及び食べ方が間違つてゐるため、健康を害する者が非常に多くあります。現に內地だけで、一年間に百廿五萬餘人の死亡者中、直接胃腸病のため死亡する者が、廿二萬餘人もあります。

その他、食物の關係で死亡する者の統計はわかりませぬが、他分多からうと思ひます。尙死亡せぬでも、胃腸その他食物關係の病人で、全然働きが出來ず、またそれほどでなくとも、愉快に元氣よく働くことの出來ぬ者は、非常に多いと思ひます。或る醫師の談では、食物の關係から生ずる病人は、全體の七割位に當るとのことであります。さすれば、能率の上にも、非常に關係があるわけであります。

第三は物價と勞銀問題であります。

以前我が國では、物價勞銀とも安かつたゝめ、國際貿易上非常に有利な立場にをりましたが、現在では物價も勞銀も高いため、生產費が高くなり、不利の立場にあります。

勞銀を引き下げるためには、物價を安くせねばならず、物價を安くするには、勞銀を引き下げねばならぬと云ふ有樣で、殆んど行き詰りの狀態であります。

第四は人口問題であります。

我が國の人口は、非常の率をもつて增加してゐます。卽ち每年內地だけで六十萬人以上七十萬人全體としては百十萬人にも達します。現在海外にゐる者は、僅か六十萬人位ですから、如何に移民を

奬勵しても、八方塞がりで只南米位に少しづつ送りましても、年々増加する人口の一割にも達することは困難であります。この増加する人口を如何にするか、これはまた困難な問題であります。

第五は思想問題であります。

我が國民の思想は、追々惡化の傾向をたどり、勞働爭議、小作爭議は近來各地に頻々と起り、甚だしきは赤くなるものさへ出來ます。これは、最も重大問題であります。

×

さてかくの如く困難な問題が澤山ありまして、その一つを解決するさへ、なか〳〵容易なことではありませぬ。が若しとゝに、國民一般が實行すればこの難問題の解決が出來、もし全部の解決は出來なくとも、その大部分が解決出來るとしたら、これは是非實行せねばなりませぬ。

然らばその方法は如何、そのやうな不思議な方法ありとは、少々眉唾ものだと思はれるかも知りませんが、手品の種を打ちあければ至つて平凡であります。即ち新榮養法を實行すればよろしいのであります。

ではその新榮養法とは如何なるものでありませうか。

この説明に入るに先だち、御承知を願つておかねばならぬことがあります。それは西洋の諺に「人間は生くるために食ふべし、食ふために生くべからず」といふことがありますが、人間は食はずに生き得れば、まことに結構でありますが、食はねば生きることが出來ませんから、生きるに必要なだけは、是非食はねばなりませぬ。

しかし、徒らに口や腹の可愛さや、その滿足だけに働くやうな情ないことであつてはなりません。このことをよく御承知願へば、新榮養法の實行は、何の苦もなく容易に行はれます。これから、その要領だけを説明いたします。

第一は、食量を減ずることであります。

私共は子供のときから多食に慣らされてゐますため、胃は弛緩、甚だしきは擴張さへしてゐます。日本人で胃の健全なるものは皆無だとさへ云はれてゐます。その弛緩し擴張した胃に、尚ほ一杯つめこみますから、ます〳〵多食になるのであります。

昔から腹八合に醫者いらずと云ふ諺があり、貝原益軒先生もこれを主張されてゐます。西洋でもコルナロは友人の多食を誡しめて、「多く食べようと思ふ人は、なるべく少く食べねばならぬ。食べすぎたものより、食べ殘した分の方が身のためになる」と申しましたが、まことに至言と云ふべきであります。

然らば、どの位食べればよろしいか。私は必要の榮養は、普通食の三分の一で足ると存じますが、十分に見て半分なら澤山と思ひます。しかしそれには、後に說きます「咀嚼」と云ふ條件が必要であります。

第二は、晝食を抜くことであります。

前の飲食物が胃に殘つてゐる間に、後の食物をつめこむ事の惡いのは、明らかな事實であります。大體食事は、いよ〳〵空腹を訴ふるときに攝ることが、當然であります。しかしそれでは、なか〳〵不便であります。

食物が完全に消化するには、普通六時間から八時間を要しますから、晝食を抜くと丁度都合がよろしいと存じます。我が國でも、以前は二食であつたのです。

晝食を抜きますと、正午頃に今迄の習慣上空腹を覺えますが、少し辛抱してをれば、何ともないやうになります。しかし辛抱が出來ねば、水をのむなり果物の一つも食べるなりしますと、次第に何の苦痛もなしに、晝食を抜くことが出來るやうになります。

第三は、動物食を控へ、植物食とすることであります。

これまでは、滋養物と云へば、牛肉、鷄肉、魚肉の如き動物性のものに限るやうに、醫師も推奬し素人も信じ切つてをりました。それ故高價にもかゝはらず、努めて食べたのであります。ところが肉類を澤山食べますと肉中毒を起し、糖尿病、リウマチス、腎臟病、心臟病、動脈硬化、神經衰弱等の原因となります。

これに反して植物性の食物卽ち野菜、果物、海藻類の如きは理想の食物で、動物食の如き害を伴はぬばかりでなく、植物食の人々には心身共に健全、持久力に富み、長命であることは學說上、實務上すでに明らかなことで、西洋の榮養學者は、却つて日本農民の例をよく引いてゐる位であります。それ故、出來る限り動物食を控へ、植物食にいたしたいものであります。

第四は、白米食を廢することであります。

我が國も以前は玄米食でありましたが、生活が贅澤になるに從ひ、次第に白米食になりました。白米は、米から最も大切な部分、卽ち、脂肪や蛋白、ビタミン等を含有する糠を取除き、殆んど澱粉のみが殘つてゐますから、まことに詰らぬものです。それ故是非、玄米、または半搗米を食はねばなりませぬ。

尤も玄米には表皮がありますから、十分咀嚼せねば胃腸を害します。只今でも麥はだいぶ食べられてゐますが、馬鈴薯、薩摩薯、玉蜀黍等を、今少し多く食べるやう奬勵したいものです。これらの食

物は、値段の上から見るも、榮養の點から見るも、まことに結構なものであります。

第五は、なるべく生食することです。

食物中の重要なビタミンや酵素は、煮ること燒くこと等により破壞され易いものでありますから、成るべく生で、皮共に食べることが必要であります。

もし煮るなり燒くなりの必要があつても、ざつと煮燒きをすることです。尤も野菜類を生食する場合には、一般市場から買取つたもの、若くは自作で下肥を使つたものは、消毒の必要があります。それには近頃發表された、水一升に晒粉二滴ばかりを混じ、その中に三四十分間漬けておく方法が、最も簡單だと思ひます。

×

私共は子供のときから、食事に時間を費すと、非常にやかましく云はれ、早飯を奬勵されました結果、食物を口に取り入れゝば殆んど咀嚼せず、鵜呑みして胃に送りますから、完全に消化されず吸收されません。

充分に咀嚼すれば、消化に最も必要な唾液が澤山混入され、咀嚼運動に刺戟されて、唾液が澤山分泌されますし、一面食物は細かく嚙み碎かれますから、消化液の浸潤が容易になります。

かくて充分咀嚼された食物が胃に送られますれば、胃は容易に且つ完全に消化して腸に送り、腸もその役目の消化吸收を完全に果すことが出來ます。食べたものゝ殆んど全部が榮養となり、排泄さるゝものはその殘滓ばかりとなります。たとへ多食しましても、咀嚼を充分にせず、消化吸收が充分出來ないと、食物は大部分直通して排泄され、吸收して榮養になる部分が少いのみならず、細菌や毒素のため却つて非常の害をなします。

然らば、如何なる程度に咀嚼すべきかと申しますと、理想としては、食物が齒にも舌にも障らぬやうドロ〳〵となり、丁度糊のやうになるまで咀嚼すべきで、さうなればわざ〳〵嚥下せずとも、何時とはなしに自然に咽喉に下るものです。

咀嚼を充分にいたしますと、自然に食量が減り、食物の味が非常に美味しくなり、次第に動物食が好ましくなくなり、植物食が尤も美味しく、安心した落ちつきの好い食物となりますから、咀嚼さへすれば、新榮養法の殆んど全部が實行されることゝなります。

咀嚼には、時間を要するから困ると非難する人がありますが、大事な榮養を攝ることに、少しの時間を惜しむなど問題でありませぬ。それになれゝば相當早くなり、また三食を二食にする結果と、食量の減ることにより時間は短縮され、また普通の食べ方なれば食後三十分間以上、運動を控へねばな

らぬが、充分咀嚼すれば、食後直ちに運動しても、敢て差支へないことや、病氣の場合などを考へに入れますれば、時間は問題になりませぬ。

先づこの位の見易い事を國民一般に實行すれば、食糧は三分の一、少くとも二分の一に減じますから、食糧問題などは當分なくなり、保健能率の點も大部分解決され、生活費も大いに節約され、特に勞働者の如く生活費中七八割も食費にかゝるものは、第一に分量の減ることゝ、動物食が植物食になること、白米の代りに玄米か半搗米その他の代用食を攝るため、從來の三割若しくは四割で事足るやうになりますから、そのうちの幾分は生活の向上にふり向けられ、勞銀は十分引き下げることが出來ます。從つて生活費が安くなり物價が下り、貿易上非常に有利になります。原料を輸入して加工し輸出すれば、各種の工業も振興し、從つて仕事も增加し、人口問題も幾分輕減し得ます。また生活費が安くなれば、所謂衣食足つて禮節を知るで、思想問題も大いに緩和されることになります。

新榮養法は、すでに內外の榮養學者により、著書に新聞に、或は講演に力說されてゐるに拘らず、實行者は殆んど皆無といふも可なる狀態にあります。政府當局をはじめ、政治家等におきましても、この點に注目を怠られてゐるのは、不思議といふほかはありません。

私は我が國民一般に、これが實行を勸告するもので、愛國心に富める我が國民は、必ずこれを實行するものと信じます。これから私の新榮養法實行の動機、方法及效果の體驗を述べたいと思ひます。

×

私は生來病身で、特に胃腸が弱く、數十年來食前食後の服藥、卽ち少くとも一日六回の消化劑を絕やしたことなく、また年中數回溫泉に入湯するを例としました。それでも消化は惡く、食前空腹を感ずることなく、腸も時々下痢若しくは便祕し、殆んど愉快に元氣に暮したことはありませんでした。

特に昨年七月からは、胃腸を甚だしく害し、寢たり起きたりといふ生活を續けてゐましたところ、或る榮養學者の勸告により、新榮養法を實行しましたところ、數日にしてその效果著しいものがありました。

これに力を得て續行しました結果は、心身共に健全となり、旣に世事を拋つより外なしと斷念してゐたものが、只今では服藥や溫泉入浴などは思ひ出しもせず再生の感があります。私は殘る生涯を、この新榮養法の宣傳に捧げる決心をし、學者を訪問し、書籍を研究し、愈々宣傳に着手する手順になり、目下その方法を研究中であります。

私の只今食べてをります食物は、一日米五勺、麥一合、合計一合五勺で、これを朝夕二回に分ち、副食物は朝は味噌汁一椀と、大根卸し、果物少量、晩は野菜のスマシ汁一椀、菜の浸し一皿、鮑の肉

少量及び果物を、晝はなるべく抜きにして空腹のときは水に果物少量を攝り、もし中食の必要あるときは、朝夕食で加減することにしてゐます。咀嚼は食物が糊のやうになり、舌にも齒にも障らず、わざ〳〵嚥下せずとも自然に咽喉に入る程度までに致します。

咀嚼の回數は、白米飯なれば百五十回、麥飯なれば二百回以上で、只今では充分に咀嚼せねば咽喉を通らず、また牛肉や鷄肉などは、膳に上つても箸をつけず、むしろいやな感じさへいたします。飽肉は少量食べますが、これも決して好んで食べようとは思ひません。

なほ咀嚼を充分にするために、飯も副食物も蓋物を用ひ、一回口に入れゝば蓋をして箸を置き、口中に食物がなくなつてから、また蓋をとり箸をとるといふことをくり返してゐます。蓋のあけ放しや箸の持ち通しは、早や食ひに陷り易うございます。

以上のやうにいたしますと、食物は完全に消化吸收され、排泄されるものも僅かな殘滓のみで、その量は以前の十分の一よりも少く、糞の形狀も兎の糞の少し大なる位のもので、固い塊が粘液に包まれ、何の苦もなく毎朝三四塊排泄し、臭氣は殆んどなく、排便用紙さへ必要としない位であります。

この體驗によりまして、人も我も如何にとれまで亂暴な食べ方をしてゐたかゞわかり、まことにぞつとするのであります。他の實驗者の有益な例も、相當存じてをりますが、何れ機會を見て他日申述べることにいたします。（了）

☆

佐藤は翌昭和二年になつて、正式に糧友會の役員となり、その發展に盡力し、逝去の日まで變らなかつた。糧友會で何か重要な事業が計畫されると、彼は必ず「おやりなさい。缺損したら私がその分だけは引受けます」と云つて勵ました。昭和四年上野に開催した我が國創始の食糧展覽會の折も、當然缺損を豫期したのに、益田孝、佐藤糧秣本廠長、丸本等と大馬力の資金調達の甲斐あつて、缺損せずにすみ、佐藤がそれを負擔する必要はなかつた。

「丸本さん、あなたの經營がうまいから、また今度も出さずにすみました。よかつたですなあ」と云つた。昭和五年の『日本米食史』の刊行もさうであつた。

この日本米食史といふのは岡崎桂一郎博士の名著で、久しく絶版になつてゐたものであつた。丸本はこの名著の出版を、主食改善運動の一つの手段として、どうしてもやりたいと思つたが、資金の點で當惑した。菊判一千三百六十八頁といふ大册で、實費が一册七圓かゝる出版であつた。後の糧秣本廠長横田章は、丸本に共鳴して佐藤にこの話を持ち出した。横田は陸軍省の衣糧課長時代に丸本から佐藤を紹介され、既に肝膽相照す仲であつたのである。すると佐藤は即座に承知して云つた。

「横田さん、そんな大事な本ならすぐお出しなさい。もし後で困るやうなことがあれば、一切私が引き受けます」

かうして出版してみると案に相違して忽ち大部分賣れ、佐藤は一錢の負擔もせずにすんだ。

また丸本が家庭貯藏壜の大普及を計畫したときも、やはりさうであつた。一回十五萬本の製造に要する費用は莫大である。「この普及が日本の家庭生活に福音をもたらすならば」と、佐藤はその費用を全部負擔する約束をし、自ら丸本の案内で製壜工場を視察までしたのであつた。しかしこれは、製品の置場と販賣方法に困るため中止となり、實現に至らなかつた。

糧友會經營の食糧學校の設立も、同樣な意味に於ける佐藤の贊成が推進力となつて、實現したのである。佐藤はその落成を見ずして逝去したが、嗣子から亡父の遺志をついで同校の設立費に、二十萬圓の寄附があつた。

このやうな一貫した糧友會への盡力は、食生活合理化に對する熱心からであつた。自らの體驗した幸福を、社會萬人に徹せずんば止まざるの、烈々たる社會救濟の念願から出發したものである。

昭和三年の暮、俊子は野口病院に入院し、佐藤は附添つて別府に行き、新年もそこで過した。遂に左の腎臓を摘出することになり、一月十四日その手術が野口院長の手で行はれた。佐藤は病院近くの田の湯に宿を取つてゐて、毎日朝から病院に出かけては看病をしてゐた。

野口病院では、その一月から白米を廢止して半搗米にした。ところが患者は勿論附添からも苦情が出た。野口院長は佐藤に向つて、「白米飯攝取の惡習慣を打破するため、體驗を書いてみては」とすゝめた。佐藤は俊子の容態も日增しによくなるので、看護の暇をみて馴れない原稿を書き始めた。

原稿は十八日から書き初めて、二十日に出來上つた。野口が校閲して、直ちに印刷し、事務室病室等に備へて置くことにした。題は『徹底咀嚼と玄米食や輕搗米食(昭和飯)の實行を勸む』といふのであつた。前掲の『新榮養法の實行を勸む』と幾分の重複はあるが、佐藤の最も力を注いでゐた問題であり、また書き殘した數少い原稿の一つであるから、こゝに再錄する。

# 徹底咀嚼と玄米食や輕搗米食の實行を勸む

佐藤慶太郎

## 一、徹底咀嚼

食物の養分がわれわれの體内に入り、吸收同化されて、血となり肉となり骨となるには、充分消化されたものでなければなりませぬ。

消化の第一着は、徹底咀嚼、即ち食物を充分口中で咀嚼し、唾液を混和することであります。咀嚼の必要は、食物を糊狀に細碎し、消化液の浸透を容易迅速ならしむることゝ、咀嚼運動により、唾液の分泌を盛んにし、且つその運動の反射作用によつて、胃腸の消化液分泌を十分準備せしむることであります。

食物を咀嚼せず丸呑みにすれば、眞の味もわからず、唾液も充分混和せず、消化液の浸透も困難で從つて消化し難く、また胃腸も消化液の分泌を、充分に準備して食物たるお客を待つことが出來ませんから、不意の來客でもてなしも出來ぬといふ有樣で、それでは折角攝取した食物が、消化、吸收、同化して、全部血となり肉となり、骨となることが出來ませぬ。その上徒らに諸機關を過勞せしめ、胃腸中に於て醱酵し腐敗するから、その毒瓦斯は體内に吸收され、臭氣鼻にたへない排泄物が、多量に排出されることになります。

それ故、充分咀嚼せぬ人は、保健上少くとも一日一回は、排便せねばなりませぬ。

これに反して、完全に咀嚼されゝば充分に唾液を混和された食物、特に我々の主要食物たる澱粉の如きは、すでに口中に於て相當消化され、糖化される故、相當の甘味を感ずるもので、その他の食物も、固有の眞味を完全に味ふことが出來ます。

その食物が胃腸に入れば、すでに準備されてゐる消化液は、さつそくその任務を遂行して、完全に消化吸收同化されて、眞の纖維の外は、全部血となり、肉となり骨となり、纖維だけが體外に排泄されますが、それは極めて少量で、七八日に一度排便すれば、差支へありませぬ。もし毎日排便すれば兎糞の如きものが二三塊、苦もなく排泄されるのみで、臭氣などは殆んどなく、排便後用便紙の必要さへない狀態となります。

唾液の消化力について、榮養學者の說くところによれば、食パン一斤を、充分咀嚼して嚥下すればその唾液中に含有する消化力は、日本藥局法によるヂアスターゼの、一日量にまさるとのことであります。

唾液は充分分泌させれば、一日五合以上一升にも上るもので、この天與の大切な消化液を利用せずして、賣藥のヂアスターゼなどにより、消化を助くるなどは、まことに詰らぬことであります。

世人は一般に、食物を充分咀嚼せぬのみならず、皮肉を云へば、如何にして丸呑みにせんかと苦心し、米飯の如きは、茶漬、汁漬やトロロなどで一氣に流しこみ、或は米飯と同時に副食物を攝取し嚥

下しますが、食物が一度嚥下された以上は、如何に工夫しても取り返しはつかず、成行きにまかす外致し方がありませぬから、口中にある間に、充分咀嚼することが必要であります。

かく充分に咀嚼され、唾液を混和された食物は、僅少の纖維を除いては全部榮養になりますから、なにも多食の要は更になく、種々の病原をなすところの多食の悪習慣ある我が國民の食量も、調節され得る筈であります。且つ事實上次第に菜食が好ましくなり、蛋白過剰で種々の病氣を醸成する高價な肉類は、多量に要求せぬやうになりますから、健康は益々増進し、作業能率は高まり、人々は眞面目になつて、食糧、人口、物價、勞銀、思想等の社會的、國家的難問題まで、次第に解決されるといふわけであります。

徹底咀嚼は、長時間を要する故、實行困難なりと非難する人がありますが、我々の健康を維持し増進するに、必要なる榮養を攝取するため、少々の時間など惜しむべきものではありません。

また他の方面の時間を節約して、食事に向けることは容易なるのみならず、普通の食事方法では、食後相當の時間を休養せねばなりませぬが、充分咀嚼すれば、食量が自然に減少することゝ慣れることにより、時間をあまり長く要せないばかりでなく、食後直ちに運動しても、敢て差支へがありませんから、結局時間を要するなどは問題でありませぬ。

## 二、玄米食若くは輕搗米食（所謂　昭和飯）

米糠が、我々の榮養に必要なる、蛋白、脂肪、鐵、燐を始め、カルシウムやヴイタミン等を多量に含有することは、周知のことでありまして、現今我が國民の主要食物たる白米は、殆んどこれら緊要なる榮養素を取り除いた澱粉のみで、云はゞ米の糟であります。

我々の祖先は、德川初期頃までは玄米を食して、偉大なる體格を保ち、健康長命でありましたが、次第に贅澤柔弱となり、一般に白米食をなすやうになつてからは、體格も健康も劣り、短命となりました。

特に脚氣病などは、以前には皆無でありましたが、白米食をなすやうになり患者が續出し、最初は都會のみにありましたが、白米食が田舍にまで普及するに及び、近頃では全國にその患者を見るに至りました。內務省の統計によれば、一年間に該病のため死亡するもの、無慮二萬人以上とのことで、該病にかゝるものは、恐らく數十萬人に上ることゝ思はれます。

我々は速やかに昔にかへり、祖先のやうに玄米食をなし世界の競爭場裡に馳驅して、優者の位置を占めねばなりませぬ。

米糠の榮養價については、故農學博士稻垣乙丙氏が、熱心に研究し宣傳されましたが、それによれば、我が內地に於ける玄米一ケ年平均產額五千八百萬石から出來る全米糠中より、最初搗剝せる部分約一割を取捨てたる殘餘の米糠中に含有する蛋白量は、現時我が國に於いて一ケ年間に屠殺する牛肉中の蛋白の四倍二分、牛乳中の蛋白の二十八倍、漁獲及養殖による魚貝肉中の蛋白の七割二分に相當し、尙熱量(カロリー)は、米の五百四萬石に相當するとのことであります。

かくの如き貴重なる食料が、僅かに糠味噌漬や、澤庵漬等に利用せられる外は、家畜の食料や肥料とされ、甚だしきは遺棄されてゐるといふことは、眞に遺憾の極みであります。

玄米飯は、消化や口當りが惡いとか、不味とかいふものがありますが、それは充分咀嚼せぬか、炊き方が惡いか、なれぬかでありまして、充分咀嚼すれば消化もよろしく、白米よりは美味で、口當りもなれますればよろしくなり、問題ではありませぬ。玄米食になれぬ人は、とかく苦情を申しますが、

そのやうな人は、先づ胚芽米から始め、七分搗、半搗、三分搗から玄米へと、漸次進んで行けば、その實行は容易で、決して困難なものではありませぬ。

要は我がためなり、人のためなり、また國のためになる、この事柄の實行の決心が大事であります。畏くも聖上陛下に於かせられては、輕搗米食を御實行遊ばされ給ふと承る。これは健康と經濟問題のため、國民に範を御垂れ遊ばされてゐることゝ拜察し、恐懼にたへませぬ。それに我々が依然無理解にも白米食を繼續するなどは、誠に畏れ多いことで、即刻多年の惡習慣を打破し、昭和御登極の好記念としても、輕搗米食なり玄米食なりを實行せねばならぬと信じます。

## 三、私の生活現狀

私は生來多病で、特に多年胃腸病のため惱まされ、食前食後、即ち一日六回の消化劑服用を、絕やしたことがありませんでしたが、それでも消化不良で或は筑後の船小屋に炭酸泉を飲み、或は豐後湯の平に入湯し、長年隨分苦心しましたけれどもその效果少く、活動も意の如く出來ませんでした。

偶々大正十四年の末頃から、この道の諸博士や榮養學者の御話を承り、或は榮養に關する著書により、從來の生活を一變し、所謂新榮養法を實行いたしました。その結果僅か一週間位で殆んど病氣を忘れ、その後は少しも消化劑のお世話になる必要もなく、至極健全で活動も出來るやうになり、尙食量も殆んど從來の三分の一に減じ、自然に菜食が好ましくなり、肉類は餘り要求せぬやうになり、その結果大變健康になりました。

これは我が國にとつて、仲々の大問題であると感じ、自分だけの實行に止めず、一般に實行して頂

きたいとの考へから、講演もし、また諸處にて宣傳もし、今は餘生をこのことのために送る決心を致してをります。

私は只今在宅の時は、朝は玄米へ二三割の小豆と少量の食鹽を入れた飯一椀と、野菜、海藻、豆腐等の味噌汁一椀、大根と人蔘の卸し一皿と果物一個、晝はなるべく拔きまして水を飲み、空腹の節は果物一個若しくは薩摩諸一二片位ですませ、晩は朝と同樣の飯一椀、すまし野菜汁一椀、刺身一皿、浸し一皿、果物一個位ですませてゐます。

咀嚼は徹底的にいたします。たとへば玄米飯若しくは麥飯ならば、一口二百回以上、輕搗米飯ならば百五十回以上咀嚼し、他の食物も舌や齒に粒として障らぬ位まで咀嚼しますから、わざ〳〵嚥下せずとも自然に喉を通ります。

食器はすべて蓋物を用ひ、一口々中に運び入れゝば蓋をし、箸を置き、口中に何も殘らぬやうになりまして、蓋を取り、箸を取り、これをくり返し、また飯は飯だけ全部引續いて食べ、他の副食物も同樣で、決して同時や交互に口中に運び入れることは致しませぬ。水は起床後コツプに一二杯、食間にも同樣に一二杯宛飲んでをります。（了）

☆

このパンフレツトは、間もなく刷り上つてきた。本文十四頁、三六判の小册子ではあつたが、各方面から意外の反響があり、好評嘖々であつた。佐藤自身もこれを機會に積極的に普及宣傳に乘り出した。

市内の校長並に主なる教育者を招いて、少國民への普及を切望したのもこのときである。十數名の人々を公會堂の食堂に招待し、この册子を配つてから、永い病弱の身が咀嚼の實行によつて回復した體驗を語り、「是非とも御協力によつて、兒童にこの習慣を與へるべく御努力願ひたい」と懇請したのであつた。

校長連には上等の洋食を御馳走し、自分は肉類拔きの粗末な別皿をつゝいての話であつた。これには世話役の視學も驚いた。と同時に心からの共鳴を覺え、咀嚼の行者たるべく決心した。今宇和島にゐる河野富太郎がそれである。

彼の體驗談をきいて、咀嚼の實行者となり、健康を取戻したといふ者はたくさんある。別府の野口病院長は、胃腸關係の重い病人が來ると、

「俺は診てやるだけだ、治療の大家は前の家にゐる」

と云つて、筋向ひの佐藤の家に紹介してやつたものである。殊にそれが醫者自身であつたり、胃潰瘍といつた病人である場合、見事な成績を上げた。かうして彼の指導による攝生だけで、生命をとりとめた者は何程あるか知れない。

林學博士で、官中顧問官であつた和田國次郎は、若き日の友人である。彼も佐藤によつて咀嚼主義者となり、健康を取戻した一人であつた。

和田は酒豪であつたが、御大葬で京都に行つたとき發病した。醫者から節酒を命ぜられ、漸く手酌だけは止めたが、なか〳〵回復せずに困つてゐた。そこへ訪ねて行つて、咀嚼の效能を說いたのが佐藤である。それ以來、和田は半搗米を食べ、百カミ主義を實行して、醫者の匙を投げた病床から起ち上り、生涯その主義を實行した。

かつて三井の總帥であつた男爵益田孝は、よく佐藤を人に紹介するとき、

「これは日本のフレツチヤー佐藤氏です」

と云つたものだ。これには佐藤が閉口して、

「そのフレツチヤーだけはよして頂きたい」

と抗議を申込むと、益田は眞白な顎鬚をしごきながら童顏をほころばして、

「いや、人を紹介するのは、後々までよく記憶して貰ふためぢやありませんか。それにはこの紹介にかぎる」

と終生「フレツチヤー」と紹介しつづけたのであつた

佐藤が益田に初めて會つたのは、糧友會の丸本の紹介で、昭和三年頃のことであつた。當時益田は糧友會の顧問であり、慶應大學の食養研究所の後援もし、自ら邸內に種々の設備をして、熱心に食糧問題の研究をしてゐた。

佐藤が丸本の紹介で面會を申込むと、暫く返事がなかつた。後になつてわかつたが、益田はその間に佐藤の身許調査をしてゐたのである。これには佐藤もすつかり度膽を拔かれ、「さすがは益田男爵だ、なか〳〵念を入れるものだ」と感心してゐた。

益田の前半生は、そつくりと云つてもいゝほど、佐藤の經歷と似てゐた。三井に關係して以來三四十年といふものは、暇もない多忙な生活で、四五十歲頃には全く健康がくづれかけてしまつた。漸く六十歲をすぎて、三井の劇務から離れ、以來三十餘年小田原の掃雲臺に、閑寂な茶人の生活を送つてゐた。

この八十歳の翁と六十歳の咀嚼の行者との會見は、初對面から意氣全く投合するのを覺えた。佐藤はその日、顏を輝かせながら語つたものである。

「あゝ、今日は生れて初めて、肝膽相照す人に出逢つた……」

昭和十四年の一月、益田は九十三歳の高齢で薨去された。佐藤はその頃熱心に唱導してゐた國民儀禮章を背廣につけて、築地本願寺の葬儀に參列した。葬場は故人の遺志により、花輪も香華もない簡素なものであつた。しかし平常服に儀禮章は佐藤たゞ一人であつたが、彼は故人がそれを一番喜んでゐてくれることを確信し、讀經に耳をかたむけてゐたのである。

佐藤に敎へられて、咀嚼の福音を體得した者は、限りなくあるが、その普及を生涯の事業とし、現にそのために粉骨碎身の努力を續けてゐるものは少い。

ところが、心ひそかに佐藤の後繼者を以て自任し、徹底咀嚼の普及宣傳に、懸命の努力をつゞけてゐる人物が大阪にゐる。三和銀行診療所長の緒方捨三である。

緒方が初めて佐藤に會つたのは、昭和十二年の十一月、別府の佐藤宅であつた。このときは正午から午後五時頃まで、二人は咀嚼と米について、互の體驗を語り合ひ、十年の知己のやうに共鳴しあつたのであつた。彼は大分縣下の緒方村の產で、代々醫を業としてゐる家に生れ、長崎醫大の出身であり「上醫癒國」を終生の念願とし、平素から咀嚼主義を唱導してゐた。

佐藤と會見後の彼は、ます〳〵確信を得て、積極的な宣傳に乘り出した。翌十三年七月十八日の大阪朝日の「靑ポスト」には、『標準食』と題する彼の寄稿が載つてゐる。彼はそれを直ちに佐藤に郵送した。折返し佐藤の返信がついた。

拜復　廿二日付芳翰及び十八日の朝日新聞有難拜受仕り候。朝日新聞はすでに一讀、特に保存致居候。米に對する眞劍の御態度、咀嚼に關する御熱意、失禮ながら感心仕り候。此上とも十分の御努力願上候。

米の種取りから刈入時期に至るまで及び貯藏や脫穀搗精程度、咀嚼消化吸收等に關する研究は、隨分有之候へ共、愈々これが理想的といふ一定の方法確定致さず候につき、小生は米に對する研究所設立の必要を痛感致し居り候處、愈々運動に着手仕り候。熱心なる吉植庄亮氏水害のため御出京六ケ敷候に付、同氏の嚴父庄一郎翁と一條公爵とに生活館にお出を願ひ、米の研究者佐藤長平氏、丸本主計少將と小生の五人にて、二時間に互り相談の結果、愈々協會をつくり、なるべく農林省內

に研究所をつくる運動を起すことゝ相成り、去る十六日吉植庄亮氏、一條公爵と會見、右運動着手の事に決定の旨通知に接し候。

國民の榮養は殆んど米により七十パーセントも攝取仕居候。かくの如き重要の問題が、總て統一もせぬとは遺憾千萬、むしろ不思議の樣に御座候。何處までも研究實驗を積み學説も歸一せしめ、國民に向ふところを知らしめ、健康と經濟に資するは、最も緊要と存じ右の運動を起し候次第に御座候。咀嚼問題については、頃日フレッチヤー氏の著書手に入り候に付、目下譯出中に御座候。それに小生の實驗談を附し、出版の筈に御座候。

生活館としては、雜誌圖書發刊の外、各地に於て講演や講習會を開催致し居り候處、それでは一般に普及不致候に付、今回貯蓄報國生活費三割切下運動を起すことゝし、約百頁のものを起稿せしめ居り候。本月中には確定印刷に附し、全國に約五萬部配布の豫定に御座候。

小生は一昨日當地着、多分八月末まで滯在可致候。若しお暇も候はゞ、御來遊被下度、其節相語り可申候。右迄草々。

これは、湯の平溫泉から出した手紙である。

昭和十五年一月十八日午後三時、緒方は自宅から遙か別府の告別式場に向ひ、瞑目合掌してゐた。胸には嘗て生活館から取寄せた國民儀禮章を帶びて。

「今日からは、咀嚼宣傳の後繼者として、起ち上らなければならない」といふ悲愴な覺悟であつた。その夜彼は佐藤未亡人へ左の書を寄せたのである。

☆

瑞穗國民に米の眞の徹底的研究機關の備へなきを深く慨かれ、その設置に率先せられ、また徹底咀嚼に關しては、貴賤の別なく懇切に導かれぬ。これ全く同胞衣食住是正の一大根源にして、その國家的慧見は他の何物よりも、吾人の深く尊敬措く能はざるところなり。今や既に亡く、再び謦咳に接し得ずと雖も、憂國の靈は連綿として後世に生きん。

☆

佐藤は初め玄米食を徹底的に唱導したのであつたが、一般人にはなか〳〵普及しない。何とか普及させる便法はないものかと、常に苦心してゐたのであつた。たまたま生活館の農村部に行つたとき、タイム式精米機で搗いたものを、糠を篩はずにそのまゝ炊きこんでゐる糠飯を食べ、その美味なのと口あたりのよいのに感心し、以後はこの糠飯の宣傳につとめたのである。

御客があると、糠飯と白米飯と兩方を盛り、「どちらでも召し上つて下さい」と出した。客の方でも初めは義理で食べるのだが、食べてみるとおいしいので、糠飯黨はだん〳〵ふへて來た。後には「健糠飯」と命名して終生その普及につとめたのであつた。

# 鄉土愛

少年の日佐藤は、カーネギーの傳記を讀んで感奮し、他日志をのべ得るの日を迎へたならば、必ず日本のカーネギーたらんと心ひそかに期したのであつた。今や彼は既にその幻に向つて、力强い一歩をふみ出してゐた。粒々辛苦、蓄積して來た財を、惜しげもなく投げ出すためには、必ずや强固なる信念と意志が祕められてゐない筈はない。當時の佐藤がどんな氣持ちから、晩年の奉仕一路へ突進したかは、後年生活館から發行された「新興生活」の第二年九月號に掲載された『金に對する私の信念』を讀めば明瞭である。これは「金の使ひ方特輯號」の卷頭に載せられたものである。

## 金に對する私の信念

佐藤慶太郎

世間の殆んどすべての人は、金を儲けたい、儲けたいで狂奔してゐる。大阪の商人などは、道で人

に逢つたときの挨拶に「このごろは儲かりまツか」といふのが普通である。かく金を儲けたいといふ人の希望を區別すれば、大體左の六通りになる。

第一は贅澤がしたいためである。

贅澤の生活を分けて、衣食住及び酒色とする。

衣服は如何に贅澤してみても、絹織物や毛織物の衣類を、一人で幾十枚も一時に重ねて着ることは出來ない。しかも衛生的見地から云へば、理想としては綿服をなるべく薄着するのがよいのである。

私の友人に、如何なる嚴寒でも、襦袢、袷、羽織各一枚宛で通すものがある。それが皮膚は強く、かつて病臥したことがないと威張つてゐるのである。

また食物であるが、これは如何に大食してみても、一人で一度に米一升も牛一頭も平げることは出來ない。しかも玄米菜食腹八分が人間の體には理想的で、それがまた衛生的であり道德的でもある。大食美食で健康を害し、病氣早老早死してゐる者の如何に多いかは、殊更に私の贅言を費すまでもないことである。

その次には住居であるが、これまた人間が如何に威張つて、大の字なりに寢てみても、一人で二疊以上に出ることは出來ない。それだのに大廈高樓をつくり、人に誇る者がある。私の知人に、八十萬圓を投じて住宅をつくり、大いに得意がつてゐるものがあるが、皮肉にもその相續人は、父が死ねばあんな馬鹿氣た住宅には住まないと、入に洩らしてゐるのである。

それから酒色であるが、世の中には、遠大な理想がないために目前の快樂に耽り、その結果健康は害し、信用は落し、折角苦心して儲けた金もそのために使ひ果し、遂には生活にも困り、果ては自殺する人さへある。

かくの如く、衣食住は人生に缺くことの出來ない必要物であるけれども、それには程度のあることがわかるであらう。程度を超えた贅澤は、健康を害し、道德にも反し、遂には已を裁くものとなる。

第二には、金持として威張りたいからである。

この種の人は理想が低く、たゞ人にもてはやされ、人が頭を下げてくれゝば、自分は餘程えらいものゝやうに得意がつてゐる人々である。それはその人に德望があるわけではなく、たゞ金のため人々が頭を下げてゐるのであるから、もしその人に金がなくなれば、道で逢つても頭を下げなくなるだけでなく、言葉さへかけないやうになるのである。

第三は、子孫に金が殘したいためである。

この種の人は、子孫のためには美田を買はずの反對で、子孫の可愛いさに、出來る限りの金が殘したいのである。私は知人の富豪たちに、常に忠告する。

「親の子に對する義務は、相當の教育を施すまでゞ、それがすめば、所謂ライオン教育で、社會の深い谷底に拋りこみ、自分で發奮せざるを得ない境遇におくにかぎる。それが眞の親の愛といふものである」

財産を殘して徒らに依賴心を起させ、自立出來ずに終らせるのは、親の無慈悲といふものである。私のしるべに、代々相當の田地を所有し、氣樂に暮してゐた者がある。ところが小作爭議が起り、小作人が五年間も小作米を納めないため、收入は皆無となり、だからといつて納稅を怠るわけには行かず、借金が出來て生活には困るといふわけで、何か收入の道はあるまいかと苦心しても、これまで呑氣にブラ〳〵遊んで暮してきたゝめ、何も出來ず悲慘な境遇にゐる者がある。

第四は、たゞ金の溜るのが嬉しいからである。

これはまことに不思議のやうであるが、少々道に外れたことをしても金を儲け、また一面健康を犠牲にしてまで金儲けに狂奔し、そこには何の目的理想もなく、たゞ金のたまるのが嬉しく、それを樂しむといふ類の人々である。

それは丁度、船は航海さへしてゐればよろしく、目的とする港はないといふのと同樣であるが、世間にはこの種の人がずいぶん多いし、またそれを別段不思議がりもしない。

第五は、生活費を得るためである。

自己の生存中は勿論、死後は遺族のため生活費を準備することは、最も必要である。しかし健康上、道德上からみて、最低生活に要する金錢を準備すればそれで充分で、それ位のものはたいした努力を要せずして得られる。

第六は、奉仕したいためである。

人生の眞意義を理解し、皇恩の無限なることや、國家の保護に感謝し、一面業務に精進し、また一面思ひ切り節約して生活費の餘剩を國家社會人類のために貢獻しようとするもので、この種の人にして始めて金儲けの意義があると云へるのである。大體金は使用して始めて價値がある。使用せざる金錢は、紙片や、瓦礫と同樣である。使用してもその道を得なければ、自分は勿論社會にまで害毒を流すから、使用方法が宜しきを得なければならない。

×

金を儲けることは隨分むづかしいが、それを最高價値に使用することは、更に困難である。それが

如何に困難であるかは、米國あたりで使用法を懸賞募集する人があるのに徴しても、うなづけることである。

私は貧家に生れたゝめ親戚の補助を得て、最初は法律で世に立つつもりで明大の前身明治法律學校に入學した。しかし病身であつたゝめ、殆んど半分は病氣で暮し、やつと卒業だけはしたが健康が勝れず、如何に將來の方針を立つべきであらうかと苦慮してゐた。

そのとき或る醫師から「君のその體では、一代勉強の必要ある法律は不適當である。何れにか方向を變更するのがよろしからう」と注意された。丁度そのとき、或る先輩から實業界入りをすゝめられたので、その途に入つたのである。

たま〳〵米國の綱鐵王で、社會事業や教育事業等に數億の寄附をされたカーネギー翁の傳をよみ、翁が糸捲小僧の幼時、十錢の日給中からその十分の一の一錢を慈善事業に使用されたことを知つて、深く感激した。

世の中には、金が出來たら何か奉仕すると云ひながら、終に何事もせずに一代を終る人の多いのに鑑み、生活の安定を得次第、幾分宛使用する方針をたてた。かくて第一に、育英事業に使用することにした。

その結果、幸に今日、學界、政界、實業界に活動しつゝある幾人かの人を惠まれ、邦家のために大いに滿足してゐる次第である。

然るにその後熟考するに、小事業は多人數から零細の金を集めても出來るが、少し纏つた資金を要する事業は仲々困難である。それ故先づ相當の金額に達するまでは使用せずに蓄積し、若し不幸にして中途で斃るゝことがあつても、常に遺言して處分方法を取極めておくことに決心して、育英事業を中止したのである。

しかしその後、かねての弱體に加ふるに目的達成のため、餘りに無理な働きをした結果、大正九年末に至つて非常に健康を害し、衰弱が甚だしく、遂に「營利事業を斷念しなければ生命も保ち難い」との醫師の注意を受けるに至つた。

折角、幾分の資金、信用、經驗を得、知人も出來、これから本格的に働けると樂しんでゐた際として非常に落膽したけれども、生命にはかへられないので、遺憾ながら營利事業を斷念することに決心した。ときに五十三歳であつた。

營利事業を斷念すれば、事業資金の必要はない。それ故生活費を除いた金は、早速使用することに決意し、翌大正十年三月、私の主唱にかゝる石炭調節問題のため上京中、ときの東京府知事故阿部浩

氏と相談の上、東京府美術館建設資金として百萬圓を、東京府に寄附することに決定したのである。

その後、整理の進むに從つて、餘金の生ずる毎に、前住居地の若松市を始め、鄉里や學校等のため幾分纏つた寄附だけで、五十萬圓以上を投じたのである。

×

これで差當りなすべきことは終つた。この上は、相當の纏つた金で何か一廉役立つ事業に使用しなければならないと整理を急ぎ、節約をなすと同時に、生活費以外の財は神樣や國家よりの預り金故、自分は善良な管理者でなければならぬといふ考へから、資金の使用には特別な注意を加へて來たのである。

その結果、昭和八年の末頃には、使用し得る金額は壹百五拾萬圓に達する見込が立つた。それで使途の研究を或る先輩に依頼したのである。しかし「これだ！」といふ使途はなか〳〵見つからなかつた。

私はかねて自分が病身であつたゝめ、榮養問題に携つてきた關係から、相隣する野口博士や嗣子とも種々研究の末、我が國のみならず世界各國民が困つてゐる精神的及び物質的生活の行き詰りを打開することが、もつとも緊急適切な問題であると思ひ、この方面に努力されてゐた山下信義、岸田軒浩兩先生に相談の結果その賛成を得、かつ兩先生は從來關係のあつた他の事業を全然拋棄して、この事業に心身共に打ちこむとの御決心を得、昭和十年二月壹百五拾萬圓を以て佐藤新興生活館を設立することに決定し、翌三月一日丸ビルの四六〇區なる一室で、開館式を擧行したのである。同十月に至つて財團法人の許可を得、來春三月には、駿河臺上に會館の建築竣成の豫定で、その上は計畫の事業全部が實現の運びに至る筈である。

×

私の金錢使用の精神並びに方法は、前述の通りであるが、尙この後も幸に生活費に餘裕が出來ればなるべく生前に使用し、私の死後に殘る遺産は、遺族の生活費を除いては毎年一月一日付の遺言書を以て、使用方法を取りきめてゐる。

私の考へを知らず、佐藤は何のために働いたのか、何のために極度に節約をするのか、實に損な男だなどと批評する人もあるが、私は私の目的たる奉仕を、理想通りに實現は出來なかつたが、幾分實現するその節々の滿足と嬉しさ、それはとても批評する人などの想像も及ばぬところであると思ふ。

金錢蓄積以外、使用することを考へぬ人にとつては、私のやり方が、不思議に思はれやうが、私から見ればさうした人は、何のために働いたのか、何のために金を儲けたのか、むしろ不思議に思ふのである。

私の前住所であつた若松市の石崎代議士の『若松を語る』といふ本には、私の財産に對する觀念を批判して、若松の奇人、否縣下の奇人と書いてゐた。しかし私から見れば私の考へ方が正しいので、一般の人の方がむしろ間違つてゐると思ふ。したがつて「奇人」の名は、一般の人々に返上したいと考へてゐる。

×

あるとき故麻生太吉翁が私に向つて「失禮ながら君は大した資産もないやうだが、よく思ひ切り寄附などをする。まことに感心だ」と話された。私は言下に、「感心と云はれるところから見れば、私のやり方がよろしいとお考へなのでせう。では翁も遠慮なく思ひ切り寄附などされては如何ですか」と申し出ると、「それが出來る位なら、君のやり方に感心などとは云はない」と答へられ、二人で大笑ひしたことがあつた。

私は世人が、何故に働らかねばならぬか、節約せねばならぬか、何のために金を儲けるかをよく理解され、その使用方法を誤られないやうにと云ふことを、切望するものである。(了)

☆

からした信念に生きた佐藤の奉仕事業は、大體事業經營を斷念した翌年、即ち大正十年から本格的に開始された。勿論それ以前にも全然なかつたわけではない。現に佐藤自身が云つてゐるやうに、その育英事業は獨立後間もなく始められたものであつたし、若松病院の研究室への五千圓、事業經營地香月村への自治振興費の一萬二千圓は、何れも大正三年の寄附である。更に大正八年の米騒動には、貧困者救恤のために、市へ六千五百圓の寄附をしてゐる。

しかしこれらは、云はゞ普通世間ありきたりの寄附であつた。佐藤として氣持を打ちこんだ奉仕事業は、大正十年の美術館建設以後に、その眞面目を見出さなければならない。

東京府美術館建設寄附は、この意味で佐藤の新しい生涯への出發點であつた。これを境として、佐藤は從來とは全く異つた世界へ突入したのである。日常の生活も、交友關係も、すべてがこゝで切りかへられたとも云ふことが出來る。彼は今こそ、若き日に描いた幻を追うて、新生涯へと船を進めたのである。

佐藤が美術館建設費の百萬圓を寄附するときには、資産は不動産をも含めて約二百萬圓程あつた。百萬圓の現金寄附をするためには尙數萬圓不足であつた。彼は生涯にたゞ二回の借金をしたが、その

一回はこのときの不足金であつた。

世間の人は、少くとも數百萬の資産があつて、百萬圓の寄附をしたものと思つたのであるが、事實は持てる半ばを、勇敢に投げ出したものであつた。

美術館に寄附した翌年、即ち大正十一年の秋、佐藤は公立若松病院長野口雄三郎のために、別府市に十六萬圓を投じて病院を建設した。

野口は佐賀縣舊多久藩の士族で、明治三十五年第五高等學校醫學部を卒業し、九大創設者で初代の學長たりし大森治豐博士の高弟で、同四十年若松病院に外科醫長として就任してから、佐藤と特別な交誼が結ばれたのである。大森の後任三宅速博士の慫慂によつて、ベルリン大學に遊學したのが明治四十三年、歸朝後大正二年九州大學で研究した論文での最初の醫學博士となり、翌年院長となつたものであつた。

別府の野口病院は、内科的疾病に對する外科的治療所謂内臓外科、就中我國最初の内分泌外科專門の病院なのである。そして同院は我が國唯一のバセドウ氏病や甲狀腺腫專門病院として、國内は勿論日支事變後の外人引上げ前までは海外からも引續き入院し、バセドウ氏病では世界の學者仲間でも有名な病院になつてゐた。

大正十二年には、關東大震災があつた。佐藤はその救援費中に、金五千圓を寄附してゐる。

翌大正十三年一月、佐藤は金十萬圓を投じて、財團法人若松救療會の設立許可申請をした。この財團の目的は、若松市内に於ける保健救療事業をなすことで、主として「若松市ニ居住スル者又ハ其ノ家族ニシテ、醫療ヲ受クル資力乏シキ者ニ對シ醫療ヲ與ヘ、又ハ醫藥費ノ全部又ハ一部ヲ給與スルコト」並に「保健衛生上適當ナル臨時施設ヲ爲シ、又ハ臨時支出ヲ爲スコト」であつた。

その年の五月二十二日、内務大臣から設立許可があり、直ちに救療を開始したのである。昭和十四年度の事業報告によると入院患者の延人員は二千七百八十九人で、その費用合計は四千五百五十九圓六十錢になつてゐる。外來患者の延人員は三千二百二十二人で、その費用合計は千二圓七十八錢を算してゐる。貧しくして醫療の途なき淋しい人々にとつて、これは砂漠のオアシスでなくて何であらう。

越えて大正十五年の暮に、佐藤は二つの財團法人を設立した。一つは自分の鄉里、折尾町本城區に設立した金五萬圓の寄附による佐藤愛鄉會であり、他の一つは夫人俊子の出生地、水卷村立屋敷に金

二萬圓を以て設立した立屋敷神樹會である。

愛郷會の設立された折尾町本城區は、佐藤の生れた頃は遠賀郡の一村であつたが、後折尾町に併合されたのである。戸數約二百、農を主とする者が多い。このなかに佐藤の姓を名乘る家が十餘軒あり、これが佐藤繼信を始祖とする佐藤一族と呼ばれてゐる。

年始盃、共同佛事等で一族の者が集るたびに、話題に上るのは一族の將來についてゞあつた。

事實何軒かの者は、祖先墳墓の地を離れて住むやうになつてゐる。何十年の先きともなれば、或はこの土地に佐藤と呼ぶ一族が住んでをつたといふことさへ自他共に忘れてしまうことがないとは云へない。なんとかしてこの地に、永久に佐藤の姓を殘す方法はあるまいか、など丶語り合つてゐたのである。

かうした經緯もあつて、愛郷會には佐藤の姓が冠せられた。これは佐藤自身「これはどこまでも、われわれ佐藤家のためでありますから、佐藤と呼ぶ名は決して佐藤慶太郎のことではなく、佐藤同族全部を意味する名なのです」と云つてゐる。

財團法人佐藤愛郷會は創立以來實によく郷土のために盡してゐる。精神的な方面に於ては、伏見桃山に本部を持つ興亞報德會の支部を設け、區民の指導に力をつくしてゐる。報德會の創立者花田仲之助翁も、その足跡をこの地の教化に印してゐる。毎月一回の部落常會も、古くから實行され、報德精神は村人の魂に、徐々にではあるが根强く滲透しつゝある。

一方、物的方面では、道路の改修を始め、地方には珍らしい立派な講堂、七十歳以上の老人を招待する敬老會、近隣にはない完備した教育施設等々、枚擧に暇ない程の貢獻をしてゐる。近く區の公會堂も、學校の近くに建築される筈である。

立屋敷神樹會は、夫人俊子の生れ故郷で、遠賀郡水卷村の立屋敷にある。立屋敷は現在三十一戸ばかりの小さな部落であるが、部落の中央に八劍神社があり、その境内に有名な神樹がある。樹は古い公孫樹であるが、その枝から垂れ下つた乳房のやうな樹根の根瘤をけづり取つて飲むと、不思議に乳が出るといふので、近郷はもとより遠隔の地からも參詣者が絶えない。この神樹が部落の精神的な中心でもあるので、財團の名としたわけであつた。

財團が出來てから、神社は見違へるやうに改修され、公會堂は建ち、村里ながら下水道は完備し、毎年一回六十五歳以上の老人を招待する部落全員の敬老會が催される。この日は、老若男女、部落民の全部が一堂に會し、樂しい一日を送るのである。佐藤も度々この會に出席して、驩を盡して喜んで

ゐた。

昭和五年四月に、佐藤は明治大學女子部の建設費として、金六千圓を寄附してゐる。これは佐藤が明治大學の前身、明治法律學校の卒業生であつた關係から、懇請されて大學理事となり、その就任中に穗積重遠等と奔走し、我が國最初の女子部を創設したのであつた。

その後この女子部からは、女子の辯護士や計理士を多數社會に送り出してゐる。その後彼は學長と意見の相違を來し、憤然と明治大學の理事職を去つた。それは學長手當の問題からであつた。當時の學長はお手盛りで、自己の年手當三千圓を六千圓に改訂し、理事會の承認を求めた。佐藤は財政不如意な大學の學長にあるまじき行爲であると憤慨し、その取消しを求めた。ところが心臟の強い相手は取消しどころか、正面からその抗議を一蹴してしまつた。佐藤は持前の癇癪玉を破裂させ、憤然として辭表を叩きつけて去つたのである。

當時福岡縣の知事は、後に警保局長として文化行政に手腕を發揮した松本學であつた。松本は赴任して間もなく、金鷄學院の學監安岡正篤を招いて、一夕地方有志との懇談會を開いた。佐藤も列席した一人であつた。

そのころの國內情勢は、滿洲事變や五・一五事件の直前で、息づまるやうな窮迫狀態にあつた。深刻な農村問題が一方にあり、それと相對して猛烈な左翼の運動があつた。

安岡や松本の主張は、この疲弊のどん底にある農村を救濟し振興するには、單なる經濟更生では根本的な解決は出來ない。要は農村人の奮起如何にある。そのためには、農村の中堅人物を養成しなければならない。

かくて彼等が眼をつけたのは、地主子弟の養成であつた。地主の子弟は、從來の習慣で懷手をしてゐて小作米を食ふか不在地主になるかである。それがます〳〵階級的な間隙をつくり、社會不安をますす原因になる。そこでこれらの子弟に、本當の地主となつて、農村文化の中心となり、小作人と共に働き、また村のために働く人間、勿論自分一家の食べるものは自ら作り、余米は村の文化振興のために費し、云はゞ鎌倉時代の鄕士といつた氣持で働く人間の養成こそ、眞の農村振興でなければならない。かういふ意味に於て、農する武士ともいふべき氣位のある人士を養成しようとして、農士學校の設立をはかつたのである。

この主張に共鳴した麻生太吉の寄附により、最初の日本農士學校が埼玉縣の菅谷に出來たのは、昭

和五年であつた。松本は福岡に赴任すると共に、有志にその必要なる所以を力説したので、昭和六年いよ〳〵それが實現されることになつた。佐藤は最も熱心な共鳴者の一人で、設立に至るまでは勿論のこと、設立後も何くれとなく世話したのである。

學校は福岡市郊外の、早良郡脇山村に設けられた。こゝは御大典の折、主基齋田となつた光榮をになふ土地である。校風はあくまで特色ある塾堂教育とするため、縣費によることをやめて、少數有力者の喜捨にまつことにした。建物も所謂の校舍とは似ても似つかぬ、元祿の名君池田光政公の閑谷學黌にならつた。學生も二十人を越えないやうにし、寄宿舍は日本的な座敷にし、時には香もたき、花も活け、靜かに坐つて風趣を樂しむといつた都市文明を尻目にかけた、農村獨自の文化を體得させやうとしたものである。しかし一方、農事は朝四時から起して、農夫同樣働かせる。同時にまた書寫をさせ、黑田藩傳統の杖術も敎へてゐる。

佐藤は昭和五年と六年の大半を、專らこの福岡農士學校創立のために奔走し、自らも金五萬圓を投じたのであつた。

前年から取りかゝつてゐた別府の新しい住居が完成し、それに引き移つたのは昭和九年六月十二日であつた。何よりも淋しかつたのは、この家の女主人たるべき俊子の姿の見えないことであつた。糟糠の妻の老後を慰むべく建てた溫泉附の新居であつたのに、その落成をも待たずにその人は逝つた。

新しい木の香の部屋に坐しても、佐藤の胸にはみたされぬものがあつた。雨の中をトラックの積荷が續々と運ばれて來た。その日の日記には、

「本日より新宅にて暮す」

とたゞ一行書いてある。

佐藤は別府の野口の住宅に向ひあつた新居に永住の決心をすると共に、永年住み馴れた若松の邸宅を市に寄附しようと考へ、既にその手續をしてゐた。それが六月十六日の市會で滿場一致寄附受納が決定された。

敷地三千二百十一坪餘、建物百五十坪、第一次歐洲大戰當時は一時五十萬圓と云はれたものであつたが、十萬圓と評價した。若松市は前方は洞海灣に面し、後方はすぐ山になつてゐるため、市街地は非常に狹い。しかも石炭の集散地であるため、人口は急激に增して行く。そのため公園一つない、活氣にあふれてはゐるが、混雜した汚ない町である。

佐藤の寄附した三千餘坪の邸宅は、山手の高臺にあつて洞海灣に面し、遠く眺望がきいて若松第一等の地である。宜なる哉、この地は若松築港の當初その支配人であり、曾て侯爵故黑田長成がケンブリヅヂ大學在學中、黑田家から監督として特派されて成功した福澤門下の仙骨高橋達の開墾になつたものである。高橋は特に佐藤ならばと、佐藤の健康のためを思つた野口の肝入りで、高橋宅が大分縣龜川陶冶泉に新築轉住の際讓渡したものであつた。高橋は彼の南京退却で一躍有名になつた、現中華民國駐在大使館公使日高信六郎の實父であり、前侍從武官長海軍中將向井彌一や現西部防衛司令官藤江惠輔等の義兄であり、故福本日南の從兄である。市はこれに佐藤公園と名づけて一般に公開し、その中にある百五十坪の建物は、佐藤倶樂部と稱して種々の會合に低廉な料金で貸してゐる。公園に一基の記念碑があり、その表に次の文字が刻んである。

☆

甲戌之夏六月
佐藤慶太郎氏泉都別府轉住ニ臨ミ記念トシテ住宅及ビ附屬地ヲ市ニ寄ス
此地高塔山麓ニ在リ蒼々鬱乎タル連峯ヲ衝ミ帆檣林立セル洞海ニ面ス心曠ク氣自ラ浩然タリ孤松聲在リ亭ニ凭リ腕ヲ撫シ峽谷ノ碧潭起伏ノ妙綠樹點綴シテ氣象萬千ス精ヲ盡シ奇ニ眩ジ深沈トシテ神ヲ凝ラシム嗚呼夫レ閑雅清秀風致具リ圓寂之境ヲ爲ス題シテ佐藤公園ト曰フ矣
昭和十三年三月　　若松市長　田中無事生撰

☆

ある日佐藤を訪問した雜誌記者が次のやうな談話筆記を發表してゐる。

「自分の物は、自分一人の所有だと思ふのは淺はかな考へです。如何に自分に才智や力量があつても全くの獨力で出來るものではありません。自分の財產は自力でつくつたやうでも、國家の保護、社會の協力、他人の同情なくして何一つ出來るものではありません。生命や財產は預りもの、決して自分一個のものでないかぎり、生きてゐる間不衞生不節制なことをして健康を害ね、充分な活動が出來ず他人に迷惑をかけたり、早死するやうなことがあつては、國家社會に申譯のない次第です。

財產にしても同じことです。生活費と子供の教育費以外は、すべて國家社會のもの、それ故必要あらばいつでもこれを國家社會に奉還すべきものだと信じてをります。たゞ自己に於て保有する間は、身體生命と同樣に、最良の管理者としてこの財力を確實有利に運轉し、やがてこれを國家大衆のためになげうつべきだといふ信念の下に、私はこれまで努力して來ました。そして死ぬまでこの信條は變

ることなく、奉仕が出來ると思つてゐます。

生れつき羸弱であつた私は、五十三歳で醫師から革新的な養生法をすゝめられました。それを守らなかつたら私はとうに死んでゐるでせう。五十三で死んだと思つたら尙更のこと、私の生命と財産は國家社會に捧げなくてはなりません。爾來私は、自分の僅かな遺産を、世の中のために出來る限り利用したいと思つて、毎年遺言狀を書き改めて、いつでも滿足して瞑目する用意が出來てゐます。增殖の目的は何であるか、保健、衞生の目的は何であるか、個人の小さな利益や快樂のためでなく、國家、社會人類の共榮に在ることを確信して疑ひません」

佐藤はかく信じ、かく實踐した。だから一錢の金といへども、死んだ使ひ方はしなかつた。最上の效果的な使ひ方を、常に考へてゐたのである。

糧友會の食糧學校をつくるときも、足らないところは佐藤が寄附するといふことで計畫がすゝめられた。一般の募金がなか〳〵思ふやうに集まらないので、計畫者の丸本は佐藤と相談を重ねたが、佐藤自らの寄附に就ては口に出さない。丸本は遂に最後の切札を出して云つた。

「私も出すから出して下さい。私はあなたの百分の一出します」

丸本がかう云ふと、佐藤はにや〳〵笑ひながら云つた。

「丸本さん、そりやあなたはまだ出さん方がよい。私も出さぬ。もう一努力して、それでどうしても出來ないときまつたときに、二人で出しませう」

かう云つてから、彼は何故今すぐ出さぬかの理由を語り出した。

「今出すことは止めておきませう。私は今すぐにでも五十萬、百萬の金は出せますが、もう少し金を殘しておきたいのです。といふのは、國債消化の問題で、非常に困難な時が來やしないかと思ふのです。私はそのときこそ、全財産を投げ出すつもりです。百萬も投げ出して、國債買入れの補助にあてれば、ずいぶん多額の消化が出來る筈です」

佐藤はこれを最後の御奉公と心ひそかに期してゐるらしかつた。その方法といふのは、佐藤の頭の中では既に細かな計算が出來てゐたやうであつたが、殘された書類の中にそれの見當らないのは殘念である。ともかく百圓のもの丶口錢が十錢である場合、それに更に十錢の補助を出せば二十錢の口錢となつて、消化が急速に行はれるであらう。假に證券會社が五百萬圓引受けるその口錢が五千圓ではまづ手を出さなくとも、倍の一萬圓になれば喜んでそれを引き受けるであらう。さうしたことのために、殘る財産を使ひ果し、幾千萬かの國債消化を實行しようと考へ、祕かに野口博士、上海の佐藤要

や嗣子與助にもその計畫をもらし、その案の檢討を依頼してゐたのであつた。

惜しむらくは、その實行を見ずして逝つたことである。しかし、佐藤が現存してゐたとしても、まだ幸にしてその實行を必要とする危局にまでは立ち至つてゐない國家の現狀を、地下の彼はどんなに喜んでゐることであらう。

# 大施

# 海越えて

朝から降り出した五月雨は、なか〳〵止みさうにもなかつた。雨に打たれた窓硝子を通して、風景畫のやうに丸ビルがけぶつて見え、いつも騷々しい驛前の廣場も、なんとなくひつそりとしてゐる午後だつた。

佐藤は親友の大貝と、一枚の印刷物を前にはさんで鐵道ホテルのパーラーで話してゐた。大貝は若松の晝餐會の仲間で、日本調味料會社や戸畑鑄物會社の重役で現商工省特許局長の養父である。佐藤には合性で話相手の尤なるものであり、また稀に見る經濟通である。昭和六年五月一日の午後二時ごろであつた。

「なあ佐藤君、一緒に出かけよう。こんな機會は仲々ないから決心するんだな」

「うむ、お前が行くなら、これは考へずばなるまい」

二人の前に置かれた印刷物は「世界一周實業視察團」と題した、次のやうな趣意書であつた。

☆

ルドルフ・モツセ會社、ハンバーグ・アメリカン汽船株式會社、キユメード汽船株式會社、日本郵船株式會社及び、ジヤパン・ツーリスト・ビユーローの助力により、三十一年式の粹を集めた趣味と實益百パーセントの世界一周計畫が完成しました。歐米の文化を一眸のもとに收め、且つ經濟發展の寶庫を併せ視察せんとする方は、此の機を逸せず御參加下さい。

☆

これはこの前年組織された日本貿易振興會の主催する、世界一周實業視察團の團員募集でメ切はあと十日に迫つてゐた。佐藤は食指大いに動いた。といふのは、今や彼は自己の持てるすべての富を、最も有效に社會公共のために使用しようと決意してゐたからである。それに着手する前、世界を一周して、先進諸國の施設も見ておきたいし、また實業人の一人として、我が國の貿易問題に無關心ではゐられない、いやこれは誰に頼まれなくても、彼自身國民としての魂が、默視してゐることを許さないのであつた。しかし健康を取戻したとは云へ、まだ體については確信の持てないやうな不安も、どこかの隅にはあつた。

二日は、埼玉縣の菅谷の日本農士學校を視察に行き、終日忙しく走り廻つたので、三日の朝いよいよ決心して大貝に電話すると、既に歸鄕した後であつた。佐藤が東京の用事をすませて、九州の土を踏んだのは、五月六日朝であつた。戸畑につくと直ちに、若松の大貝を電話に呼び出した。

「行くと決心したよ、よろしくたのむ」

「さうか、それはよかつた。ぢや今日の晝餐會のとき委しいことは打合せよう、ではさようなら」

鹿島立ちは六月十八日の午後三時ときまつてゐた。横濱出帆の郵船太洋丸である。

佐藤は六月十三日若松を出發して、翌十四日東京につき、諸用を足してゐた。ところが十四日の午後突然胃に激痛が起り、數度吐瀉しそれには少量の血液さへ交つてゐた。醫師を呼び、看護婦を頼んで應急の手當をしたが、なか〳〵痛みは止まず、翌朝まで持ち越した。午後になり漸く痛みが止つたので、齒醫者に行つたり、買物などをして出發の日を待つた。

十六日には別府の野口もわざ〳〵健康診察をかね見送りに上京して來た。嗣子の與助、甥の山本魯一郎、佐藤要等がそれ〴〵身の廻りの世話をやいた。

十八日の午後三時、五色のテープの尾を引いて、太洋丸は横濱の棧橋を離れた。一行は東京麴町區の衆議院議員岸衛を團長に、日本貿易振興會專務理事木下乙市、大阪の內外綿株式會社技師高正義市

若松市の戸畑鑄物株式會社重役大貝潜太郎、兵庫縣御影町の實業家山口春治、函館市の海運倉庫業の齋藤五一郎、それに佐藤の八名であつた。

六月十八日に横濱を出帆して、十月十日神戸に歸着するまでの豫定は、先づハワイからサンフランシスコに渡り、アメリカ大陸を横斷し、大西洋に出て歐洲諸國を一巡し、地中海からスエズ運河を通り、エジプト、印度、南洋、中華民國諸港を經て神戸に歸着するもので、所要日數百十五日であつた。

團費は當時四十九弗の時代のことゝて金五千三百五十圓であつた。これには陸上の食費とか旅券の裏書料入國稅等は含まれてゐないが、案内書によれば、それらと小遣とで普通二千圓程度あれば樂であらうとある。佐藤は正金銀行の二千五百圓の信用狀を、携行したやうである。

明くれば十九日、青海原の太平洋である。無電は佐藤と大貝にあてゝ、共通の友人から次の一句を送つてきた。

「風香れ太平洋の友の袖」

懸念した胃痛も再發せず、だいぶ快調であつた。佐藤は終日デツキゴルフに興じた。夜は同船の長尾半平と、禁酒問題に花を咲かせた。長尾は人も知る禁酒運動の權化である。彼の在るところ、必ず船客の話題は禁酒問題にいつの間にか引きこまれてしまう。禁酒の圓卓會議は、殆んど連日太平洋の波の上で開かれたのであつた。

由來佐藤は議論好きな男として有名である。これは既に、鄕里吉田の塾堂にあつた少年のころから現れた傾向であつたが、後年ます〳〵その鋭鋒を加へた。情にはなか〳〵屈しないが、理路整然たる議論には大概コロリと參る。「論說居士」と誰からかニツクネームを奉られてゐるが、實に適評である。彼の世間話は、所謂三面記事に相當するものはなく、徹頭徹尾、論說だけなのである。經濟問題に出發した議論は、必ず社會改良問題に發展し、食糧問題、榮養問題を一めぐりし咀嚼問題に至つて結論となる。「佐藤の話は固くて困る。あんな話ばかりしてゐて、何が面白いのかなあ」と、一部の友人は不思議がるのである。

この佐藤と、禁酒の神樣長尾との取組みであり、それに無聊な船旅ときてゐるから、二人の話の熱したのに無理はない。後年佐藤は、禁酒新聞記者に對し、當時を思ひ出して次のやうな談話をしてゐる。

『談偶々二十五歲禁酒法にも及んだのであるが、私はその話をきいて「この法案は駄目だ、今のや

り方ではモノになりますまい。これには少くとも二つの無理がある。その無理の一つは現在未成年の禁酒法があるが、それを過ぎたものは幾分既に飲酒癖を持つことにもなる。既に飲酒癖のついたものを、二十五歳禁酒法が出たからといつて、元に引戻さうとすることは無理である。もう一つは二十歳から二十五歳までの者を一概に禁酒せしめることは、酒造業者にとつて相當の打撃ともなるべく、從つて業者側の根強い反對がある理である」ことを指摘し、「その對策としては一時に二十五歳とせず、現に二十歳の者を先頭として、以下年々漸進法をとつて一歳づつくり下げ、五ケ年間に二十五歳に至らしむるやうにしてゆけば、少しの無理もなく、業者側にしてもこれならその打撃も極めて緩やかで、その間に轉業なり、減石なり、適當の對策を講ずることは必ずしも困難なことではない。それにしても、何も二十五歳と制限する必要はない。二十六歳、二十七歳、二十八歳と年々擴大して、五十、六十にも至らしめるがよいと思ふ」といつたら、長尾氏は「成程それも一案だ」としきりにうなづいてゐられた。

それからまた世間には「禁酒は教化によるべきもので、法を以つてすべきではない」といふやうな説をなすものもあるが、それは間違ひである。手近な例としては、あの痰を道路に吐くなと云ふことなどでも、これまで隨分と喧しく云はれて來たのであるが、なかなか實行されなかつた。然し一度警視廳からその取締令が出ると、漸く行はれるといふ現狀にあるし、米の混砂搗精禁止にしても、その害の喧傳されたゞけでは、なかなか實行が困難であつたが、近來政府のお聲がかりによつて、各府縣の法令も布かれ、急速に行はれ始めてゐる。

これと同樣なことは酒に對しても云はれるのであつて、これを國民の自發心のみに任せておくといふのは、一片の理想論にすぎない。現實は、教育と同時に法律が必要で、青年禁酒法はこの最少限度的な要求であるといつて差支へないものである。さりながら、これらの問題の解決は、たゞ單に法的依存のみを以て最大の效果をあげ得るといふのではない。一面教化の必要なるは勿論で、今更贅言を要しないと思ふ。』

これは昭和十四年の二月ころの談話で、その頃二十五歳禁酒法は青年禁酒法と改められ、法案内容も前述のやうな漸進法を採用し、議會に提出されてゐた。佐藤はその長い炭礦業の體驗から、從業員の禁酒が採炭能率を高め、災害を減らし、收入を增進してゐることを知つて、その通過制定を要望してゐたのであつた。

船中の生活で、佐藤が大いに同室の者を困らせた話がある。といふのは、彼は午前四時になると起

きてしまふ。さうして先づトランクの整理を始めるのである。一日といへども、この整理を休まない。朝起きたときキチンとしておかなければ、氣がすまないのである。

同室の者は年が三十も若い。十歳違へば睡眠は一時間は違ふものである。だからどうしても三時間の差が出來る。

佐藤はトランクの整理がすむと、手紙を書き、甲板を散歩して朝の空氣を胸一杯に吸ひこんで歸つてくる。まだ若い方はねてゐる。

「まあよく寢られるものだ。これではまるで、寢て暮すために生れてきたみたいだ。僕等は何萬圓貰つたつて、こんなには寢てゐられないね」

「僕はまた何萬圓貰つたつて、暗い中から起きてトランクを整理し、手紙を書いたり散歩したり、船の中まで忙しく暮すなんてことは御免ですね。さう大きくもないトランクを、毎日よくも整理することが出來ますね。一體どんな整理をなさるんですか」

「なる程、理屈はどうにでもつくね。朝寢の辯解か」

と佐藤が皮肉つたつもりでゐると、

「睡眠妨害ですよ。僕は部屋をかへて貰ひますから、老人は老人同志として大貝さんとでも一緒に精々早起をして下さい」

●

船に乘つて數日たつて、胃腸の心配は全くなくなつた。佐藤は案内役の木下乙市に、

「木下さん、おかげですつかりよくなりました。出發の時には、近親の連中がどうでも中止しろと云つてきゝませんでなあ、僕は一旦こゝまで乘り出したものを死んでも止めないといつて頑張つたものです。それみろ、東京邊の醫者の云ふことをきいてやめたら、大恥をかくんだつたと電報を打ちますよ」

●

と笑ひながら話した。事實佐藤はこの旅行で健康に確信が持てた。不思議に工合がよくなつた。それは規則正しい食事と、パン食と菜食を攝つたこと、終日愉快に運動をしたことなどが原因であつたらう。歐米には、どのホテルに行つても菜食主義者の料理といふのがある。佐藤はそれのみを食べて廻つたから、費用が安くて、しかも健康には非常によかつたのである。

六月二十七日午前十時すぎ、太洋丸はハワイに寄港した。パインアツプル園を見に行くと、三十年もそこにつとめてゐるといふ日本の爺さんが、鮪でも料理するやうな手つきで、パインアツプルを切

り、俎にのせて差出した。

「パインアツプルだけは、罐詰がうまいと思つてゐたが間違ひだつた」

とそれを頬張りながら佐藤が云ふと、函館から出かけて來た齋藤は、ホームシツクを起して云つた。

「パインアツプルに限らんよ、鮭だつてさうさ。北海道の本場へ行つてみたまへ。東京などでは食べられない好いものがあるのだ。あゝ鹽引が食ひたい！」

ハワイからサンフランシスコまでの海は、相當に荒れた。佐藤は案外平氣で、大抵食堂に顏を出してゐた。大波のうねりを見ながら、案内の木下が、

「佐藤さん、この海の波で電氣を起す裝置がありますよ」

「ホウ、どこにありますか」

「フイラデルフイヤの附近です」

「是非見たいですね。私は今まで、何とかこれを動力に利用出來ないものかと考へてゐたのです。瀬戸内海の鞆の津、あそこの黒潮が利用出來れば、無限に電氣が起せますね。木下さん、是非そこへつれてつて下さい」

佐藤は熱心に、この問題を考へた。時間の關係上その發電裝置を見ることは出來なかつたが、終生佐藤の頭からこの問題は消えなかつた。

サンフランシスコには七月四日の午前に着いた。三菱支店長其他の出迎を受け、アメリカ大陸に一歩を印したのである。

一行はオークランドに渡り、ヨセミテ溪谷を見て南下し、ロサンゼルス、ハリウツド、ヴエニス等を視察し、サンタ・フエ線で車内華氏百十度の砂漠の熱風を越え、七月十一日の朝ロツキー山脈中のグランド・キヤンヨンについた。六千尺の高原に立てば、見下す地球の割れ目一哩半、その底に引かれた銀河の一線は、メキシコへ流れ行くコロラド河の上流である。仙人の休場とか、戀人の小徑とか名づけられた突端や谷間へ、立派な自動車道路が通じてゐる。

衆議院議員の岸と、論説居士の佐藤は、見るもの聞くもの議論の種ならざるはない。すべては祖國の現狀と比べ、痛憤の種となるのである。

「岸さん、このセメント道だ。日本も觀光事業とか、國立公園とか云つても、この道をつけることが先決問題ぢやないかね」

「さうですとも」

「セメントは餘つてる、人は餘つてる、おまけに金もあまつてゐる日本だ。道路開發といふことが、産業振興の根幹ぢやないかね。民政も政友も、これには異存がない筈だ。岸さん、頼みますよ」

「その通り、その通り。歸つたら我輩も、議會に道路建設を絶叫しますよ」

一行はシカゴを視察し、デトロイトに行き、それからナイヤガラの瀧を見物した。ニューヨークについたのは、七月二十日の朝であつた。かくて二十六日の午後ボストンを出發してヨーロッパに向ふまで、フイラデルフイヤ、ワシントン等の見學をした。

佐藤はアメリカの明朗さ、若々しさには感心したが、どうにも我慢のならないことがあつた。それは極端な女尊の習慣である。どのホテルに行つても、エレベーターでは婦人を先に入れなければならないし、妙に氣取つた婦人の、指にはさんだ煙草の喫み方もいやであつた。そしてチューインガムをかむ國から、一刻も早く逃れたいと憤慨した。

「鄕に入つては鄕に從へだから仕方がないが、實になつちやをらん、早く歐洲へ行きたい」

佐藤はこの點で、アメリカに愛想をつかしたのであつた。

☆

リヴアプールについたのは、八月三日の午後であつた。アデルヒ・ホテルに投宿すると總領事の岡本一策が一行を訪問し、英國の現狀を語つてくれた。

「戰後英國は、大邸宅に重稅を思ひ切つてかけるので、大邸宅の値段は一割か二割に下つてしまひました。ですから富豪は持ちきれず、市や公園に寄附する者が多くなりましたよ」

岡本領事がかういふと、眞先に賛成したのは佐藤である。

「成る程、さうでせうとも。慾の皮のつゝぱつた日本の富豪も、さうなつたら眼がさめるでせう。さうなつた方がいゝですがね」

その翌日にはレバーブラザース會社の石鹼工場を視察し、その大規模なのに驚いた、石鹼工場だけで大きな町が出來てゐた。原料も世界各地から集めるが、製品も全世界に送り出し、説明書は百以上の國語を使用してゐる。資源の少い日本でも、やりようによつては、どんな大事業でも出來るものだと、感銘深いものがあつたのである。

この工場を見るまでは、資源に惠まれてゐない我が國の將來に對して、大きな不安を持つてゐたが

露光量違いの為重複撮影



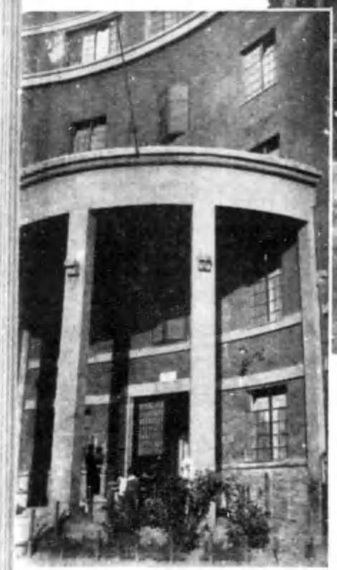
との時以來佐藤の頭には、無限に發展して行く日本の幻が見えて來た。「日本は大丈夫だ」といふ喜びと安心が、佐藤の心を明るくした。そして遙々と祖國を後にして世界一周の旅に出た目的が、既に達せられたやうな喜びを感じた。

午後にはマンチエスターに向ひ、有名なヴイカース工場を見たのである。その夜は日本の名譽領事のグローヴス少佐の宅に招かれ、夜遲くまで主人公自慢の日本陶器を見せられた。佐藤は別に陶磁器には興味はなかつたが、グローヴスがその蒐集した大切な品の大部分を、博物館に寄附してゐることゝ、骨董的でなく學問的に取扱ひ、それを社會的に用ひてゐるのに感心した。これは佐藤の晩年にとつて、大なる示唆となつたものであらう。

ロンドンでは三菱社員の案内により、各所の見學をし、八月九日ドーバー海峽を渡つて、夕刻ベルギーのブラツセルに着いた。佐藤はこの旅行中、買物といへば繪葉書だけといつてもよかつた。その繪葉書で毎日暇さへあれば知己朋友に便りを書いた。その佐藤が何と思つたか、こゝでは有名な「小便小僧」を買つた。

翌日は終日ブラツセルの見學に費した。ウオーターロー古戰場のパノラマ、ウエリントン將軍の大本

(國米)てに園公テミセヨ



たし觀參に心熱
マカルセ農園入日

學見トツミラピノトプヂエ

露光量違いの為重複撮影



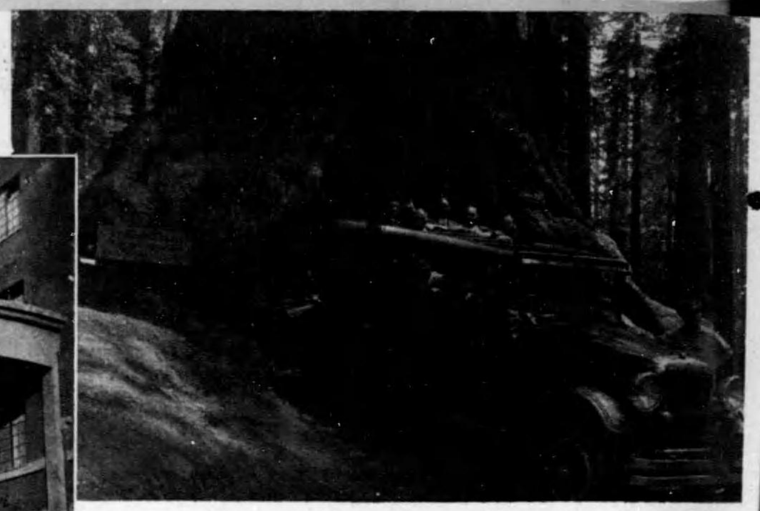
との時以來佐藤の頭には、無限に發展して行く日本の幻が見えて來た。「日本は大丈夫だ」といふ喜びと安心が、佐藤の心を明るくした。そして遙々と祖國を後にして世界一周の旅に出た目的が、既に達せられたやうな喜びを感じた。

午後にはマンチエスターに向ひ、有名なヴイカース工場を見たのである。その夜は日本の名譽領事のグローヴス少佐の宅に招かれ、夜遲くまで主人公自慢の日本陶器を見せられた。佐藤は別に陶磁器には興味はなかつたが、グローヴスがその蒐集した大切な品の大部分を、博物館に寄附してゐることゝ、骨董的でなく學問的に取扱ひ、それを社會的に用ひてゐるのに感心した。これは佐藤の晩年にとつて、大なる示唆となつたものであらう。

ロンドンでは三菱社員の案内により、各所の見學をし、八月九日ドーバー海峽を渡つて、夕刻ベルギーのブラツセルに着いた。佐藤はこの旅行中、買物といへば繪葉書だけといつてもよかつた。その繪葉書で毎日暇さへあれば知己朋友に便りを書いた。その佐藤が何と思つたか、こゝでは有名な「小便小僧」を買つた。

翌日は終日ブラツセルの見學に費した。ウオーターロ古戰場のパノラマ、ウエリントン將軍の大本

熱心に參觀したカマルセル農園入口



ヨセミテ公園にて（米國）

エヂプトのピラミツト見學

營跡、ビクトル・ユーゴーの世界的傑作「レ・ミゼラブル」執筆の家などを見て廻り、十一日の朝こゝを發つて風車とクリームの國オランダに向つた。

ヘーグに着いたのは正午頃であつた。一行は直ちに、平和宮に向つた。これを見る佐藤には、一つの感慨があつた。といふのは平和宮は若き日彼を感奮せしめた、アンドル・カーネギーの寄附によつて建設されたものだからである。カーネギーはこのために、私財百五十萬弗を投じた。彼は自叙傳に「平和殿といふやうな、最も神聖な目的をもつて建設される、世界の最も神聖な建設物に對して、資金を提供する高尚な任務を、一個人が果し得るといふことは、その人にとつて實に過分の名譽かと思はれる。此の殿堂は、墮落せる神の子等にとつて、最も必要な平和を招來することを目的としてゐる。(神に捧ぐる最も高尚なる禮拜は、人間に奉仕することである)とある。おこがましいことではあるが、余も亦ルーテルやフランクリンと共にかく感ずるのである」と書いてゐる。心中祕かに日本のカーネギーを志して來た佐藤にとつては、感無量なるものがあつたのである。

一行は、各國皇帝から寄附された名品を説明された後、二階正面の大廣間に案内された。案内人は一段と聲をはり上げて「これは日本室です」と云ふ。室には、日本畫の大壁畫、大刺繍がある。孔雀に牡丹、藤に鶏の刺繍が四壁を埋めて、目も醒めるばかりに美しい。後から入つて來たアメリカの婦

人の群が「オー！マイ、ビューテイフル！」と癇高い聲をあげて感歎してゐた。佐藤はすつかり嬉しくなつて、その夜日記に「此地では日本の肩身廣し」と書きつけた。

ヘーグからアムステルダムに行き、十三日にラインを越えてベルリンに入つた。小幡大使、永井商務官等に迎へられ、獨逸の情況をきいた。十七日夜行でチエコ・スロバキヤに出發するまで、ナチス勃興期のドイツを見學したわけである。

チエコに行つたのは當時チエコの雜貨が、日本の雜貨と激烈な競爭をしてゐたから、それを見に行つたわけである。プラーグに一泊して堀田公使と語り、翌十九日南獨逸を西に横斷して佛國に向ひ、パリーに着いたのは二十日の午前であつた。こゝでは二十五日まで、ヴエルサイユ宮をはじめ各地の見學をした。その中で一番佐藤の印象に殘つたのは、ナポレオンがセントヘレナで掛けてゐた椅子と、死去の時のベッドであつた。彼はその前に立つて人には滅多に見せたことのない涙を、どうしても抑へることが出來なかつた。

パリーを出發して、絹織物の中心地リヨンに行つたのは、八月二十五日であつた。これは日本の絹織物の輸出不振の原因を研究するためであつた。三井、三菱の支店長や宗生領事と會談して、この問題につき協議したのである。二十六日は終日自動車で、絹織物の生産地視察に費した。

二十七日の午後この地をたつてスイスに向つた。聯盟華やかなりし時であつた。國際聯盟會議所その他を視察して、二十九日同地を出發し、マルセーユを通過して、三十日ニースに着いた。モナコ、モンテ・カルロ等を見物し、伊太利のゼノアに着いたのは、九月一日であつた。

ゼノアではコロンブスの生家や銅像を見て、九月二日ローマに入つた。佐藤はローマでどうしても見たいものがあつた。それはムツソリーニの社會施設である。彼は特に同地にゐる同縣人の下位春吉に依頼し、それらの施設を見て廻つた。市營住宅、勞働者住宅、勞働者街の幼稚園、小學校、施療院等々である。

佐藤はそれらにも感心したが、一番共鳴したのは、マカレセ農園であつた。こゝはローマ郊外の沼地と旱魃地で、二千年來捨てゝ顧みられなかつたものを、ムツソリーニが近代式農園に建設したものである。十二萬町歩程あり、カーキ色の服をつけ、フアツショのシヤツを着た青年が、乳を搾つたり種を蒔いたりしてゐた。牛小屋に行くと、世界各國から取りよせた優良種がゐたし、製粉機械は村落の共用に提供され、新興氣分がみなぎつてゐた。佐藤は出發前漸く緒についた、福岡市郊外の農士學

校を思ひ浮べながら、軍隊式なイタリヤの開墾隊や植林隊を、見て廻つたのである。「日本だつて負けないぞ」と心ひそかに思ひ、また社會事業家としての自分の前途に大きな責任を感じ、これら視察地の内容を細々と日記に書きつけた。

九月五日ナポリに着き、發掘の都ポムペイを見た。七日に郵船鹿島丸に乘船し、十日の午前ポートサイド着、カイロに急行し、ピラミツトやスフインクスを見た。それからスエズ碇泊の本船に夜遅く歸つた。鹿島丸は十一日午前スエズを出帆して炎熱の紅海に向つた。砂漠の熱風がたちこめてゐる海上は、文字通りの焦熱地獄で、一行は船室に寢ることが出來ず、デツキに寢て過した。十六日の午前十時ころ、船はアフリカ大陸を離れて印度洋に出た。波は相當に高くなつたが、氣候は一變して涼風が肌寒い位に感ぜられた。佐藤は圖書室で、佐藤熊治郎著の「教育行脚」を毎日讀みふけつた。

滿洲事變の勃發を知つたのは、明日コロンボに入港すると云ふ九月二十日のことであつた。祖國を離れ、世界の各地を見て來た一行の誰の顏にも、國運を氣遣ふ憂があつた。佐藤も人一倍あれやこれやと心を痛めたが、印度洋上のことゝて、詳報を得ることが出來ない。船がコロンボに入港したのは翌二十一日の午後六時すぎであつた。一行は上陸するや否や、すぐ新聞を買ひこんで披いた。滿洲事變の記事がデカ〳〵と出てゐる。土地の空氣も反日的氣勢が濃厚であつた。

コロンボから七十餘哩の山上のカンデーは、佛跡のある有名な避暑地である。自動車を飛ばして、夕涼みの印度人村を通ると、腰卷一つの人達が、ヘツドライトに興がる。山上のホテルに一泊すると洗面の水を持つてくる者、手紙を持つてくる者、掃除をする者、食事を運ぶ者がみな違ふ。掃除をする者に食事をきいてもわからない。わからない筈である、彼等はそれが先祖代々の世襲でそれ以外の仕事にはつけない人種なのであつた。水を運ぶ人種、掃除をする人種、食事を運ぶ人種等々、何といふ悲劇的な階級制度であらう。佐藤は長歎息した。俊敏な性格で、實業界に暮して來た彼には、見てをれない氣の毒な印度の姿であつた。

「印度は何時救はれるだらう」

佐藤は、さうした感慨を催すとともに、金雞學院で近づきになつた、革命の志士ビハリ・ボースの淺黑い顏を、ふと思ひ浮べたのである。

セイロン島はもと佛教の島であり、本山の佛齒寺はこゝにある。そこには善男善女のかはりに、乞食の群だけが集つてゐた。日本の田舍の寺にも劣る貧弱な建物、横佛が祀られてあつたが生氣なく、何の靈感も受けない。印度の佛教が滅びるとともに、國また破れて山河のみ横つてゐるのである。東

に近づきつゝある佐藤の胸には、日本の有難さが、日本の貴さが、しみ〴〵と潮のやうに盛り上つて來るのであつた。

九月二十六日午後、船はマラツカ海峽に入つた。望遠鏡をのぞくと、スマトラ島の景觀が眼前に迫つてくる。山林は殆んど原始林でもあらう。佐藤は夜遲くまで故郷の新聞を讀んだ。丁度一ケ月前の八月二十五日までの分が綴られてあつた。郷愁がふと胸の扉を叩いたやうであつた。デツキに出てみると海は月影を映じて、限りなく美しい夜更であつた。佐藤はその夜の日記に、珍らしく感傷的な文字を書いた。曰く。

「スマトラの海靜かにして月淸し」

二十七日シンガポールに着いた。ジョホール王宮を見て、古河財閥經營のゴム園を視察した。一行は豐富な南洋の果物に蘇生の思ひをした。しかしこゝでも、佐藤は辛抱の出來ないものにぶつつかつた。それは七尺もあるかと思ふ印度人系勞働者の懶惰さであつた。彼等は午前中だけは働くが、午後になると絶對に働かない。木の蔭でゴロ〳〵寢轉んでゐるのである。佐藤は、印度の勞働者に愛想をつかし歎息した。

十月三日船は香港に入港したが、支那人間に不穩の空氣たゞよひ、戒嚴令施行中とのことで上陸を見合せ、船上から夜景を見たゞけで出帆、同七日上海についた。

佐藤と大貝はこゝで一行と別れ、翌八日出帆する上海丸に乘込み、長崎に直行することになつた。出帆すると生憎ひどい風波である。動搖甚だしく、度々寢臺から轉げ落ちさうになる。それでも故國へ歸る思ひはまた格別であつた。

六月十八日横濱を出帆してから百十四日目に、佐藤は長崎に一歩を印した。野口、山本、小林の近親者と、夫人の俊子、嗣子與助の姿が棧橋に近づく船の上から見えた。佐藤はふと、あのナポレオンの遺物の前に立つたときのやうな、涙腺の刺戟を感じた。がそれは明るい晴れ晴れとしたものであつた。

百餘日を隔てゝ見る故山の風物は、新綠から仲秋への變化にすぎなかつたけれども、それを見る佐藤の眼と心には、全く違つたものとして映つた。彼はそこに、新しい天地と、新しい自己を見出したのである。世界一周の旅は、何時の間にか彼の眼を大きく見開かせて、世界を單位に物を考へる性格

の人間につくりかへてゐた。新しい仕事の待つてゐる自宅へ彼のついたのはその夜の十一時四十分、就寢したのは翌朝の午前二時であつた。

佐藤の世界一周は、抑も修養としての旅であつた。がそれとともに世界の大勢を知り、産業の發展がどうなつてゐるかも見るためであつた。しかし最大の目的は、社會施設を實地に見聞するにあつたのである。

だから伊太利のムツソリーニの施設などは、案内の下位春吉がびつくりする程、熱心に見、また研究した。事業を見ると、すぐその財源を質問した。他の人が勞働者の福利施設を見ると「成る程」とたゞ感心して見過すのであるが、佐藤は一々その施設をしてゐる事業家はどうしてやれるか、國家はどういふ風に保護してゐるかを徹底的に調べて、納得が行かなければ承知しないといふやり方であつた。

さうして彼の理解したのは、ムツソリーニ政府の統制の妙味であつた。政府は或程度以上に儲かる事業からは、遠慮なく利益を徴發して福利事業費に廻し、また一方引き合はない必要事業には、惜しみなく補助してゐる。何れにしても、利率は低いがやつて行けるやうに保護統制してゐるのである。

これは佐藤の年來の持論であつた。それを眼のあたりに見て、彼の確信は固められた。世界の新しい動向はこゝにある。自分のやつて來たことも、考へてゐることも正しい、次の明るい社會を築くためには、この確信を實行に移せばよいのだと、彼は結論した。

佐藤が再び日本の土を踏んだとき、彼は以前の佐藤ではなく新しい人となり、新しい仕事への希望に心躍る白髪の青年となつてゐた。

レヴアー・ブラザース石鹼工場の見學は、資源に乏しい日本の前途に大安心を與へ、ヘーグの平和宮では心の先輩カーネギーの事業を見ることが出來た。新興伊太利では、ムツソリーニの新社會の動向を見つめ、印度では滅び行く民族の現實を見た。これらの印象は、綜合されて彼の新しい道となつた。生活指導者としての佐藤慶太郎は、かくして徐々に育ちつゝあつたのである。

歸朝後彼は「貿易振興」に『資源の缺乏憂ふるに足らず』と題し次の一文を寄せてゐる。

## 資源の缺乏憂ふるに足らず

佐藤慶太郎

我が國の土地面積は狹隘で、人口は稠密なる上に、毎年壹百萬人内外の增加がある。國家の繁榮とこの人口を賄ふには、どうしても工業の隆盛に待たねばならぬ。然るに不幸にも我が國には、天然資源が乏しいので仕方がないと、指を銜えて引込思案に暮してゐる人が、隨分少くない。

しかし、纖維工業やゴム工業の實例に徵するも、原料を世界に求め、加工して海外に輸出すれば、國内に資源の乏しきを憂うるに足らぬ。要は如何なる工業がもつとも我が國に適するかを、十分調査研究して企業することである。

私が今回の歐米旅行中、最も刺戟を受けたのは、英國上陸の翌日リヴアプールより地下電車にてマーシー河を越え、對岸ポートサンライトのレヴアー・ブラザース・コンパニー石鹼工場を視察したときである。

同社は七億圓の資本金を擁し、從業員は八萬五千人に上り、石鹼の製造高は一週四千噸、一年の賣上高は資本金と同額の七億圓に達し、原料生產事業の外原料製品の運搬に要する鐵道、船舶、自動車道路、及びドツクまでも所有し、私の視察した本工場だけでも、土地五百十二エーカー（約二百八町歩）中二百七十二エーカー（約百十町歩）は工場敷地、二百四十エーカー（約九十八町歩）は從業員宅地で宛然一國をなせる觀あり、視察員案内專門の女子事務員さへ二十四名と云ふ多數で、その組織の尨大なるに一驚を喫した。

その原料も、南洋東洋を始め世界各方面から取寄せ、その製品もまた南洋東洋を始め世界各國に賣捌かれてゐる。然らば同地に於て何かこの產業に特に有利なる條件があるかと取調べたが、只水運の便があるのみで、他に何も見出すことが出來ない。勞働賃金や勞働條件などは英國一般と同樣で、我が國に比すれば遙かに不利である。

叙上の如き次第なるを以て、石鹼工業が我が國に於て成立ち榮えぬ筈はない。これはその一例にすぎないが、他にもこれに類するものは多々ある。例へば、チエツコ・スロバキヤに於けるバチヤ製靴工場の如きも同樣で、原料を各方面に求め、一日優に十三萬足の靴を製造し、世界を得意として繁榮を極めてゐる。

我が國は四面環らすに海を以てし、水運の便あるのみならず、アジア大陸と太平洋を控へ、原料の蒐集、製品の販路等に於て、絕好の位置を占めてゐる。これに加ふるに、我が國民は手工及技術に於て優秀なる長所を有し、經營の手腕に於ても亦卓越してゐる。これらの長所を發揮企業すれば、我國の前途は洋々たるものがあり、決して悲觀を要せぬ。

製品の海外進出については、統制も必要であり、宣傳も必要であるが、その優良品は技術と努力に

より得らるゝが、低廉は仲々困難なもので、生産費の低下は、物價と勞銀の低廉に俟たねばならぬ。物價の低廉は、主に勞銀の低廉により期待され、勞銀は主に生活費により左右され、生活費の主なるものは食費である。

×

我々同志が、多年唱導しつゝある新榮養法が實行さるれば、食費は非常に低廉となる。新榮養法は食物の量と質と食べ方につき從來の榮養法と異なり、主に咀嚼、玄米食、菜食等の實行をすゝめる。

徹底的咀嚼を實行すれば、攝取せる食物は極めて微量の纖維を除く外は、すべて消化吸收同化されて全部血となり肉となり、骨となり活動力となり、食量は從來の三分の一、少くとも二分の一にて滿腹感が起り、それで榮養は十分で、胃腸を始め身體の各機關も丈夫になり、抵抗力が強くなるため、病氣など罹りたくともかゝれぬやうになり、自然死に至るまで強壯で活動が出來る。

これに反して、丸呑みや粗嚼で大食すれば、徒らに諸機關を過勞せしめ、食物は胃腸内に於て醱酵腐敗し、その毒瓦斯は體内に吸收され、折角攝取したる食物の大部分が、消化吸收同化されずに體外に排泄される。かくの如き食べ方は、斷然改良されなければならない。

從來、滋養物と云へば、動物食の如き考へであつたが、獸肉禽肉魚肉の如きは、老廢物質が多く消化も困難で、しかも高價で、決して理想の食物ではない。

これに反して、菜食、即ち野菜、海草、果物の如きは最良の食物でしかも廉價である。蛋白は動物性の方がその質がよろしいと云ふ學者が多い。さうすれば、世界で最大漁業國たる我が國では、最も豐富でこれには飼料も要せぬ。されば肉類中で比較的老廢物が少く、消化も容易且つ廉價なる魚類に蛋白資源を求むべきで、牛肉の輸入の如きは以ての外である。

×

我が國に於ては、德川の初期までは、玄米食であつて、身體は强健、體格も偉大、且つ長命であつたが、白米食に變つてから次第に贅澤となり、柔弱となり、健康も體格も劣り、短命となつた。

玄米は、ヴイタミン、蛋白、脂肪、燐、カルシウム等、人體に必要なる榮養素を殆んど完全に含有してゐるが、白米は此等の大部分を含有する米糠を取除くため、主に澱粉のみが殘り居るにすぎず、云はゞ米の粕の如きものである。從つて、玄米食には、他の食物を攝取せずとも、殆んど完全なる榮養が得らるゝが、白米は誠に不完全な食物である。

玄米食は目で食ふ習慣である我國人には、色が悪くて感じがよくないとか、口當りが悪いとか、不味いとか、消化が悪いとか、種々の非難があるが、小豆を一割位混入して上手に炊き、十分咀嚼すれ

ば、色もよろしく口當りもよく、味の如きはとても白米食の及ぶところでなく、且つ消化も十分に出來る。

玄米食は、副食物として野菜類でも少し攝取すれば、完全な榮養が得られる。

新榮養法實行の結果は、叙上の如く食量は半減し、且つ質の異なるため、食費は從來の三分の一位で足りることゝなる。現に我々の同志中には、咀嚼、玄米食、菜食の實行により、東京に於て一日僅かに拾錢の食費で、健康は增進し、活動を繼續してゐるものが澤山ある。

かくの如く食費が低廉となれば、無理をせずに勞銀を低下することが出來、從つて物價も生産費も低下し、製品の海外進出が容易となるのみならず、困難なる食糧問題の如きも容易に解決され、健康が增進し、病人は殆んど絶無となり、勞働能率も非常に高まり、生活費の低廉のため、思想問題までも大部分解決することを得る。これ我々同志が、國民一般に新榮養法の實行をすゝむる所以である。

要するに、國民一般に新榮養法を實行し、能率を高め、從つて生産費を低下せしめ、原料を世界各方面に求め、世界を得意として活躍すれば、我が國の繁榮は期して待つべく、天然資源の缺乏などは憂ふるに足らぬことである。（了）

☆

# 妻逝きぬ

俊子には、終生子供が惠まれなかつた。

子供のない家庭は、何となく落寞とした寂しさがあるものだが、佐藤の家庭はいつもにぎやかであつた。と云ふのは、子供同樣な青年や娘が、幾人もその家庭にゐたからである。家事見習のために、親戚や知人からあづかつた娘が、いつも四五人はゐてまるで家事學校のやうであつた。

育英關係の秀才連も、學校が休暇になると集つて來て、母親に對するやうに俊子に甘へた。後年よく佐藤は「實子のないのが氣の毒だと慰めてくれる人があるが、私は却つてそれを感謝してゐる。病氣、貧乏、逆境等々、世の中には不幸が限りなくある。しかし肚のきめ方一つで、不幸は幸福へ入る門ともなる。この意味で私は、二つの幸福を惠まれてゐる。一つは兩親が貧乏であつたこと、他の一つは子供がなかつたことだ」と云つた。實子がなかつたゝめに、有爲の青年や娘たちを、わが子となし得た喜びを感謝したものであらう。

現に佐藤家の嗣子となつた明治專門學校教授の佐藤與助も、さうした一人であつた。與助は福岡市の三宅長市の三男として生れ、修猷館の五年生頃から佐藤の家庭に出入し、大正七年六月、懇望されて養嗣子となつたのである。與助は大正五年七月九州帝大工科大學の採鑛學科を首席で卒業し、九州帝大講師に任ぜられ、同七年辭職歐米に留學、同九年に歸朝して明專の教授となり、現に鑛山工學科並に採炭工學科の兩科長を兼ね、現在戸畑市の明專官舍に居住してゐる。

夫人貞子は、大阪の實業家祇園清次郎の三女で、東京聖心女子學院語學科の出身で、二男一女を惠まれ、長女は日本女子大學校の國文學部に在學中であり、兩男はともに福岡縣立戸畑中學校に在學中である。

佐藤は與助をして佐藤家を繼がせて嗣子としたが、昭和十年七月に至つて、本城の舊宅を繼ぎ墓を守る分家を設定した。これは父孔作の晩年のために建てた家を繼がせるためであつた。婿養子は血緣中から選んだ。即ち父孔作の甥傳七の子、小野重行に配するに、異父の姉ヤスヱの孫、末松照子を以てした。重行は現在、八幡製鐵所に勤めてゐる。

「銅像の背後に賢夫人あり」とは、よく聞く言葉であるが、佐藤の場合もその好例であつた。今でも地方の人は「俊子夫人が偉かつたんですよ」と云つてゐる。事實、俊子は稀に見る女丈夫であつた。

俊子は明治二年、遠賀川の流域水卷村字立屋敷の舊家、山本家の次女としてこの世に生を享けた。父の利三郎は有名な仁德の士であつた。無智な部落の親たちが、子供を叱りとばして外へ拋り出すと利三郎はそれを片つぱしからわが家へ拾ひ集めて來た。親たちが貰ひ下げに來ても、あやまつて賴まなければ返さなかつた。子供たちは、兩親よりも利三郎爺さんを慕つたものである。

山本家には男の子がなかつた。それで長女かた子に、同じ立屋敷の永沼澹一の次男周太郎を迎へて養子とした。これが山本商店の先代で、魯一郎の父である。

俊子は姉夫婦に伴はれて若松に住み、長ずるとともに店の手傳をして、後には會計一切をまかされてゐた。

俊子は目の大きな、體格のがつちりした肥えた婦人で男性的な肚の大きい一面があるとともに、優しいところのある女性であつた。外に出ることを好まない非社交型の人ではあつたが、店員の使ひ方家事の切り廻し方などは、堂に入つたものであつた。單に家事家計について妙を得てゐたばかりでなく、商賣についても勝れた見通しを持つてゐた。

かうした女丈夫でありながら、夫に對しては典型的な日本婦人であつた。後顧の憂なく、佐藤が全

力をあげて事業に沒頭し得たのは、この夫人の内助があつたからである。

佐藤は「佐藤式會計」と稱して、收入は一切俊子の手に渡し、必要に應じて妻の手から貰つて使つてゐた。俊子はまた財産が幾十萬、幾百萬にならうと、相變らず世帶を持つた初めと同樣な質素さで家事の一切を賄つてゐた。人の出入りが多くなり、家族がふへて來ても、酒も醬油も一升買ひであつた。決して一斗樽や九升樽を臺所に飾ることをしなかつた。要るものを要るだけ、要るときに、現金買ひをした。この佐藤式會計は養嗣子與助の家庭に、そのまゝ傳はり實行されてゐる。

それでゐて、出すべきところへは、惜しげなく出してゐた。育英事業を始めたのも、俊子の建言であつたし、婦人會關係の人などが寄附貰ひに行くと、云ひ出さぬ先きにさつさと金を出してゐた。佐藤はどこまでも理論家で、理窟が通らなければ決して金を出さない。また將來を期して、小さな寄附には應じないのが常だつた。それ故ともすれば誤解や非難の的になることもある。それを未然に防いでゐたのは、俊子の人徳であつた。

小學校を卒へたばかりの一人の小僧が、どうしても朝寢坊をするとき、

「さあ、お前にはこれをやらう。明日の朝からは早く起きなよ」

俊子はかう云つて、祕藏の眼覺し時計を、小僧にくれた。舶來の立派な八角時計で、二十餘年後の今日でも、いさゝかの狂もなく時を刻んでゐる。

その小僧が、入院中の俊子を見舞に行つたことがあつた。まだ勤めて間もない時であつたが、俊子は附添のゐない折をみて、寢床の下から十圓札を出し、默つて小さな手に握らした。

佐藤家の隣接地に神社がある。ある朝俊子は、おつとめの太鼓の鳴りがひどく悪いのに氣がつき、さつそく神官に問ひ合せると、太鼓が破れたのでといふ返事である。「では私が太鼓を寄附させて貰ひませう」とさつそく寄附した。

今佐藤倶樂部になつてゐる舊宅の方は、もと草屋根であつた。或る年その一部をトタン屋根にかへた。そのとき、どうしたはづみかブリキ職が屋根から落ちて、したゝか腰を打つた。俊子は肌ぬぎのまゝ飛び出て來て、急いで抱への俥を呼び、それに乘せて、これで「療治して來い」と十圓札を持たせて醫者の許へ送つた。

あるとき、本城に隱居してゐる孔作が、鶯を買ひに出て來た。小鳥と菊作りが、孔作の老後の慰安であつた。女中は孔作から二十五圓の金をあづかつて、鶯を買ひに出かけたが、どこかでそれを失くしてしまつた。眞青になつて駈け戻つて來て俊子にそれを訴へると、俊子は「裸になつてもう一度探してみよ」と探させ、それでもないと「あとであつたら返せよ」といつて二十五圓の金を出し「出な

けりや持つて來ることはないぞ、隱居さんには云わないで」と云つた。

實業家として今上海に活動してゐる佐藤要は、佐藤の伯父の子で佐藤とは從兄弟であるが、年齢が違ふので親子のやうな關係であつた。早く父を失つたので、中學二年ころから高商を出るまで佐藤が親代りになつて面倒を見たわけである。

その後要はアメリカに渡り、ある貿易商會につとめてゐたが、その店が失敗して解散し、無一文で歸朝せねばならなかつた。

「それでは食へまい。一度だけは應援するが、何べんもと云ふわけには行かんぞ」

佐藤はさう云つて、まとまつた金を出してくれた。さうして再起したのに、再び鈴木商店のモラトリアムで大きな痛手を受けた、再び佐藤には云へなかつた。たとひ泣きついたとしても「一度きり」と云つた以上、どんなに困らうが出してくれる佐藤ではなかつた。それを知つて「小父さんに云ひなさんなよ」といつて、そつと世話してくれたのは俊子であつた。若くして兩親に別れた要は、佐藤に對しては勿論であるが、特に俊子に對しては血緣のない叔母であつたゞけに、どんなに感謝しても感謝し切れないものがあつた。彼はこの亡き叔母の供養のために、他日自らその墓地の側に眠つて恩人の靈を守るべく、それらの墓地建設の費用にと、千圓の金を本城の信隆に送つて來たのは、佐藤の逝去する直前であつた。

佐藤に對する俊子の仕へ方は、至れり盡せりであつた。生涯、主人の蒲團は人手には敷かせなかつた。主人のおかづは、自分が病床につく前の日まで、板張りの臺所に坐つてつくつてゐた。主人が東京から歸る日といへば、女中たちの先頭に立つて、天井までふく位徹底的な掃除をした。ある日懇意な某夫人が通りかゝると、蒲團や着物が干してあり、大掃除をしてゐる。遠來の客があるのだなと思つたので聲をかけた。

「お客さまはどちらから?」

「いゝえ、主人が歸るものですから」

これにはその夫人も驚いてしまつた。そして今更のやうに、「あまり自分を大切にしてくれるのでまるで自分の姉か母のやうだ」と云つた佐藤の言葉を思ひ出した。

與助が佐藤家の嗣子となつて、その家庭に入つたのは大正七年であるが、そのとき食卓につくと、俊子が微笑みながらかう云つた。

「家では麥飯しか食べないのだが、他家からこんなに大きくなつた子供を貰ふのだから、今日から白

米を食べることにした。しかし心はかういふ氣持ちだといふことを、知つてゐて下さい」

かうした優しい思ひやりのある婦人であつた。

姉の山木老夫人が、神信心から鶏卵の絶ち物をしてゐた。俊子はそのころから家鴨を飼ひ出した。その家鴨が卵を生み出すと、姉のところにそれをとゞけてゐた。

庭には野菜や花をつくり、臺所の野菜はそれで充分間に合つたし、花は時々救療會の病人に贈つてゐた。客があれば畠から苺を取つて來て出した。家事には非常に興味を持つて、すべて研究的にやつてゐた。

「私は自分で仕事をつくるので忙しいんですよ」

と云つてゐた。洋服などは一着づつ必ず風呂敷に包んで整理してゐた。定所必ず物あり、物必ず定所ありといふことを、そのまゝ實踐してゐたのである。

「カウスボタンはどこ、ネクタイはどこ、と何でも主人にわからぬことがないやうにしておきたい」

と平常語つてゐた。

着物はいつも主人の古物を修理して使つた。そしていつも前垂れがけであつた。謠の會の婦人連も「佐藤の奥様があゝして下さるから、われわれも着物の心配がなくてよい」と喜んでゐた。

別府に晩年生活の邸宅が建ちかけてゐたが「わしは若松が一番よい」と云つて、出來上つても若松を去らないつもりらしかつた。逝くなる前の夏にも、湯の平溫泉の歸りに、とう〳〵別府にはよらなかつた。

俊子は體格はよかつたけれども、頑健といふ方ではなかつた。昭和四年の一月には腎臟結石のため血尿が續き、野口病院で片方の腎臟を摘出してしまつた。次いで膀胱癌の症狀が出て、ラヂウム治療で再び野口を煩はした。昭和八年十二月の初からまた〳〵病床につき、新年になつて病勢改まり、遂に昭和九年一月十五日午前六時少し前、心臟麻痺で永眠した。亡くなる前日の夜であつた。一時心臟の働きが止つた。人工呼吸と注射で間もなく回復したが、ふと目を見開いた俊子は、そこに羽織も着ずに心配さうに立つてゐる佐藤を見た。

「旦那様が風を引くといけないから、早く羽織を出してかけておあげ」

と女中に云つた。その翌る朝、夜明けと共にこの世を去つた。十六日火葬に附した。枕の下から一葉の短册が出て來た。「花盛り主の留守にくつろぎぬ」とあつた。四六時中自分のためにのみ働き、くつろぐ暇さへなかつた糟糠の妻を思へば、佐藤の胸中はたゞ空しい寂寥のみであつた。告別式の行

はれる日の曉方、次の間に寢てゐた親戚の婦人がふと目が醒めた。佛の安置してある前に誰か一人ぬかづいてゐる。香煙のたちのぼるのをぢつと見つめてゐる彫刻のやうな人影。それは孤影悄然たる佐藤の後姿であつた。

告別式は一月十八日の午後一時から行はれた。六年後の同日同時刻に、彼自身奇しくも同じ運命の途を歩むとは、佐藤といへども知る由はなかつた。

その後、佐藤は親戚の某夫人にこんな話をした。

「苦勞を共にして來た夫婦といふものは、自分たち位の年になつてみると、何とも云へないなつかしいものだ。樂しみなものだ。だからお前も自分の體とは思はず、大切にしなければいかんよ。體が弱いと男を不幸にする。他の何があつても、女が先立つては駄目だ。苦勞を共にした者でなくては、しみ〴〵とした老後の話題がないからなあ」

その婦人は、娘時代佐藤の家にあつて、娘同樣可愛いがられた人であつた。平素體の弱い彼女へ、體驗を通した痛ましい佐藤の忠言であつたのである。

三菱鑛業の重役會のため、佐藤は毎月末には上京した。ある月のこと、會が終つてから皆が眞面目に再婚をすゝめた。

遂に監査役の諸戸清六が、佐藤の再婚の相手を探す全權を、重役一同から仰せつかつたのである。諸戸はさつそく懇意な佐藤仁齋のところへ行つて、

「僕の友人の奥さんを世話してくれないか」

「一體どういふ方にお世話をするのですか」

「まあ僕と同じ位の人と思へばいゝ」

「あなたと同じ位といへば、たいしたものぢやありませんか。とにかくその方に會ひませう。人を知らずにはお世話は出來ませんから」

諸戸は日本の山林王といはれてゐる桑名の富豪なのである。こんなわけで、永錄年間の岡山城主金光宗高の裔に當る金光彌十治の長女岡山縣人金光喜代子との緣談が成立した。式は昭和九年十一月四日午前十一時から、別府の八幡朝見神社で擧げられ、午後一時から親戚知友を招いて披露宴が開かれ、久しぶりに明るい家庭を惠まれた。

喜代子は茶道の奥をきはめてゐたので、無風流な佐藤の晩年生活に、ほのかな幽玄の雰圍氣がたゞよひかけて來たことは、妙なる天の配劑であつたらう。

# 新しき大旆

昭和九年の春、陸軍主計少將横田章は、九州出張の歸途、別府に佐藤を訪れ、夜更くるまで食糧問題などを中心に、内外の逼迫した情勢について話合つた。

當時は、紛糾と混亂を極めて來た國内的相剋が、滿洲事變を契機として清算途上にあり、一億國民は肇國精神にかへつて内外の時艱を克服すべく、擧國一致新たなる發足をしようとしてゐるときであつた。

即ち前年の一月には、ドイツにヒツトラー内閣が成立し、續いて三月には、ルーズベルトがアメリカ大統領に就任してゐる。日本が敢然、國際聯盟を脱退したのも、同じこの三月であつた。

かくて歴史の宿命は、奇しくもその繪卷をくりひろげ、山雨將に至らんとして風樓にみつる戰前の世界であつた。

各國の指導者は、ひそかに來るべき嵐にそなへて、國民組織の再編成、臨戰體制の整備に思ひをひそめてゐたのである。

横田は佐藤に、最後の事業として、かうした國家の要請してゐる問題に手をつけることをすゝめた。

「佐藤さん、今はあなたがこれまで、いろ〳〵社會に寄與されてきたものゝ結論をつくるべきときですよ。日本精神を中心とする國民指導の機關をつくられては如何ですか」

横田の話を、快心の微笑を浮べてきいてゐた佐藤は、上體を乘り出して云つた。

「丁度お話のやうな計畫を、いますゝめてゐます。まだ誰にも話してゐないのですが、御提案があつたから一切お打ち明けしませう。是非おきゝとり下さつて、御援助を願ひます」

それから佐藤は山下信義との數年來の交友から、岸田軒造を知り、この二人を中心に自分一代の努力の結晶である財産の大部分を擧げて生活研究所を設立し、生活刷新の大運動を起す計畫が進んでゐることを打ち明けた。

横田は、熱心に語りつゞける佐藤の輝いた横顔をみつめながら、論語の中の「用を節し人を愛す」の句を思ひ浮べてゐた。（この人とそそれだ！）と、ひそかに敬慕の念さへ湧き上つてくるのであつた。

山下信義は、京大の法科を出て伊豆の農村に飛びこみ、少數の青年を相手に塾教育を始め、生活指導者として三十年、全國に遊説して來た社會教育界の先達であり、岸田軒造は永年神戸に在つて、商工青年教育の傍、社會教化運動に力を盡し、後には財團法人修養團理事として活動してゐた。

佐藤は美術館建設後、資産を整理し、それを彼一流の才能を驅使して蓄積して來たので、相當の額に達してゐた。これを如何に有效に使用し、社會と人類に貢獻するかは、常に頭から離れない問題であつた。それ故、信ずるに足る誰彼に、それを相談しいくつもの案が提供されたが、彼自身を心から共鳴させる名案はなかつた。

そこに出現したのが、山下と相談した岸田から提出された「生活研究所」設立案であつた。これは咀嚼の實行以來幻に描き、外遊によつて更に確信づけられて來た信念に近い事業であつた。佐藤の心は初めて動きかけたのである。

佐藤は春から秋にかけて熟慮に熟慮を重ね、近況を更めて野口や興助にも打ちあけた。かくて十一月に至り大體百五十萬圓の資金で「生活研究所」設立の細案作製方を、岸田に依頼した。岸田は山下と相談して詳細の實行案をつくり、十二月末にこれを佐藤に送つた。明けて昭和十年一月の初頭、「山下、岸田の兩人が、專心これに當つてくれるならば」と云ふ條件の下に、佐藤は設立を決意したのであつた。

山下、岸田兩人の承諾を得た佐藤は、一月三十日から二月二日までの四日間、兩人を鐵道ホテルに招じて、協議に協議を重ね、遂に百五十萬圓を投じて生活運動を開始すべく、最後の決意を固めた。同日、直ちに敷地を見て廻つて駿河臺に定め、假事務所を丸ビルに設けることを決定し、創立事務が活潑に開始された。

かくて佐藤新興生活館は誕生した。多難なる祖國の運命に備へるべく、ひそやかなる出發をしたのは、昭和十年三月一日であつた。「新興生活」創刊號に掲載された『新興生活館の生れた日』と題する記事を引用しよう。

☆

昭和十年三月一日午前九時、帝都の中央、丸ビル四六〇區の一室に、佐藤新興生活館の開館式が擧げられた。そこには世の名士の臨席もなく、花束一つ見當らぬ。たゞ佐藤理事長夫妻と、山下、岸田の兩常務と、渡邊竹四郎、加藤善德、岸根寛次良、千葉明彦の四名の職員が加つてゐたにすぎない。見ようによつては、なんといふ貧弱な式であらう。しかしまた、なんと新興生活運動にふさはしい出發であらう。

式は岸田常務理事司會の下に嚴かにすゝめられた。畏れ多くも、大内山を正面に拜し奉り、一同襟を正して、御皇室と皇國と新興生活館の前途のために、恭しく祈を捧げたのであつた。

山下常務理事は立つて、新興生活館の生るゝに至つた經路を語り、「佐藤氏の淨財提供も畢竟するに、眞理と愛を追求する魂と魂の共鳴の結果に外ならぬ、われわれはこの一致せる聖願を貫徹せしめて、今日のこの日を希はくば世界文化史上の一頁を飾る日であらしめねばならぬ」と結んだ。

次に佐藤理事長は謙讓をつくして、理事長就任の辭をのべ、つゞいて「金を道に從つてためるのは容易な業ではない。然し更に難事は、金を道に從つて活かして使ふことであると思ふ。私はこの至難事に當つて頂くに、心から信用のおける皆樣を得たことを、この上ない喜びとする。何卒最善と思はれるところにこれを用ひて、御國と人類の幸福のために、御盡力を願ひたい」と述べた。

これに對し職員を代表した渡邊竹四郎氏は、「佐藤氏は先に美術館に百萬圓を寄附せられ、今また更に國民生活行詰り打開のために、殆んど全財産を獻ぜられたことは、天下の驚異である。特にわれらを敬服せしめる一事は、氏がこの巨額の提供に、全くの無條件である點である。實に無條件の醵金ほど貴いものはない。ブース大將に與へられた無條件の五萬圓は、遂にあの救世軍の大事業の根幹を成したのである。佐藤氏のこの世界的美擧たる巨額の淨財を、極めて有益に使用することは、國民の義務であり責任であると思ふ。われらは多くの人の中より、特に選ばれたる數名である。粉骨碎身この貴き使命のため、一生を獻げたい」と述べた。

最後に一同は、その前途のために默禱して式を閉ぢた。式後一同は記念撮影をし、つゝましい祝賀の會食を終へて、午後から直ちに館務を開始した。

☆

續いてこの稿は、生活館が社會に公表された前後の模樣を描いてゐる。即ち次の通りである。

☆

館員一同は、三月一日の開館式以來、默々として丸ビルの一室に閉ぢこもり、館務に全力を傾注してゐた。

近代のヂヤーナリズムは、鵜目鷹目でぬかりはない。四月二十三日に至つて、東京日日新聞の記者は翁をその郷里に訪ね、翁が巨額の淨財を社會事業に寄附するの記事を、堂々と世に發表した。

かゝる中にも、一方館務は着々進捗し、五月十三日に至つてほゞ體系が調ひ、準備工作も一段落をつげたので、宣言綱領及事業概要と館員の挨拶狀を、各方面に發送した。俄然、帝都の大新聞は申すに及ばず、各地の新聞も一齊に各社會面に四段抜き、或は六段抜きの記事を以て、新興生活館の誕生

を報じた。『百五十萬圓を投じて宿願の救世へ』とか『新興生活館を建設して一介の貧者に還る佐藤翁』とかの見出しの下に、館の精神事業を詳細に報道した。

かくて始めて新興生活館が、社會にその全貌を現したのである。この發表は社會に對して、非常な衝動を與へ、敬意を表すべく來館さるゝ方、また近きも遠きも志を同じうする者は、惜しまず聲援を送つて來た。

かくも甚大なる期待をかけられてゐる運動に關るわれらは、榮光に伴ふ責任の重大さを痛感し、その期待に背かざらんことを期し、一層の努力を續けてゐる。

☆

颯爽と起ち上つた佐藤の姿が、そこに見えるやうに感ずると共に、創業にたづさはつた人々の眉宇にみなぎる決意の程もうかゞはれる。

五月十五日の大阪朝日新聞は、『百五十萬圓をぽんと投げ出す、新興生活を旗印に佐藤慶太郎氏が教化運動へ』と題し、社會面のトップを飾つてゐる。

☆

上野の東京美術館建設に百萬圓を投出した佐藤慶太郎氏（六十八年）は、今回險惡な世相と不安な生活の諸問題に對する革新と解決の一歩を進めるため、新たに全財産百五十萬圓を提供して「新興生活」を旗印に、社會教化運動に乘出すことゝなつた。

新運動は、國民生活指導の權威山下信義氏（五十五年）と修養團理事の岸田軒造氏（五十一年）が音頭とりで、家庭生活の中堅主婦と農村生活の中堅農士の養成によつて、この世の中を明朗に向上させるといふ年來の主張を實現するわけだ。

舊冬以來計畫はとん〳〵拍子に進捗し、この三月一日から丸ビル四階に事務所を開設準備中のところ、早くも本月十一日文部省に財團法人新設の申請手續きをとるまでに至つた。

名稱は「佐藤新興生活館」で、佐藤氏を理事長として、東京市神田區駿河臺一丁目に鐵筋コンクリート六階建（敷地五百三十坪）の大會館を建設し、各階に研究室、陳列所、訓練場などを開設して、人間生活の根本原理から衣食住のあらゆる問題を、研究實施するといふ大がかりなプランだ。

同氏は既に、現金六十萬圓、有價證券九十萬圓（基本金百萬圓、事業費五十萬圓）をぽんと事務所に投げ出し、敷地は八萬圓で買收濟み、會館を三十萬圓でアメリカ建築士ヴオーリズ氏のモダンゴシツク式設計が出來上つてゐる。

また山下氏が數年來獨力經營して來た、靜岡縣田方郡函南村上澤の農村塾をそのまゝ農村部として

繼承し、三萬圓で公會堂、共同農業倉庫、農村托兒所などを新設し、十町歩の農園に理想的農民教化の殿堂をつくるさうだ。

新會館は近く工事に着手し、來年三月竣工次第事業の店開きをするはづだが、「人間生活の原理及び實際を調査研究し、國民の道德生活ならびに經濟生活の向上をはかる」といふ大理想と「新興生活は、愛と犧牲と奉仕に生く」といふ指導精神が、九州の石炭業の一店員から、刻苦勉勵して今日の地位に達した、佐藤氏の一生の宿願であつたさうだ。十三日午後、岸田軒造氏は語る。

「これは佐藤氏の終生の大事業です。同氏は目下九州別府の自宅で靜養されてをりますが、一切を私どもに托されたので、いよいよ財團法人設立の手續きをすませました。目的と事業は人間生活の全般にわたり、新しき生活の建設と普及にあります。會館では生活訓練講習會を毎日開催して、健全なる主婦を大量養成し、また學資に惠まれぬ秀才の養成、農村の中堅青年の指導など、大いに國家のため奉仕する覺悟です」

右につき十三日佐藤慶太郎氏は、別府市天神町の自邸で語る。

「この問題については、十三日午後東京市丸ビル四六〇區の私の事務所で一切を發表した筈です。生活改善運動はあらゆる階級にわたり、日本のみでなく世界人類のために改善運動を行ふ目的である。生活館の仕事としては、精神、物質、道德、經濟などの各部門に分つて研究指導するもので、自分が理事長となり社會事業に關係のある人々が中心で働いてくれることになつてゐる」

☆

これら社會への公表と同時に、「新興生活宣言」と「新興生活綱領」が發表せられた。全員が練りに練つた末、決定したもので、その全文は左記の通りである。

## 新興生活宣言

現下社會の情勢を顧みるに、災禍頻發、悲慘事續出、貧者貧に泣き、富者富に苦しみ、人は人と爭ひ、國と國また穩かならず。百の施設も千の方策も、更に效なき狀態である。この險惡、不安、動搖の世相を見て、誰か深憂を禁じ得よう。

これ畢竟するに、世人が人生の眞意義を自覺せず、金錢至上、物質偏重に墮し、眞理に反する生活を營むに因る。この誤れる生活態度を改めずして、如何に生活改善や、社會改良に努力しても、恐らくそれは徒勞に歸するであらう。

生活革新の要諦は、かゝる自己中心、營利第一主義の人生觀を建て直して、敢然、神中心、（後に

「皇道中心」と修正）奉仕第一主義の靈的（後に「精神」と修正）生活に更生するの外、他に斷じて途はない。この新生命の本源から生れる愛と奉仕（後に「犠牲」と修正）の生活、之こそは正に一切の苦難を克服する唯一の指導原理であり、歡喜光明の世界を建設する無二の根本動力である。

この精神基調に立ちて、一切を合理化したる新生活、之を稱して「新興生活」と謂ふ。

新興生活者は、この原理に基き、生活の科學化、道德化、藝術化、宗教化を圖り、進んで之を組織化し、共同化し、社會化して、普く隣保相愛の實を擧げんとするものである。我等は斷じて之を空理に終らしめず、飽迄も實生活に生き貫かんとするものである。

今や、我等の主張する新興生活運動こそは、方に人類の待望、時代の要求である。幸に我等は、天下の各地に幾多の同人を有する。新興生活の王國は、已に我等の左右に展開しつつある。

同憂同感の士よ、希くは共に祖國の興隆と人類の福祉とのために、我等のこの新興生活運動に協力提携せられんことを。

## 新興生活綱領

一、新興生活は靈的更生に出發す。

（後に「新興生活は皇道を中心とす」と修正）

一、新興生活は愛と犠牲と奉仕に生く。

一、新興生活は力を實生活の合理化に注ぐ。

一、新興生活は人と物と時とを活かす。

一、新興生活は近きより遠きに及ぼす。

☆

發表當時、一部の人士から突飛とさへ見られたこの宣言綱領も、新體制下の今日讀めば、至極あたり前のことばかりで、そゞろ急激な時代の推移を思はせられる。この宣言綱領は、その後運動の進展と時代の要請に卽應して、書き改められ現在に及んでゐる。

宣言綱領と同時に發表された研究事項は、次の十三項目であつた。卽ち、人間生活の根本原理、衣食住、社交儀禮風俗習慣、强健法、精神訓練法、家庭經濟、家庭道德、家庭教育、隣保生活、農村生活、富の有效使用法、生活計畫、日本國家である。

次に、事業概目中、第一の研究に關するものは、實驗研究、資料蒐集、改良改善の集中及普及の三項目。第二の圖書及講演に關するものは、圖書及雜誌の發行、講師の派遣、講演會、映畫教育、生活

訓練講習會の五項目であつた。更に第三の實地教育に關するものは、陳列所の設置、食堂の經營、宿泊所の經營、生活訓練所の經營、母性講座の設置、兒童研究所の經營、模範部落の建設、農村文化の研究及其模型的實施の八項目。第四の實行促進運動に關するものは、新興生活實行組合の指導、實行事項强調運動、一人一研究團の設立、家產造成組合の奬勵、公益財團設立の奬勵、理想鄕土建設の應援の六項目。第五の個人指導に關するものは、生活指導、秀才養成の二項目であつた。

かくて佐藤新興生活館は誕生し、越えて十月八日付で文部大臣から法人許可の指令が下附された。この法人許可になるのを待つて、印刷準備してゐた「新興生活」創刊號が、各方面に發送されたのである。

この創刊號は菊倍判二十頁の新聞型で、表紙には新興生活運動の出發を象徵する二羽の白鳥が、波紋を擴げて進んでゐる寫眞を配し、その下に宣言と綱領を載せたものであつた。

佐藤は第一頁に切々たる當時の心境を吐露し、切なる指導援助を各方面に懇望する挨拶を載せた。その全文は次のやうなものであつた。

☆

## 御挨拶

佐藤慶太郎

「新興生活」の創刊にあたり、謹んで御挨拶を申上げます。

顧みますれば、老生身を實業界に投じまして以來、幸に大過なく素志の一端を遂げ、今日かくあり得まするのは、これ全く天地神明の御加護、大方諸彥の御同情の賜と、深く感謝いたします。しかも內自ら省みるに、報ゆるところ極めて少く、甚だ汗顏に堪へませぬ。

×

つら〳〵考へまするに、およそこの世にあるもの一事一物みな天地の寶、國家の財であります。從つて一錢一毛といへども、私用すべきものではなく、悉くこれを國家社會のために、最も有效に活用すべきもので、我等は唯善良なる管理者であれば足りると存じます。

老生また天物の一部を管理せしめられ、その責任の重大なるを感じ、如何にもしてこれを最高價値に活用し、天地神明と國家の明鑒に背かないやうに致したいと常に苦慮し、如何なる事業にこれを投ずべきかに、絕えず思ひを回らしてをりました。財を蓄へることは、容易ならぬ苦勞でありま

すが、これを使ふことは、更に困難であることを痛感いたしました。

×

回顧しますれば、老生はかつて大いに健康を害し、如何なる醫藥も效なく、百方術盡きたる感がありましたとき、圖らずも生活樣式の誤つてゐることを覺り、飜然これを改め、遂に未だかつてなき强健體を捷ち得ました。今日世間を見まするに、過去の老生と同じ狀態に、惱んでゐる人が少なくありません。

尙、生活の不合理は、單に健康を害するのみならず、あらゆる人生の不幸を生じ、或る意味に於ては、これが困難の最大原因であるとも云へるのであります。これを革正することが、恐らく今日の國家及社會のために、最も大切なことではなからうかと、考へるに至つたのであります。

×

それで多年、生活の研究及びその指導に、奮鬪努力してをられる、山下信義、岸田軒造兩先生に相談いたしました結果、生活館を設立するならば、全身を打ちこんで助けようとの御決意を承り、老生欣悅措く能はず、これこそ善良なる管理者たる重責を果すべき、無二の好機會であると信じ、財團法人佐藤新興生活館の設立を決心した次第であります。

かくして愈々新興生活館とその事業を開始するや、現任理事並に職員各位は、一切を擲つて本館のために沒頭され、加ふるに大方各位の厚き御同情と御援助があり、そのお蔭で早くも法人設立の許可を得、事業計畫も順調に進捗し、玆に先づ機關誌『新興生活』の發刊を見るに至りましたことは、衷心感謝と感激にたへない次第であります。

×

然しながら、想へば本館の事業たるや、頗る廣汎でありまして、その目的達成は、容易ならざる難事であります。財的基礎から申しましても、この大事を企てるには、なほ不充分の憾みがあります。自らはからずしてかゝる事業を企て、責任の洵に重且つ大なるを痛感致して居ります。こゝに唯一の恃みに致しますのは、本館の趣旨に贊成を賜る諸賢の御援助であります。何卒老生の衷情を憐み、微意の存するところを御汲みとり下さいまして、この上とも格別の御指導御援助を賜りたく切に懇願申上げます。（了）

☆

以上が理事長佐藤の挨拶である。如何に彼が自己の持てる富に對し、敬虔なまでの思ひを致してゐたかは、一讀する者の誰しも感ずるところであらう。かくして生れた財團の最初の役員は、次の八名

であつた。

理事長　佐藤慶太郎　　理事(常務)　山下信義
理事(常務)　岸田軒造　　理事(常務)　濱田壽一
理　事　渡邊竹四郎　　理　事　高良富子
監　事　横田　章　　監　事　田中作二

『新興生活』の發刊と共に、滿天下に向つてこの主張に共鳴する同志を求めた。この同志を同人と呼んだ。無から出發したのであつたが、役職員の關係者に出した創刊號の反響は意外に大きく、數ケ月の間に忽ち六千を越える同志を與へられる盛況であつた。

佐藤の晩年の情熱は、かゝつてこれらの新興生活運動の擴大强化にあつた。別府にあれば、殆んど毎日のやうに、常務理事宛に手紙を書いた。それがみな運動促進のものであつた。たま〳〵地方の新聞に館關係の記事が載つたり、運動の參考になる記事などがあると、丹念に切拔いては館宛に送るのであつた。

あるときには、野菜料理の研究家を見出して、その普及方法を相談して來たり、『新興生活』の批評を聞き集めて編輯擔當者に送つて來たり、細かな點にまで一生懸命の協力を惜しまなかつたものである。

三菱鑛業の重役會を兼ねて上京すると、丸ビル前のステーション・ホテルに泊り、暇が出來ると事務所に姿をあらはした。割合に小さな體を伸ばすやうにして、チョツキの脇に兩方の親指をかけ、安い時計の鎖をのぞかせながら、一人一人に短い言葉をかけて歩き、背をそらして非常に快活に笑ひ、ハゲた頭の上に漸くなでつけてある髪を、そつと左の手で大事さうにおさへるのである。それは、翁と呼ぶには若すぎる、永遠の青年とでも云ひたい希望にみちた姿であつた。

生活館理事長として、新生活運動の第一線に立つた佐藤は、責任の重きを痛感すると共に、自らその模範とならなければならないことを、しみ〴〵と考へたに違ひない。彼は昭和十年十月十三日の六十七歳の誕生日に、これだけが唯一の道樂とまで云つてゐた煙草を、斷然排止したのである。その直後、館宛の書信中に「小生禁煙の件」と小標題をつけ、次のやうに書いてゐる。

小生薄志弱行のため、禁煙を實行不致居候處、小生の誕生日、卽ち去る十三日より禁煙致居候處

ニコ中の關係にて、夜も眠りが十分出來不申、又頭がボンヤリして、手紙を認め申すにも、何時ともはなしに眠る事有之、困入居候。然し今三四日辛抱すればと樂んで續行致居候。右の次第に付、御推讀被下度奉願上候。

事務所の者は、みなこの手紙が來るまで、佐藤の愛煙家であることを知らなかつた。といふのは、十餘人のこのグループに、最初から一人の喫煙者もなかつたので、佐藤は事務所に來ては、一度も愛用の葉卷を取り出したことがなかつたからである。自分の生活は極度に節する佐藤も、この愛煙だけは例外で、舶來の高級品を離したことがなかつた。その唯一の道樂とも云ふべき喫煙を、斷然捨てたのであるから、よほどの決意でなければ、實行は出來ないのである。佐藤をして敢然それをなさしめたのは、生活指導者といふ新しい生涯の責任感であつた。

丸ビルの假事務所は、昭和十二年四月五日、駿河臺の新館に移轉するまで、滿二ケ年を送つた場所である。それは四階の四六〇號室で、大内山に面してゐた。毎朝始業前に、窓越しに宮城を拜して、朝禮を行つたものである。新しい何名かの館員をこの間に加へたのであるが、何れも嚴肅な入館式をとゝで擧げ、國歌を奉唱し、宣誓をしてから、この群に加へるのであつた。佐藤は事情の許すかぎりそれに立會ひ、共に國歌を奉唱して新しい人を迎へた。

當時は物價が廉かつたので、晝食は大抵五錢のパンであつた。誕生祝の日には、それにバナナ二本位ついて、會費は十錢程度であつた。時によると、一階の食堂で、二十錢の鰻丼を食べることもあつた。佐藤は喜んで、一同と行を共にし、「これはいゝ、これに限る」と云つてゐた。

毎週土曜日には、相互の親睦をはかり、切瑳琢磨をするために、土曜會と稱して、あるときは事務所に、あるときは各自の私宅をめぐつて、會合を催してゐたが、佐藤は上京中ならば必ずそれに出席し、別府歸宅の場合はそこから出される一同の寄書きを、子供のやうに待ちこがれては讀んでゐた。

佐藤の晩年生活の焦點は、たゞこの生活館にあつた。明けても暮れても、如何にして生活館をもり立て、發展させ、國家のお役に立てるか、といふたゞそれのみに心を注いでゐたのである。云はゞ彼は、渾身の情熱を燃やして、たゞこの一事に賭けてゐた。彼の生涯中に於て、最も華やかな、しかしそれだけに苦勞も多かつた最後の事業は、かくして徐々に育くまれて行つたのである。

事業の拙劣はあつたであらう。幾多の失敗は續いたであらう。積極性に於て、大衆性に於て、大いに缺けるところもあつたであらう。けれども、これだけは斷言出來る。それは、佐藤を始めとれにた

づさはつた者の、燃えるやうな情熱と、運動の方向だけは、斷じて間違つてはゐなかつたといふ點である。

當時坊間の批判者たちは、個人主義的な立場から、勝手な偏見を以て、さま〴〵な誹謗をも敢てしたのであるが、新體制下の今日、自らその非を認めざるを得ないであらう。それ程、生活館の主張と實踐は、時代に先行し、時代を鞭打つてゐたのである。

駿河臺に聳え立つ新しい會館に引き移る日が來た。昭和十二年四月五日の朝。

引き移つたとはいふものゝ、使へるのは僅かに小さな事務室と便所の二ケ所のみ、他は職人が多勢はいつて、朝から晩まで鎚の音が響き渡つてゐた。工事は、設計監督がヴォーリズ建築事務所、請負が清水組であつた。昭和十一年五月に起工して、翌年の七月に全工事の竣成を見たのである。什器を加へて、總工費約三十八萬圓であつた。

四月二十九日、天長の佳節を迎へた。この日全國から十七名の若き女性が集つた。第一回生活訓練所の入所式が行はれたのである。子供のない佐藤が、急に十餘人の娘の父親になつたのである。彼は多くの來賓と訓練生を前にして、晴れやかな顏を見せながら式辭を述べた。その中に「現代女子教育上の重大なる缺陷は、個性を無視した畫一教育、乃至は淺く廣い偏智教育に墮し、實生活を營む場合幾多の不便不都合があります。これは現代の教育組織その他の、やむを得ない事由によることでありますが、これが革新補正の途を拓くことは、國家緊急の要務であると信じます。故に當訓練所は、より多く實生活の訓練、實習實驗に重きをおき、生活體驗を通して學ぶといふ、所謂知行合一の體驗的生活訓練を主眼とする方針であります」と、云つてゐる。

夏になつた。佐藤は湯の平溫泉で、訓練所の生徒たちへ宛て、次のやうなハガキを書いてゐる。

愈々お暑くなりましたが、皆さんは定めて元氣に勉強されてゐることゝ存じます。私は去る二十二日から表記に避暑致してゐます。八月までは當地に滯在し、九月下旬に上京して皆樣におめにかゝるのを樂しみに待ちをります。

皆樣は來月中お休みだから、本書の屆く頃は、いそいそとお歸りの仕度中と存じます。歸省されましたら、御體を大切にされることは勿論、これ迄習得されたことを、家庭生活に應用されんこと

露光量違いの為重複撮影



大　姉

を切望いたします。當地は中々冷しうございます。この冷氣を送つてあげたいが、進んだ今の世の中でもそれが出來ず遺憾千萬です。妻よりも宜敷と申出てゐます。

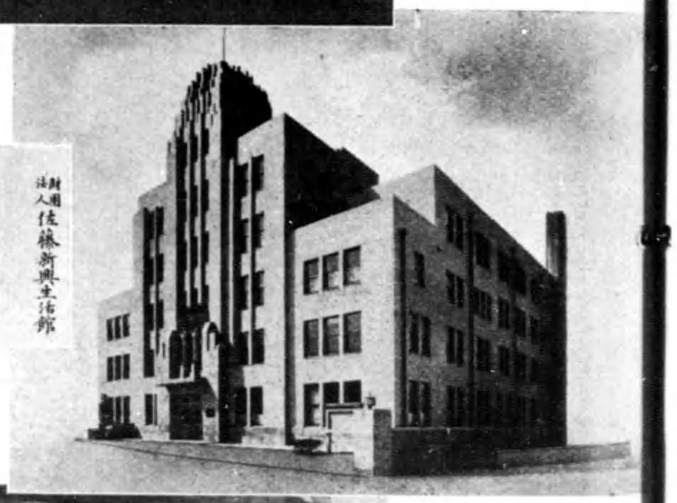
御宅の皆様にもよろしく。左様なら。

第一回の卒業生を送り出してから、一人の父兄に次のやうな手紙を書いてゐる。

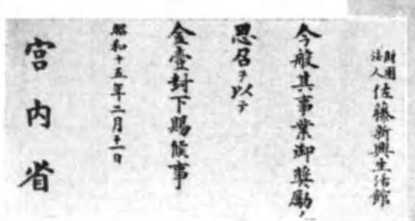
（前略）御令嬢生活訓練所御卒業に付、御懇篤なる御禮狀に接し、恐縮仕居候。御承知の通り創設初年の事とて、萬事整頓不致、不行屆千萬にて誠に遺憾千萬に御座候。然し訓練生の自發的研究修養により、幾分生活に付ての御自覺に資する處有之候樣にて、其點大いに喜び居候次第に御座候。

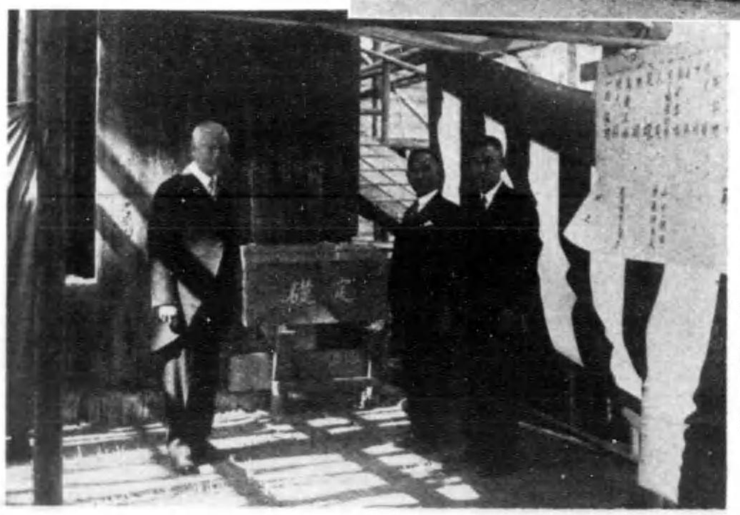
御令嬢にも申上候通り、我國の通弊として、學校卒業後はとかく研究や修養を怠り勝に相成候。特に運動の如きその甚だしきものに候間、研究や修養は一代を通じて怠らず、運動其他日常生活、特に飲食の如き生活館にて御習得相成候ものを活かし、御自身は申す迄も無之、御家族全部延いては他のものを感化し御指導被下候事を切望仕候次第に御座候。尚幸ひ御近所の事に付、御暇の節には生活館に御出入、御妹分の新入生を御指導被下候へば、此上なく仕合に存じ候。

生活館創立の日（昭和十年三月一日）



佐藤生活館




定礎の日（右工事請負者・左設計者）

露光量違いの為重複撮影



大　姉

を切望いたします。當地は中々冷しうございます。この冷氣を送つてあげたいが、進んだ今の世の中でもそれが出來ず遺憾千萬です。妻よりも宜敷と申出てゐます。

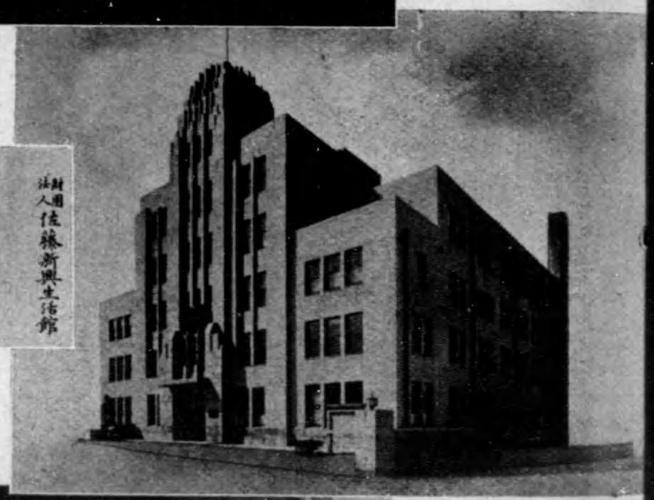
御宅の皆様にもよろしく。左様なら。

第一回の卒業生を送り出してから、一人の父兄に次のやうな手紙を書いてゐる。

（前略）御令嬢生活訓練所御卒業に付、御懇篤なる御禮狀に接し、恐縮仕居候。御承知の通り創設初年の事とて、萬事整頓不致、不行屆千萬にて誠に遺憾千萬に御座候。然し訓練生の自發的研究修養により、幾分生活に付ての御自覺に資する處有之候樣にて、其點大いに喜び居候次第に御座候。

御令嬢にも申上候通り、我國の通弊として、學校卒業後はとかく研究や修養を怠り勝に相成候。特に運動の如きその甚だしきものに候間、研究や修養は一代を通じて怠らず、運動其他日常生活、特に飲食の如き生活館にて御習得相成候ものを活かし、御自身は申す迄も無之、御家族全部延いては他のものを感化し御指導被下候事を切望仕候次第に御座候。尚幸ひ御近所の事に付、御暇の節には生活館に御出入、御妹分の新入生を御指導被下候へば、此上なく仕合に存じ候。

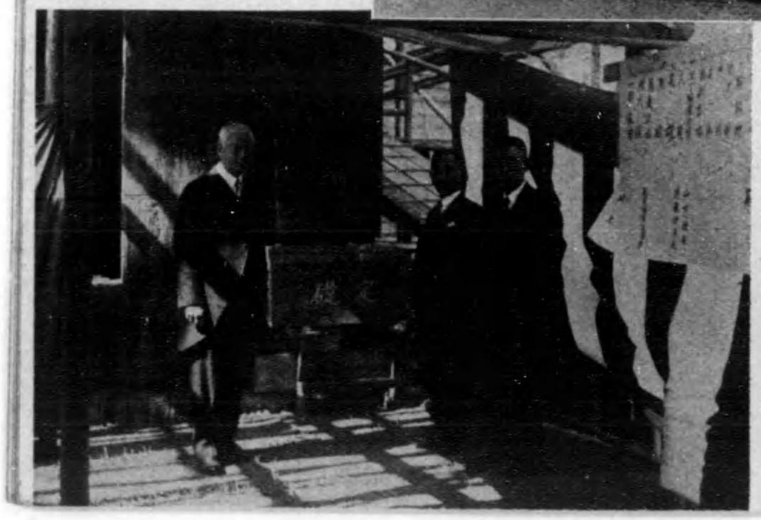
生活館創立の日（昭和十年三月一日）



佐藤生活館

財團法人佐藤新興生活館
今般其事業御奬勵ノ
恩召ヲ以テ
金壹封下賜候事
昭和十五年二月十日
宮内省

聖恩無窮



定礎の日（右工事請負者・左設計者）

露光量違いの為重複撮影

第二回生には、近親の娘が入學して來た。佐藤はその母親に、次の手紙を書いてゐる。彼の一生懸命さが、如實に浮び出てゐる。

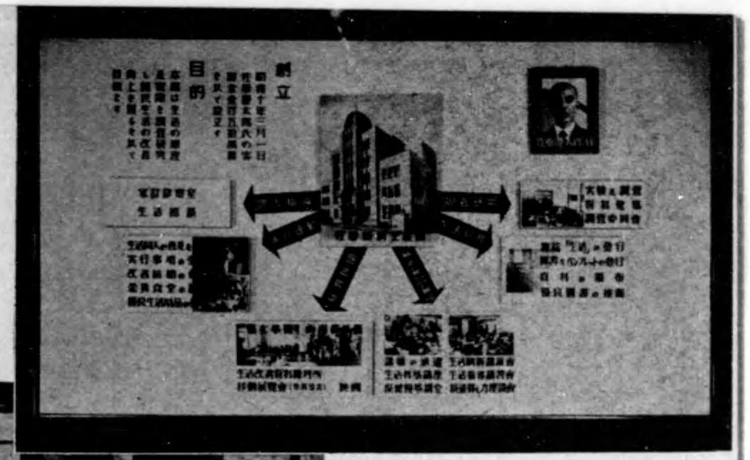
（前略）令嬢休暇御歸省相成候處、生活館の教育や訓練が幾分效果有之候や。僅に四ケ月の在館に付、大したことは御認不相成事と存候も、御感想及び生活館の教育訓練の仕方に付、御氣付きの點は何卒御腹藏なく御報被下度、吳々も御願申上候。

訓練所が後に三鷹女學園と改稱して、府下の三鷹に移つてからも、時をさいては訪問に出かけ、何くれと心を配つてゐた。そして生徒のつくる手料理を、どこの料理よりも喜んで食べた。その中でもおさつが大好物で、或る時には同伴の喜代子夫人の分まで、平げたものである。それ以後、佐藤が行くと、生徒たちは必ず獻立の中に、鰯とおさつを加へることを忘れなかつた。

生活訓練所の開設と相前後して、安價榮養食の普及を圖る榮養食堂が開始され、三分搗のくろい御



一階廣間の事業概觀



聖農學園生徒と語る

生活訓練所卒業式

精動理事長を陳列所に案内

屋上にあげたる生活費
切下運動の廣告氣球

露光量違いの為重複撮影

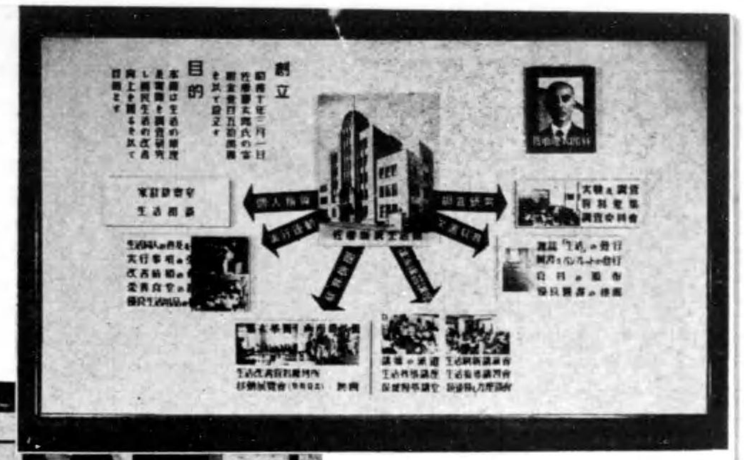
第二回生には、近親の娘が入學して來た。佐藤はその母親に、次の手紙を書いてゐる。彼の一生懸命さが、如實に浮び出てゐる。

（前略）令嬢休暇御歸省相成候處、生活館の教育や訓練が幾分效果有之候や。僅に四ヶ月の在館に付、大したことは御認不相成事と存候も、御感想及び生活館の教育訓練の仕方に付、御氣付きの點は何卒御腹藏なく御報被下度、吳々も御願申上候。

訓練所が後に三鷹女學園と改稱して、府下の三鷹に移つてからも、時をさいては訪問に出かけ、何くれと心を配つてゐた。そして生徒のつくる手料理を、どこの料理よりも喜んで食べた。その中でもおさつが大好物で、或る時には同伴の喜代子夫人の分まで、平げたものである。それ以後、佐藤が行くと、生徒たちは必ず獻立の中に、鰯とおさつを加へることを忘れなかつた。

生活訓練所の開設と相前後して、安價榮養食の普及を圖る榮養食堂が開始され、三分搗のくろい御



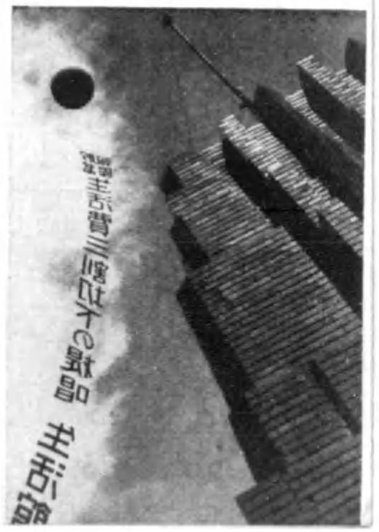



一階廣間の事業概觀

聖農學園生徒と語る

生活訓練所卒業式

精動理事長を陳列所に案内




屋上にあげた生活費
切下運動の廣告氣球

飯が提供され出した。忽ち近所の學生やサラリーマンが押寄せて、晝食時になると、二階食堂の食券賣場から玄關まで、長蛇の列が續くことが多かつた。

佐藤はそれが嬉しくてたまらなかつた。よくそれらの群に交つて、同じ食卓で食事をしてゐた。たゞ一つ、どうしても我慢のならないことがあつた。それは學生の大部分が、いくら注意しても帽子を被つたまゝ食事することである。食堂の係員に注意させても一向きゝめがないと、彼自身が起ち上つて一席辯じたりもしてみた。そのときだけは效果があるが、すぐ駄目になる。「何か名案はないものか」と、彼も匙を投げた形であつた。

そこで會館主任は衆智をあつめ、次のやうなビラをつくつて、一週間食堂の入口で來食者に手渡したのである。

**食事作法の標語募集！**

**お食事の時は**

**帽子をとつていただく**





**感謝をしていただく**

**この心持をあらはす標語**

日本古來のこの美しい慣習を守るため、食事作法の愛護徹底運動を初めました。その第一着手として右標語の募集をいたします。奮つて御參加下さい。

**應募規定**

**一、應募資格**　本館食堂利用者各位

**二、締切**　昭和十四年十二月二十五日

**三、發表**　昭和十五年二月十一日本館内に掲示

**四、賞**　一等　金五圓　一名　（食堂回數券）
二等　金三圓　二名　（同　　）
三等　金一圓　三名　（同　　）

**五、審査員**　代議士　吉植庄亮氏
本館常務理事　水野常吉氏
同　岸田軒造氏

**六、其の他**　一人で何句應募するも可。但し一枚一句のこと。
應募用紙並に投入箱は玄關受付にあり。

果然これはヒットであつた。といふのは、これを手渡したゞけで、帽子のまゝ食べる無作法者は跡を絶つたからである。それと同時に、應募標語は、投入箱に一杯になつた。その中から選び出された入選句は、次のものであつた。

☆

一等、命の糧、帽子をとつて食べませう。

二等、あめつちのたまもの、おろがみいたゞく。

三等、脱帽、默禮、そして樂しく。

☆

一等當選は、日本太郎といふ假名氏で、某大學の教授であつた。

この結果を、誰よりも待つてゐたのは佐藤であつた。それにも拘らず、これは佐藤の生前に間に合はなかつたのは遺憾であつた。

食堂はその後地下一階に移り、國民食指導を專門として經營され、今日に及んでゐる。

食堂と殆んど同時に、全國同人のための宿泊所も開始され、多くの人々から感謝されてゐる。

生活館の創立と同時に、農村生活の研究指導をする目的で、靜岡縣田方郡函南村上澤に、約十町歩の土地を購入して農村部を設置し、昭和十一年十月から、農村中堅青年錬成のために、聖農學園（現在の函南錬成所）を開設した。

佐藤はさきに、福岡の農士學校創立に盡力した經驗もあり、非常な熱意をもつて度々農村部に足を運び、生徒と膝を交へて農村問題を談じた。

昭和十二年七月、突如として支那事變が勃發した。生活館も準備時代を終つて、本格的な活動に移る時が來たのである。即ち九月、國民精神總動員の實施に即應して、生活改善關係諸團體の幹部有志十八名と相諮り、館内に「時局對策生活改善協議會」を組織し、數次會合研究の結果『時局對策生活實踐要項』九項目五十ケ條を決定し、全國各方面に四萬三千部を寄贈、文書宣傳の火蓋を切つたのである。

一方、會館建築工事が漸く竣工したので、十月三十日をトして落成式を擧行、朝野の名士五百名を招待した。同時に、落成記念の「時局生活展覽會」を、十月三十一日から八日間館内に開催して一般に公開、多大の好評を博した。現在の資料陳列所は、その一部を常設としたものである。

會館の敷地は五百三十二坪、會館は鐵筋コンクリート六階建、建坪は百七十四坪、延坪九百三十三坪二三の堂々たる近代建築である。落成記念式は教育勅語御下賜記念日の十月三十日、午前十時から擧行された。集るものは、帝都各方面の名士、全國から馳せ參じた熱心なる同人その他百餘名。

この日秋空は隅なく晴れて紺碧の濃色をたゝへ、會場に當てられた食堂の窓からは、西の中空に白雪の富士が、まるで夢のやうに浮んでゐた。正面に張りめぐらされた紅白の幕、壇上に飾られた大輪の菊花と蘇鐵、すべてが新なるものゝ誕生を祝福する象徴のやうに目新しかつた。

やがて式は中島主事司會のもとに進められた。岸田理事立つて開式の辭、つゞいて伊勢大廟と宮城遙拜、國歌君ケ代の齊唱、山下理事の教育勅語捧讀、岸田理事の工事經過報告、次いで佐藤は立つて關係當局及び來賓へ心からの感謝を述べ、次の式辭を朗讀した。

## 式　辭

本日玆に佐藤新興生活館會館落成式を擧行するに當り、朝野多數貴賓の御賁臨を辱うしたるは、誠に光榮感謝に堪へざる所なり。

抑々本館は、國民生活の改善刷新に寄與せんがため、昭和十年三月創立したるものにして、其の活動の本據たる會館の必要を痛感し、之が建設を企圖するや、各方面より多大の賛助を寄せられ、殊に串田萬藏氏は、本館の敷地につき多大の便宜を供與せられ、ウイリヤム・メレル・ヴオーリズ氏は、絶大の厚意を以て、設計及び監督を擔當せられ、清水釘吉氏亦本館の趣旨に全幅の共鳴を以て、營利を超越して本館建築工事を請負はれ、愈々工を起すやヴオーリズ建築事務所及び清水組の本工事關係者各位は、至誠獻身の努力奮闘を續けられ、附帶工事施工者各位亦同一精神を以て事に當られ、之等諸氏の完全なる協力一致の結果、工事は極めて順調に好成績を以て進捗し、本日恰かも教育勅語御下賜の吉辰を卜し、之が落成式を擧ぐるに至れり。之れ偏に天地神明の加護と、關係各位の熱誠なる御援助の賜にして、眞に感謝感激措く能はざる所なり。

今や國家非常重大の時機に際會す。國民生活の改善刷新を要すること、今日より急なるはなし。本館は、この會館落成を契機として本來の使命たる生活改善合理化の運動に、一段の飛躍進展を遂げ、以て聊か皇國の進運に貢獻せんことを期す。御臨場の各位に於かせられても、今後本館事業發展のために、一層の御援助御指導を賜はらんことを切に懇願して止まざるなり。

一言蕪事を述べて式辭とす。

昭和十二年十月三十日

新しき大施

續いて、文部大臣、內務大臣、東京府知事、中央教化團體聯合會の祝辭。

理事長の發聲で萬歲三唱。集る各層の指導者が、聲高らかにこれに唱和し、新たなる出發を祝福したのである。

終つて正午から午餐會が開かれた。時局柄、神ながら料理の折詰ではあつたが、主客共に歡をつくし、午後二時午餐の宴を閉ぢた。

昭和十三年に入つて、二月から月例の「生活講座」が開設され、四月から機關誌『新興生活』を『生活』と改題、菊判八〇頁の現行型に改裝した。七月からは長野縣を皮切りに、全國各府縣廳、公共團體と共同主催で「時局對策生活指導者講習會」を、全國に向つて展開した。八月にはいつて、支那事變處理、東亞新秩序建設のため要請された八十億貯蓄に呼應し「生活費三割切下」運動を開始し、パンフレット五萬部の頒布、指導者講習會、體驗報告懸賞募集、理事長のラヂオ放送等々、大車輪の活動が續いた。これと並行して精動本部制定の「國民儀禮章」の普及運動に乘り出した。

佐藤のラヂオ放送は、九月五日の午後三時から福岡放送局で行はれた。「生活費三割切下の提唱」と題し、全國中繼の放送であつた。生れて初めての放送なので、幾日か熱心な練習をした。放送の前日生活館へあてゝ「明日は館員一同、訓練生も聽取被下候趣、最初のことゝてうまくやれるかどうか幾分不安に候へ共、可成大膽にやる積りに御座候。親類の者よりも明日の放送しつかり賴むなどゝ先刻電信接手致候」と書いてゐる。なか〳〵の緊張ぶりである。

當日の出來は上々であつた。熱もあつた。迫力もあつた。各方面に異常の反響を與へた。語る人自身が、提唱以上の生活の實踐者であることを知る者にとつては、特別な感激を與へられたのである。

放送原稿の全文は、次のものであつた。

## 生活費三割切下の提唱

佐藤慶太郎

皆樣御承知の通り、時局はいよ〳〵經濟戰となりました。これに對處するために、政府當局は八十億圓の貯蓄を必要とし、國民に對して極力これを奬勵されてゐます。

この八十億の貯蓄をつくると同時に、物資の缺乏と物價の騰貴を防ぐために、この際必要なことは國民の生活費を切下げることであります。これが徹底的に行はれるか否かゞ、この戰の勝敗を決する

最も大切な事柄となりました。

人間の生活には、上には上があり、下には下がありますが、私はこの時局に當り、戰爭目的達成のために、全國民の生活費を三割切下げることを提唱致します。

生活費の內容は、申す迄もなく、食費、住居費、衣服費、育兒費、交際費、その他でありますが、この各費目につき、この際それ〴〵十分研究致しまして、或は一二割、或は六七割を節減し、平均して今申しました通り、總額の三割減と致しました。

各費目についてその概要を說明申上げます。

×

ところで生活費三割切下げなどゝ申しますと、皆樣は唯實質の低くなつた生活を想像されることでありませう。しかしこれは決してさやうなものではなく、私共多年の經驗によりますと、無駄のない十分潤ひを持つた眞の人間生活は、却つて現在の生活費を三割位切下げて、始めて得られるものであると確信致します。

第一に食物であります。一般の人々は徒らに目で見て美しく、舌で味つておいしい物を、一種の見榮外見に捉はれて食べてゐます。そのために、榮養的には不合理であり、經濟的には著しい浪費をしてをります。

曾て米國のフレッチヤーと言ふ人は、その體驗から、よく嚙んで食べれば「食物は從來の分量の半分で充分に榮養を攝り得る」と主張致しました。

これは我國でも、多くの榮養學者や體驗家によつて、間違ひのないことが證明されてをります。

我々日本人は總體的に適當量以上三割も食べすぎてゐると言はれてをります。これがために、胃腸病が國民病と云はれる程に多いのであります。これを適當量に改めることは、單に經濟上だけではなく、體位向上の點から見ましても、頗る必要なことであります。

最も大切な主食に就ては、白米廢止が全國的に强調されてをりますのは、誠に結構なことでありまして實驗致してをります健糠飯、卽ち健かな糠の飯と書きますが、これは搗精して糠を離さず、全部その儘に炊くのであります。これらのものに改めますれば、米の消費量が大いに減り、同時に榮養價はたゞの白米よりも非常に高まります。

また副食物も、動物食をなるべく減じ、菜食を主と致しますれば、健康上や經濟上から見まして、非常に宜敷く、しかも副食費二割以上の節約は、樂に出來ると思ひます。

現に大都市の人々は、食費として普通大人一日三十五六錢の金をかけて居りますが、私共の研究によりますと、これは一日二十二三錢の金をかければ、出盛りの食品材料を使つて、毎日變化に富んだ榮養の多い食物を攝り得るのであります。

勿論食事は、人間の樂しみの一つでありますから、唯榮養一方のみでは解決は出來ませぬが、以上述べましたやうな合理的の食生活を致しますると、ほんとうの美味と快樂のあることを、私共は體驗致してをります。

以上を綜合致しまして、私の理想としては、食物の量に於いて五割、質に於いて一割、都合六割減は可能と存じますが、先づ以て食費の二割減を提唱致します。

次に衣服生活でありますが、我が國民が二重三重の衣服を持つことは、隨分無駄不經濟なことだと存じます。衣類の單一化を圖つただけでも、優に三分の一以上の節減が出來ますし、その上箪笥の中の死藏品を活用致しますと、三年や五年は何も買はなくとも、繰り廻しのきく方々も非常に多いと思ひます。

衣服の單一化につきましては、我が國の氣候風土から致しますれば、洋服は夏冬二種類あれば事足る筈で、春秋の合服などは無くても濟みませうし、和服も亦單衣袷綿入と三通りも揃へるに及ばないと思ひます。

なほ衣服は手入保存の如何により、二割や三割の節減は可能であると言はれてゐます。洗濯の仕方の不合理や、蟲の害のために、あたら衣類を損耗させるのは、その人の無智と不注意を表はすもので實に恥ずべきことと云はねばなりません。型の點につきましても、活動不便な現在の樣式を段々に改め度いものであります。假に男子は筒袖、女子は元祿型に、各人が只一枚宛着物を節約しましても、內地人七千萬として、少くとも五百萬反の節約が出來るのであります。生徒や學生の半ズボンなども奬勵致したいものであります。

皆樣御承知の通り、被服資源の不足は、我が國の最も大なる惱みでありまして、現に綿花羊毛衣料用パルプなど、年々十數億圓の輸入を餘儀なくされてゐます。尤もこのうち、加工して海外に輸出する額も相當ありますが、この際この方面の徹底的改善を叫ばずにはゐられません。

是等を考慮致しまして、こゝに衣服費七割減を提唱する次第であります。

次に交際費について申上げます。

第一に贈答が餘りに多すぎることであります。殊に先方の利便都合は第二第三として、只如何にすれば實際の金高より高く見て貰へるかと云ふ點だけに苦心する、形式的虛榮の贈答が多いのであります

す。

「本家から出た歳暮の鴨が、數の親類一廻り」と俗謠に歌はれるやうな滑稽が、到るところに演じられてゐます。

これは單に、中元やお歳暮ばかりではありません。たとへば、瀕死の病人の枕元に、砂糖の山が築かれたり、或は胃腸病で苦しんでゐる者の病床に、醫者から禁じられてゐる菓子折の洪水が見舞うと言ふやうな皮肉が、繰返されてゐるなど、何と云ふ無自覺なことでありませう。

もとより私は、贈答を絶對に廢止せよと言ふのではありません。遠方に離れて住んで居る兩親や、或は舊師恩人などに、その地特有の產物を贈るとか、または旅先から先輩の嗜好物を見つけて贈るなどと云ふことは、大變美はしいことであります。かくてこそ、贈答も始めて意義があると思ひます。

要するに、義理に搦まれた虛禮の贈り物を根絶して、特にその方面の改革を實現したいと存じます。

また來客の接待なども同樣であります。特別の場合の外は、菓子や果物などを出さぬことにし、食事時になつたからと云つて、外から物を取つたりしないで、家族と同じお惣菜で、食事を共にするやうに致したいものであります。お客と云へば直ぐに菓子屋に走つたり、料理屋に電話をかけると云ふやうな虛禮生活は、この際是非淸算したいものであります。

更に宴會の無駄も、隨分大きいものであります。幸にこの節は、時局柄その數が大いに減つたり、會費が安くなつたりしますのは、誠に喜ばしいことであります。これもこの際、徹底的に改善致したいものです。

尙通信は、成るべく葉書を用ひ、年賀狀や暑中見舞狀などは、少くとも事變中は差控へる位に致したいものであります。

このやうに致しまして、交際費に於ては、十割の切下げを主張致します。

次は嗜好娛樂費でありますが、これも改むべき點が多々あるやうに思ひます。

嗜好の中でも、特に酒類や煙草のやうな有害物は、斷然これを排除したいものであります。しかしすでにこれを嗜むものに、今俄かにこれを全廢せよと云つても、實行困難でありませうから、少くとも一日二合晩酌をやつてゐた人は一合に、二箱の煙草を吸つてゐた者は一箱に、節酒節煙すべきであります。それから淸凉飲料水なども、成るべく自家製の梅汁とか、或は麥茶、はぶ茶のやうな物を以てこれに代へたいものであります。

次に嗜好と共に健全な娛樂は、人生に必要なものであります。しかしながらその娛樂は、決して金

をかけなければ求められないものではなく、家族が協力して培かつた一輪の草花にも、却つて萬金を投じて得たものよりも、多くの樂しみが得られませうし、また空箱を利用した野菜の栽培にも、家族打ち揃つてその成育を樂しみ得る天地がございます。その他摘み草を兼ねたピクニツク、或は體位向上を目指した遠足など、數へあげれば幾らもあると思ひます。このやうに致しますと、嗜好娯樂費の六割位は、容易に浮くのではないでせうか。

この外家具什器は、成るべく日常必需品の破損消耗を補ふ程度に止めまして、事變中は出來るだけ新品を買はずに間に合はせ、これを七割減に致したいと思ひます。

次に保健衛生費は、最初に述べましたやうに、食物を徹底的に嚙んで食べるとか、分量を腹八分目に控へるとか、或は榮養を改善する等の實行によりまして、胃腸を丈夫にし、抵抗力を強め、一方また家族打ち揃つて、ラヂオ體操、冷水浴、皮膚摩擦、深呼吸、その他各種の强健法を行つて、健康の增進を圖ることに致しますと、醫藥費は大いに減つて來る筈であります。それで四割の節減は、左程むづかしいことではないと思ひます。

次に育兒教育費に於きましては、一割の節減を提唱致します。先づ學用品の節約、小學校の兒童から大學生まで、辨當の携帶、子供の間食に糖分の多い菓子を與へぬこと、殊に買喰ひの惡習慣をつけぬこと、學生の斷髮勵行、學生服の統一等を實行致したいものであります。

×

以上生活費切下げの主なる項目について申述べましたが、この外光熱費に於て一割、交通費に於て一割、雜費に於て五割の切下げを主張したいのであります。かく生活費を切下げますれば、三割減の外、豫備費が一割位出る筈でありますから、これを使はずにすませれば四割減、即ち百圓の收入ある者には、四拾圓の貯蓄が出來る譯であります。詳しい事柄につきましては、時間の都合上申し上げられませぬが、これらの具體的の事柄を取纒めました册子がありますから、それを御參照願ひ度く存じます。

申す迄もなく、御互の生活は、各々その事情境遇を異にしてをりますから、各費目の切下率が、何人にもピツタリ一樣に當てはまらないかも知れませぬが、どうかこれを參考にして、各御家庭で適宜工夫應用し、御實行を願ひたく存じます。要するに私の提唱致します生活費切下げ案は、無理に絞り出す案ではなくして、今迄の生活の不合理を改め、無駄を無くすることによつて、自然に餘つて來るものでありまして、このやうな生活をすることが、單に經濟上だけでなく、健康上からも、道德上からも、總ての點に於て、眞理に適ふのであります。

このやうな見地から致しますと、生活費切下げ三割貯蓄の主張は、却つて眞の人間生活に立返る道でありまして、このやうな思ひ切つた生活刷新こそ、たゞに八十億の貯蓄を完成して、銃後の務めを果す道であるばかりでなく、負債ある者にはこれが償却の機會を與へ、備へ無き者には生活安定の基礎を築く好機會でありますので、この未曾有の國難を契機として、國民擧つて今迄の生活の一切の不合理を斷乎として改めたいものであります。（了）

☆

越えて昭和十四年を迎へると、政府は國民に對して、百億貯蓄の絶對必要をうつたへ、その奮起を促した。元來、貯蓄と生活刷新は一體不離のものである。生活刷新のないところに、積極的な貯蓄はあり得ない。政府も精動も民間の各種團體も、みなこの指導に乘り出した。新聞雜誌は悉く生活指導機關となつた觀さへあつた。

この擧國的な戰時生活體制の確立に際して、生活館は實質的に大きな貢獻をしたのである。といふのは、精動を初め各方面の指導機關が取上げた生活刷新の具體案は、おほむね創立以來の生活館が、默々と蓄積し來つたものであつたからである。精動の發表した冠婚葬祭の改善案などは、その代表的なものである。

この年の六月には、產業報國聯盟と協力して、殷賑產業關係者の生活刷新と貯蓄奬勵に資するため『產業報國と生活刷新』を發行し、產業報國運動に積極的に働きかけた。九月からは國內態勢に對應して「銃後の暮し方座談會」の開催を提唱し、先づ地元の東京から口火を切つたのである。同時に全國の有力者、熱心家に「生活刷新委員」を委囑し、全面的な刷新運動を展開したのであつた。

舊體制の見本然たる結婚に、結婚新體制を提唱し、本館を提供して、これが實行を奬勵したのも、この頃からであつた。花婿は背廣、花嫁は普段着、參列者は平常服に各々儀禮章、宴會は從來の披露式に代る一圓會費持寄りの祝賀會といふのが、冬期には殆んど毎日のやうに擧げられた。

參考のため「結婚改善の手引」中から、改善結婚要項の一節を摘錄してみよう。

## 改善結婚要項

一、見合

見合は劇場料亭などを避け、服裝や饗應はつとめて簡素にすること。

二、婚約

相性、十二支、日取などの迷信にとらはれず、また婚約前に相互の血統を精査し、健康診斷書を

取り交すこと。

三、結納

結納は、指輪、袴、帶、小袖及現金等を廢し、鰹節、鯣、鹽物、末廣、熨斗、昆布などのうち、一種又は數種を取合せ、適宜一臺にして贈り、固い約束の儀禮にとゞめること。

四、結婚費

結婚費（結納、衣裳、調度品、擧式、宴會等の費用）の總額は年收の二割以下とし、詳細なる豫算をつくること。餘裕ある場合は、郵便年金、生命保險、据置貯金、國債など、生活準備金として持參すること。

五、式服

式服は國民服または制服を用ひ、然らざる場合花婿はなるべく平服、花嫁は留袖以下とし、儀禮章を佩用すること。

參列者の服裝もこれに準じ、簡素にすること。

六、擧式

式はなるべく神社、公會堂、學校等、公共の場所に於て擧行し、式後直ちに家庭に入り、祖先の靈に報告すること。

七、誓詞及屆

結婚誓詞を作り家寶として保存し、婚姻屆は式場に於て調印、直ちに屆出をなすこと。

八、披露宴

媒酌人友人等主催の下に、披露宴を兼ねた會費制度の祝賀會を開催し、宴會は一人當り三圓以下とし、出席者は別に祝品を贈呈せぬこと。

九、結婚記念錄

なるべく結婚記念錄をつくり、婚約より結婚までの經過、結婚式次第、式參列者、祝賀會次第及出席者、祝辭、祝電、獻立表、寫眞などを記錄保存すること。

一〇、其他

衣裳見せ、送り込み行列、留別宴、里歸り、婿入り等は全廢すること。

☆

これらの要項の決定には、いつも佐藤は出席して、熱心に各委員の討議に耳を傾け、ときには自ら妥當な意見を提出したのである。

佐藤はこれら生活館の積極的な活動と並行して、一方に米穀國策研究會を起し、その理事長として昭和十三年の春から熱心な運動をつゞけてゐた。

米の問題は一番大切なものであるにも拘らず、一部有志の研究に止つて、一般は風馬牛の有様である。これでは近い將來に必ず食糧問題が起る。戰爭と食糧不足は避けられぬ因緣である。瑞穗の國と自稱する日本といへども、この例外ではあり得ない。その結果は國民體位の減退となることは必定である。さうなつては由々しい問題である。今の中に節米を勵行して在庫食糧をへらさぬやう、そして國民の保健榮養を全くし、更に增產計畫を確立せねばならぬといふのが、米穀國策研究會の誕生理由であつた。

この運動を始めたのは、吉植庄一郎、庄亮の親子と、米の研究家佐藤長平等であつた。吉植庄亮は同じ代議士仲間の原口中將を介して、佐藤を理事長に依賴して來たのであつた。米の問題に特別關心の深い佐藤は、さつそく理事長を引受け、一條公爵を會長に推戴し、生活館の一室を事務所に提供、益田孝、尾崎行雄、廣田弘毅、頭山滿等を顧問として、活潑な運動を開始したのである。

佐藤は從來の關係から、米の衞生上、榮養學上の問題は委しかつたし、且つまた貴い體驗の持主でもあつた。その上に熱心な研究家で、自分の納得が行くまでは、幾度でも專門學者を訪ねた。しかし米の生產、消費部面の問題になると、殆んど素養がなかつたので、その道の專門家である吉植の話を熱心に聞いた。テーブルの上に片肘を立て、耳に手をかざして、體をすひつけるやうにして、それから、それからと後を促すのである。

「理事長、この統制經濟の世の中で、日本の二大都市の東京と大阪の玄米白米の値開きが、倍も違つてゐるんだから驚くでせう。今大阪堂島の正米と、大阪市中の白米値段は五圓の開きにすぎないが、東京の深川の正米と東京市中の白米値段とは、十圓の開きを示してゐるんですよ。それは過去十年二十年にさかのぼつてさうなんだから、尙驚くでせう。私はこれから議會で、この問題を徹底的にやります」

「へえ、そんなことが本當にあるんですかね。驚いたな全く。うんとやつて下さいよ。さうしてみると、實際日本人ほど米のことをよく知らなすぎる國民はない、といふ結論になりますね。いやみつしりやりませう」

こんな會話の後間もなく、商工省は東京市中の白米價格を、一擧一石二圓がた値下げを嚴命し、十四年の秋には、全國白米玄米の値開きを四圓五十錢に公定した。これは數十年來大阪では實行されて

來たのに大體當つてをり、東京人は數十年間、五圓高い白米を食べてゐた勘定である。

米穀國策研究會は、十四年の六月頃までに兩院議員や實業家等百五十餘名の會員を獲得し、每議會に請願を提出し、また陳情書を近衞首相以下、農林、商工、厚生の各省大臣を初め、企畫院總裁を訪ねて提出し、更に各新聞社に働きかけるなど、大いに努力したのであつた。

節米問題から搗精度問題がやかましくなつた時などは、佐藤自ら陣頭に立つて大臣を歴訪し、時の農相とは口角泡を飛ばして米穀政策の誤りを痛論したのであつた。

「とう〳〵、白米價格統一も白米禁止も、目的を達しましたね、吉植さん。ところで白米食は禁止になつても、混砂搗精白が禁止にならないぢや、國民保健衞生上大問題です。私達は第一にこの問題を片づけねばなりませんね。それから米が穫れてゐながら、あの米の騒ぎは何事です。さあいよ〳〵われわれの働く時が來たんだ。私は東京に始終ゐられない體ですから、吉植さん、あなたしつかりやつて下さいよ」

佐藤はまるで叱るやうな口調で、くりかへし、くりかへし吉植に話し、別府に歸つて行つた。それは昭和十四年の暮で、佐藤の逝く半ケ月前であつた。

近衞首相以下關係各大臣に提出した佐藤の陳情書は、次の如きものであつた。

☆

昭和十四年十月九日

財團法人佐藤新興生活館
理事長　佐藤慶太郎

五分以上ノ搗精禁止ニ關スル上申

今回政府ニ於テ、食糧資源ノ確保並ニ國民體位向上ノ爲メ白米ノ常食ヲ禁止セラレントスルハ、國家ノ爲メ欣慶措ク能ハザル所ニ御座候。然ルニ禁止ノ搗精度ヲ七分以上トスベキカ、五分以上トスベキカガ、未ダ決定シ居ラザルハ洵ニ遺憾ニ堪ヘズ候。右ハ是非共五分以上ノ搗精ヲ禁止スベキモノナリト確認致候ニ付、本館ハ政府當局ニ於テ左記事項ノ實施ニ對シ、即時有效適切ナル方策ヲ講ゼラレンコトヲ切望シ、玆ニ及上申候也

記

一、速ニ米ノ五分以上ノ搗精ヲ禁止スル法令ヲ制定セラレタキコト。

## 混砂搗禁止並ニ淘洗廢止ニ關スル上申

米ノ混砂搗ガ國民ノ健康ニ大害アルコトハ既ニ榮養學者ノ間ニ定論トナレル所ニ御座候。又米ノ淘洗ガ榮養上並ニ食糧經濟上多大ノ損失アルコトモ、動カス能ハザル事實ニ御座候。今ヤ國民體位向上並ニ食糧資源ノ確保ハ、國家ノ最モ緊急ヲ要スル事項ニ有之候ニ付、幸ニ今般政府ニ於テ米ノ搗精度ヲ制限セラレントスルニ際シ、同時ニ左記事項ノ實施ニ對シテモ、有效適切ナル方策ヲ講ゼラレンコトヲ切望シ、玆ニ及上申候也

記

一、速ニ米ノ混砂搗ヲ禁止スル法令ヲ制定セラレタキコト。

二、米ノ淘洗ヲ行ハザル樣指導サレタキコト。

☆

明くれば、輝かしい紀元二千六百年である。聖詔は渙發せられ、一億國民は大御稜威の下、御民われ生けるしるしありとうたつた祖先の如く、民族の祭典に感激と忠誠を誓つた。その紀元の佳節に、財團法人佐藤新興生活館は、長き邊りより事業御奬勵の有難き思召を以て、金一封御下賜の光榮に浴した。

この光榮を、誰よりも感涙をうかべて拜受したであらう人は、僅か一ケ月前に地上を去つてゐた。生活館につらなる者の悲しみは深かつた。しかし國際情勢の緊迫は、いよ〳〵急である。國民生活の戰時生活體制への轉換は、速急にこれをなさなければならぬ。かくて役員會は滿場一致、嗣子與助を理事長に互選し、この非常時に對處することゝなり、貯蓄運動に、節米運動に、消費規正の基礎調査に、全館をあげての努力がなされた。

意義深い二千六百年の後半に出發した大政翼賛會は、この時局の要請する國民生活指導のために、國民生活指導部を設置した。こゝに生活館は、第一期的な單獨活動時代を終つて、この國家的な團體の一翼として一體的な活動をする時代を迎へたのである。即ち理事長佐藤與助は大阪翼賛會事務總長有馬頼寧に理事長を讓り、佐藤新興生活館は昭和十六年四月、財團名を大日本生活協會と改稱、新しき大施をかゝげて、再出發をすることになつた。掲げられた宣言と綱領は次の通りである。

## 新興生活宣言

わが日本は、今や國を擧げて、興亞の大業完遂に邁進してゐる。我等は宜しく八紘一宇の大理想を

昂揚し、億兆一心、公私生活の刷新向上に努め、以て聖業を翼賛し奉らなければならない。

飜つて、國民生活の實情を觀るに、其の個人生活と社會生活とを問はず、今尚舊慣陋習に囚はれ、物心兩面の生活に、矛盾不合理甚だ多く、殊に物質偏重に墮し、功利主義の生活を營む者少しとしない。かくては興隆日本の推進力を減退せしむること、洵に大なるものがある。

生活刷新の要諦は、かゝる自己中心の人生觀を建て直して、沒我獻身、感恩奉仕の皇道精神に更生し、此の大道に立ちて一切の生活を合理化するにある。これこそ國民の不安苦惱を解消し、國家を無限に進展せしむる根本動力である。

新興生活は、この原理に基き、生活の科學化、道德化、藝術化を圖り、進んで之を組織化し、協同化し、國民の總力を國家目的に歸一統合し、普く萬民同福の實を擧げんとするにある。

新興生活運動こそは、方に國家の待望、時代の要求である。同憂同感の士、希くば共に皇國の興隆と、人類の福祉とのために、奮つてこの運動に協力提携せられんことを。

## 新興生活綱領

一、我等は生活を通して天業を翼賛せんとす。

一、我等は人と物と時とを活かさんとす。

一、我等は健全なる家庭を建設せんとす。

一、我等は隣保相愛の實を擧げんとす。

一、我等は實踐躬行を生命となす。

☆

佐藤の描いた幻は、着々と實現され、新しい日本の生活文化は、年と共にます〳〵その枝を伸ばしその葉を繁らせてゐる。彼は生活運動のある限り、いつまでも先驅者として輝かしい榮譽と共に記憶され、國民生活の中に永遠に生きることであらう。

# 落

# 暉

# おもかげ

廣島で内地向の織物問屋を大きく營んでゐる立石吾一は、久しく慢性の胃腸病に惱んでゐたが、ある人のすゝめにより、昭和七年から毎年夏の間を、大分縣の湯の平溫泉で過すことにしてゐた。宿はいつも鶴屋本家であつた。

立石は勤勉力行、今日の大を築き上げた人物で、云はゞ立志傳中の人である。少年の日からたゝき上げた習慣は恐ろしいもので、朝五時になれば床の中にもぐつてゐることが苦痛になる。それで毎朝すぐ共同風呂にでかけた。ところがいつも一人の老人が彼と前後して、必ずやつてくる。

「やあ、お早よう」

とお互に挨拶したまゝで、無言の行が始まる。立石がふと相手の老人に注意し出したのは、その老人が手拭を浴槽に持ちこまぬことに氣がついてからである。老人は必ず汲出桶の中に手拭を入れて、樂しさうに半眼を閉ぢて浴槽につかつてゐるのである。そして出るときには、必ず洗場に湯を流し、

桶を片隅に直して行く。まるでその順序が、同じ型から出て來たやうに自分と同一である。立石は少からずこの老人に興味を持ち出した。

湯からあがると、立石は花鋏を持つて散歩に出る。山に入つて花を切り、歸つて佛に供へるのである。彼は花と茶に、少からざる憧れを持ち、多年眞劍に修養して來たのであつた。

花鋏を持つた朝の散歩に、必ず細い山道で出逢ふ老人があつた。たゞ一人ステッキを持つて歩いてゐる。廣くもない山谷のことゝて、時には二度も三度も出逢ふことがあつた。始めは默禮ですましてゐたが、度々のことゝて兩方から笑ひ出し、

「いや、また出逢ひましたなあ」

と云ひ合ふやうになつた。然し互に、相手がどこの誰であるかは知らなかつた。

立石は同宿の先輩顏の客から、湯の平には往年大火災があつて、殆んど全部落が燒失したとき、その復興に佐藤といふ人が資金を出したのだと聞かされ、またその人が東京府美術館に百萬圓の寄附をした人であることも聞き及んでゐたが、この老人がこの人であるとは氣づかなかつた。

朝の共同風呂と朝の散歩路で出逢ふこと三年、立石は始めて名乘りをあげてその人が佐藤慶太郎であることを知つた。それから急に互の部屋を往來するやうになつた。語れば語るほど大小の差こそあれ、相似た境遇である。殊に佐藤が歐洲大戰當時、約束を嚴守して目前の利益を顧みなかつた點などは、自分自身の體驗そのまゝであつた。

「男が一旦約束した以上、どんな苦しいことがあらうと實行すべきだと信じ、頑張り通しました。今日あるのは、すべてその時に得た信用の結果です」

立石は始めて自分の苦闘を理解してくれる相手を見出し、しみ〴〵と過ぎ越し方を樂しく思ひ浮べた。二人は直ちに、十年二十年の知己にも劣らぬ間柄となつたのである。

翌十年には、佐藤は新夫人を伴つてゐて、新しく始めた新興生活運動について、毎日のやうに立石と語つた。新夫人は茶の湯に深い趣味を持つてゐた。

立石は風流を談ずる相手の出來たことを、何にもまして喜んだ。立石は近づけば近づくほど、佐藤の生活振りに感心した。避暑に來てゐるといつても、佐藤は寸暇もなく働いてゐたからである。一年中の仕事の片づけと、健康建設が、佐藤の湯の平生活の目的であつた。この目的を達するためには、凡人の及ばぬ嚴格な生活をしてゐた。それはおよそ普通人の考へる湯治の觀念とは、正反對なものであつた。立石は驚異の眼を瞠つて、行者のやうなこの老人の生活を見つめたのである。或年立石はひどく痔疾に惱んで起居さへ自由にならなかつた。それを知つた佐藤は間斷なく見舞ひ、わざ〳〵別府

に電話して治療器具や藥を取寄せ、人には眞似の出來ない親切を盡した。立石はその溫い友情がしみ〴〵と身に泌みるのを覺えたのであつた。

立石には當時、高商を出た一人息子があつた。彼は息子がまだ小學生の時分から、日本一のよい嫁を探してやらうと、夢のやうな望みを抱いて育てゝ來た。知り合ひの誰彼に女の子が生れたときくとさつそくそれを見に出かけた。

「赤ン坊を見てわかりますか」

その熱心さにあきれたやうに、妻が云つても、

「わかるさ。まあ俺にまかしておけ。今に日本一の嫁を見つけるから」

立石にとつては、これは決して笑ひ事ではなかつたのである。それ位であるから、息子が高商を出たともなれば、氣が氣でなかつた。商用で出かけても、悴の嫁ばかり探し歩いてゐた。

ある時ふと福岡の中山石庭といふ人相鑑定家のところに立寄つた。そこに姉妹二人で撮した寫眞をもつて、見て貰ひに來てゐる人がゐた。のぞいてみると、妹はまだ小學生であるが、多年探し求めた幻の嫁にそつくりであつた。その寫眞の持主は、姉を見てもらひに來たのであるが、中山石庭もつく〴〵と妹の顏を見て、

「あゝいゝ人相だ」

と讃嘆した。それをみた立石は快心の微笑をもらした。さうして、どうしてもこの娘を悴の嫁に貰はねばならぬと決心した。寫眞の主の姓名を聞くと、たゞ「佐賀の窓の梅といふ酒屋の娘」とのみしかわからなかつた。

彼はさつそく佐賀縣下の或銀行に依頼して、窓の梅といふ銘酒を唯一の手掛りに、その娘の調査を開始した。間もなくそれは、佐賀市外久保田村の古賀家の次女であることがわかつた。それがわかると、すぐ親友の女學校長から佐賀の女學校長への紹介狀を貰ひ、悴の嫁の實地檢分に出かけたのである。

そのとき、日本一の嫁の候補者は、女學校の三年生であつた。未來の義父がそこに立つて見てゐるとも知らず、運動服も輕々とスポーツに熱中してゐた。立石は實物を見て、ます〴〵氣に入つてしまつた。申し分なしである。萬難を排して貰はうと決心した。

が困つたことには、佐賀縣下には先方を納得させるに足る知人がない。しかも先方は由緒ある舊家であり、自分以上の資產家である。これにはホトホト困つた。ぐづ〴〵してゐるうちに他へ決つては

大變である。思案に餘つて佐藤に持ちこんだのが、昭和十二年の夏、湯の平の滯在中であつた。

「立石さん、あんたの腕ならきつと出來る。まあやつてごらんなさい。最善の努力をして出來なかつたら、云つておいでなさい。及ばずながら考へませう」

佐藤からかう云はれてみると、みだりに人頼みをすべきでなかつたと思ひ直し、引き下つて八方手を盡してみたが、どうしても先方が耳を傾けてくれるに足る人物が見出せなかつた。遂に別府に出かけて、

「佐藤さん、私の力では及びません。どうか御盡力を願ひます」

と懇願した。すると佐藤は事もなげに、

「ぢや、佐賀縣知事に頼んであげませう」

と云ふ、立石は承服しかねた。浮草稼業の知事などに頼むべきでないと思つたからである。

「さあ、知事では困ります。土着の素封家でありませんか」

「佐賀にはない。しかし武雄ならある」

久保田は佐賀へ三里、武雄に五里といふ土地である。武雄なら結構である。「それでは是非」と頼むと、さつそく紹介狀を書いてくれた。武雄の素封家、蓬萊銀行の頭取石井良一宛のものであつた。

「その紹介狀を持つて石井を訪ねると、下へも置かぬ鄭重な取扱ひで、盡力の方もさつそく承諾してくれた。石井は當の「窓の梅」の遠緣に當つてゐた。彼は「窓の梅」の主と大阪高工時代同級であつた縣の釀造技師をして奔走せしめ、遂に話がまとまつた。實際の媒酌は、その技師の實兄である廣島の藝備銀行專務柳父昌一夫妻が當つた。立石はこのことを通して、今更のやうに佐藤の徹底した親切と、社會的な信用に敬服せざるを得なかつた。その後も佐藤の紹介によつて、二三のことに當つたのであるが、その行先に於て餘りの鄭重な優待に恐縮したことが度々であつた。

立石は佐藤の盡力によつて、幻に見た日本一の嫁を、悴のために射止めることが出來た。その嫁も今は既に二人の子の母となり、平和な明るい家庭の主婦となつてゐる。

佐藤の姉の子、末松寛藏は、佐藤に對して「ハガキ叔父さん」といふ尊稱を奉つてゐる。それほど佐藤はハガキを書いた。いつもハガキと萬年筆を手放さなかつた。どこでも、いつでも、暇さへあればそれを出しては、誰彼に書いてゐた。

佐藤の云ひ分によれば「よく人はホテルに電報を打つて宿泊の準備をさせるが、自分は通常の場合ハガキでその旨を傳へ、決して無駄な電報料を拂はないことにしてゐる。急に豫定を變更した止むを

得ないときだけ打電する。またハガキならば、簡單に用足しが出來、返事が遲れたり忘れたりすることもなく、まことに便利であり、食事の前後のやうな寸暇を利用しても數枚は書ける」と云ふのである。

來信に對しては、既知未知を問はず、必ず返信した。勿論ハガキである。「頭に借金を持つのはきらいだから」と云つて、手紙が來るとすぐその場で返事を書いた。

封書を書くのは、祕密の用件か、ハガキには書き切れぬ長い用件のときに限られてゐた。そんなことは減多になかつた。電報の如きも同樣で、大部分は十五字以內ですました。どんな長い電文も、佐藤の手にかゝると、魔法のやうに十五字に縮まつた。

末松は佐藤への返事を怠つてゐて「通信を怠ることは、甚だ宜しからぬことに候間、小生關係に限らず嚴格に被成度切望仕り候」と、さつそくハガキで叱られたことがある。

佐藤は每月上京の途上、先づ若松から門司までの間に一枚、下關から東京間に一枚乃至二枚、着京後は每日一枚宛、必ず留守宅にハガキを書いたものである。

末松宛の代表的なハガキを一枚揭げてみよう。

拜啓、小生妻同伴、明十八日若松に參り、晩景までに御宅へ着、一夜御世話に相成度候。明晩と明後朝は食事も頂く事に候處、これまでの如く種々馳走被下ては、却つて健康に宜しからず候間、一汁一菜に願上候。草々

佐藤はかうした事務的才能と共に理財の才にも惠まれてゐた。それだけに普通人からは極端と見えるまで、自らには節した人であつた。しかしそれは、單なる物惜しみでなく、確固たる信念の所產であつた。

例へば、佐藤にとつて慈善事業といふやうなことは、何の興味もなかつた。といふのは、人間はどんな者でも最善をつくしてやれば、相當の仕事は出來る筈である。それ故、眞に慈善事業によつて救濟されなければならぬ人間などといふものは、實際にはあまりない筈である。それにも拘らず、今日のやうに救濟されなければならぬ人間が多いのは、あまり救濟の手をさしのべすぎるから、働ける者も自然働かず、或は遠く慮らず弄放な生活をしたゝめの行き詰りで、云はゞ自業自得の結果である。とんなものを一々救助してゐては限りがない。そればかりではない、その結果は國家を自滅に導くものであると信じてゐた。

それ故、個々の貧困者に對して、物質的な救濟をするといつたことは殆んどなかつた。そのかはり彼等が自力で起ち上がるための道を開いてやることには、時間を惜まず親身な世話をした。

これと同じ論法で、名譽税的な寄附勸誘には、一切應じなかつた。地方の新聞雜誌の廣告掲載は全部謝絶した。周圍の者が心配して、

「十度に一度は出さぬと、ためになりませぬから」

とすゝめても笑つて相手にしなかつた。

「馬鹿云へ、俺は正々堂々と仕事をしてゐるではないか。彼等の御機嫌をとらねばならぬやうなことは、何一つない。打つちやつておけ」

佐藤は商取引に待合政策を用ひず成功した、珍らしい存在であつたのである。

佐藤は、すべて源に遡つて、根本的な對策をたてよう、さうした意味で國家的な必要面に、纏つたものを出さうと考へてゐたから、小さな個々の寄附は、實にあつさりと拒絶したのである。

東筑學舍の建設のときにも、寄附にからんだ面白い話がある。東筑學舍といふのは、現在の遠賀郡若松、八幡、戸畑出身學生のために建てられた寄宿舍で、東京戸山ケ原の畔にあり、鄕黨の大先輩添田壽一によつて始められたものである。

佐藤等の遊學してゐた當時、遠賀郡出身の學生は僅々十名であつた。それが集つて東筑鄕友會を起した。明治二十年の五月のことであつた。それが五十年續いて、財團法人の東筑學舍が建設されるまでになつたのである。

この寄附募集の始められたとき、會長の和田國次郎が佐藤に千圓出させやうと思つて、その相談を持ちかけた。和田は青年の日佐藤を東京に引つぱり出した一人である。

「佐藤、今度は君が筆頭になつて寄附してくれ」

「いや、俺は御免を蒙むる」

「何故だ」

「俺には俺の主義がある。その主義に合はんからだ」

「どんな主義だ」

「自分一人でならやるが、多勢の中の一人でやる小さなのは、絶對にやらんことにしてゐるのだ」

「さうか、仕方がないあきらめよう。しかしなあ佐藤、俺はまだ一度も、貴樣に無心したことはないぞ。成功して巨萬の富を積んだ貴樣に、五十年の昔遠賀川の畔から東京に貴樣を引つぱり出して來た友人の一人として、一生に一度位は無心をしてもいゝぢやないか」

「そりやいゝ」
「ぢや、俺に千圓くれ」
「うむ、君が欲しいならやらう。しかし、俺はその使ひ途については知らないよ」
かう云つて即座に金壹千圓也の小切手を書いた。和田はそれを佐藤の名で東筑學舍の寄附金へ繰り入れた。

佐藤の節約は有名である。
親友の石井良一は、北海道で鐵道を經營してゐたので、住居はお互に武雄と別府に離れてゐても、始終東京で落合ふ機會が多かつた。會うと二人とも若かつた昔の氣持が甦つて、元氣で話し合ふのである。
ある日話の末、何かのことからふと安全剃刀の話が出た。佐藤がきいた。
「君はどの刃を使つてゐるかね」
「僕は舶來を使つてゐる」
「そりや不經濟だ、よせ、よせ」

「ぢや、君は何を使つてゐるんだい」
「國產品を使つてゐる。一枚二錢、十枚で二十錢だ。君の使つてゐるもの〻十分の一だ」
「そんなもので役に立つかね」
「たつとも。僕は一枚の刃を二ケ月は使ふよ」
「ほう、どんな祕法があるのかね」
「なあに簡單さ。硬質硝子で出來てゐる砥石を使ふのだ。それで砥げば、毎日使つても使ひやうにもよるが、二ケ月乃至三ケ月は使へる」
「それはいくらのものかね」
「二十錢だ」
「どこにある」
「丸ビルの二階にある。案內しようか」
石井は佐藤とつれだつて丸ビルに行き、その砥石を買つた。それで刃を砥ぎながら、いつも感心するのである。これだから佐藤は金を殘したのだと。
佐藤はホテルに泊つても、決してハイヤーを呼ばなかつた。自分で外に出てから、流しの車を拾ふ